

『ティップス先生からの7つの提案』の開発

2005・10

名古屋大学高等教育研究センター



特色 G P シリーズ 3

『ティップス先生からの 7 つの提案』の開発

2005. 10

名古屋大学高等教育研究センター

特色G Pシリーズの刊行にあたって

名古屋大学高等教育研究センターは、1998年4月の創設以来、高等教育の質的向上を目指した研究・開発を行うとともに、その成果を、名古屋大学内にとどまらず、他大学・他センターをはじめとする学外諸機関に対しても積極的に公表してきました。幸い、その多くは、みなさまから広範な支持をいただくことができました。

こうした活動が評価され、2004年度には、文部科学省が推進する「特色ある大学教育支援プログラム」（特色G P）に、当センターが中心となって名古屋大学全体で取り組みを進めてきた「教員の自発的な授業改善の促進・支援—授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択されました。この取り組みは、教員が自ら進んで授業を改善する活動を促進することを目的としたものであり、授業改善の方法論の開発、そして具体的な実践手段の提供を通じて、授業改善に必要不可欠のスキルである「授業デザイン力」を、個々の教員が自分に適したやり方で身につけることを支援しようとするものです。特色G Pでは、これまでの取り組みの内容をさらに充実させるとともに、その成果を学内外に広く普及させることが課題です。当センターは、こうした課題を遂行するために、新たなプロジェクトを立ち上げました。これは、オンライン・ティーチングティップスである『成長するティップス先生』と、ウェブ上でシラバス作成を支援するツールである『ゴーイングシラバス』のさらなる充実・展開を中心に据え、さらに、これらに関連する試みとして、学生の学習支援のための「スタディティップス」の研究・開発、またこれらのツールを生かした新たなFDプログラムの研究・開発までも射程に含めるプロジェクトです。

当センターは、高等教育の現場で生じる諸課題に即応しうる研究・開発を目指してきました。したがって、本プロジェクトの最終的な成果の多くもまた、研修プログラム・サービス・ツールといった形で提供されることになります。しかしながら、こうした最終成果に至る過程で積み上げられた研究や作業それ自体にも、他の研究活動やプロジェクトへとつながる知見・示唆が少なからず含まれるものと考えられます。こうした点を踏まえて、われわれは、開発の最終成果のみならずそのプロセスをもこれまで以上に積極的に学内外に公表すべく、ここに「特色G Pシリーズ」を新たに刊行することにいたしました。

本シリーズを通じて、高等教育研究者をはじめ、授業改善に日々取り組んでおられる教育関係者、さらには高等教育に関心をお持ちの方など、広範な方々に当センターの情報を提供していく予定です。みなさまからのご意見・ご批判を頂戴し、今後の研究開発活動やその成果のいっそうの改善に役立てていきたいと考えております。どうかご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

2005年4月

高等教育研究センター長
戸田山 和久

はじめに

『ティップス先生からの7つの提案』は、学生、教員そして大学組織の3者がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアを、わかりやすい言葉でまとめたものです。

名古屋大学全学の取り組みである「教員の自発的な授業改善の促進・支援」が特色GPに採択されて以降、取り組みの中心的役割を担う高等教育研究センターでは、従来から行ってきた授業改善のための活動をさらに充実・発展させるための方策を、つねに考えてきました。とくに、その中でも、個々の教員の授業改善のためのヒント・ノウハウ集である『成長するティップス先生』の改善を優先課題として、これまでに多くの方々のご協力を得て、内容に関するアンケートを実施するとともに、その結果を踏まえて改訂版を2004年12月に発表してきました。その改訂プロセスの概要や、その中で明らかになった授業改善のための知見をまとめたものが、本特色GPシリーズの第1号です。

本書は、同シリーズの第3弾です。『ティップス先生からの7つの提案』に示した7つの提案とそれぞれの提案を具体化する7つのアイデアは、『成長するティップス先生』に示された内容や、改訂版を開発する過程で新たに蓄積した授業改善のための数多くのヒントやノウハウを、優先度の高いものを中心にぎりぎりの数まで絞り込んで提示したものです。その結果、誰にでも覚えやすく、また納得でき、実践しやすいものになったと確信します。その意味では、ティップス先生を成長させることができたと自負しています。

本書は、この『ティップス先生からの7つの提案』の開発過程の概要を示したものです。ティップス先生をさらに成長させるために、7つの提案・アイデアの本体とともに本書を、大学教育の改善に携わる一人でも多くの方が利用され、率直なご意見をお寄せくださることを期待しています。

夏目 達也

研究組織

(2005 年 9 月 30 日現在)

企画会議

戸田山 和久	名古屋大学 高等教育研究センター センター長
夏 目 達 也	名古屋大学 高等教育研究センター 教授
栗 本 英 和	名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
近 田 政 博	名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
中 井 俊 樹	名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
鳥 居 朋 子	名古屋大学 高等教育研究センター 講師
中 島 英 博	名古屋大学 高等教育研究センター 助手
青 山 佳 代	名古屋大学 高等教育研究センター 助手
井 上 和 美	名古屋大学 高等教育研究センター 専門職員

プロジェクトメンバー

戸田山 和久	
夏 目 達 也	
近 田 政 博	
中 井 俊 樹	(プロジェクトチーフ、報告書編集幹事)
鳥 居 朋 子	
中 島 英 博	
青 山 佳 代	
山 里 敬 也	(名古屋大学 エコトピア科学研究機構 助教授)
岡 田 啓	(名古屋大学 大学院工学研究科 助手)

プロジェクトアシスタント

青 柳 裕 子	名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
岡田 久樹子	名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
森 下 晴 美	名古屋大学 高等教育研究センター アシスタントスタッフ
久保田 祐歌	名古屋大学 大学院文学研究科 大学院生
小 林 克 希	名古屋大学 大学院情報科学研究科 大学院生
東 良 介	名古屋大学 大学院教育発達科学研究科 大学院生

目 次

はじめに

『ティップス先生からの7つの提案』の開発 1

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法 9

優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト 27

米国ミシガン大学における優れた授業実践および「7つの原則」の推奨 37

7つの原則に基づくウェブ活用授業の実践手法とその適用可能性 47

【最終成果物】

ティップス先生からの7つの提案〈教員編〉 55

ティップス先生からの7つの提案〈学生編〉 71

ティップス先生からの7つの提案〈大学編〉 87

【資料】

資料1 名古屋大学教養教育の授業実践事例の分類 103

資料2 名古屋大学の学生から後輩への学習アドバイス 131

資料3 名古屋大学の教員から新入生への学習アドバイス 143

資料4 学生の学習参加度を高めるための学生・教員・大学の役割 165

『ティップス先生からの7つの提案』の開発

中井 俊樹

1. はじめに

2005年9月に名古屋大学高等教育研究センターは、『ティップス先生からの7つの提案』（以降、『7提案』）という開発物を公開した（名古屋大学高等教育研究センター，2005c, 2005d, 2005e）。『7提案』は、教員編、学生編、大学編の3つの冊子から構成されている。また同時に、高等教育研究センターのウェブサイト上においても冊子の内容を公開している。本稿では、『7提案』の開発には、どのようなコンセプトがあったのか、開発物の背後にはどのような研究があったのか、さらにいかにして開発を進めたのか等を記録としてまとめ、今後の改訂に向けた資料とすることを目的とする。

「ティップス先生」という名称を使用しているように、『7提案』は高等教育研究センターが既に公開してきた『成長するティップス先生』と内容的に関連がある。『成長するティップス先生』は書籍版とウェブ版で公開している（池田他, 2001）。また、『成長するティップス先生』の初期の開発プロセスに関しては戸田山（2001）に、Ver1.1への改訂プロセスに関しては名古屋大学高等教育研究センター（2002）に、Ver1.2への改訂プロセスに関しては名古屋大学高等教育研究センター（2005b）に報告書としてまとめられているので参照されたい。

2. 開発の経緯

2.1 TIGER プロジェクト

文部科学省が推進する2004年度の「特色ある大学教育支援プログラム」に、高等教育研究センターを中心に名古屋大学で進めてきた「教員の自発的な授業改善の促進・支援－授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択された。この取り組みの一つの柱が、『成長するティップス先生』を通した授業改善のためのノウハウの公開と共有である。

高等教育研究センターでは、『成長するティップス先生』のさらなる改訂を目指して、2004年8月に開発グループを立ち上げた。そして本プロジェクトは、Tips, GEAr up, Research というキーワードから TIGER プロジェクトと名づけられた。

TIGER プロジェクトでは、2004年12月に『成長するティップス先生 Ver1.2』をホームページ上に公開することができた。この改訂は、『成長するティップス先生』の枠組みにそって、高等教育研究センターの近年の研究成果を中心に取り込んだものであった。これが TIGER プロジェクトの最初の成果である。この改訂と同時に TIGER プロジェクトにおいて構想していたのが『7提案』である。2005年1月からセンターのスタッフ全員が TIGER プロジェクトのメンバーになり、『7提案』の開発を進めた。

2.2 開発コンセプト

『7提案』は、主に5つのコンセプトに基づいて開発が行われた。それらは、①名古屋大学の教育改善に役に立つ具体的な実践ノウハウを示す、②専門分野や授業形態を越えた

実践ノウハウを広く共有しやすいように整理する、③教育改善に向けた学生・教員・大学組織の役割と責任を示す、④教育学の専門用語を必要としない表現を用いる、⑤短いページ数で気軽に読める形での配信方法を用いる、である。

3番目のコンセプトである「教育改善に向けた学生・教員・大学組織の役割と責任を示す」は、『7提案』の大きな特徴の一つである。なぜこのようなコンセプトを加えようとしたのかについてここでは説明したい。それは、すでに高等教育研究センターが開発してきた『成長するティップス先生』の開発経験と深く関連している。『成長するティップス先生』の書籍版のあとがき、およびウェブ版のコラム「授業を変えると大学は変わるのかなあ」において、『成長するティップス先生』の限界について次のように指摘している。

自分たちで作成したティップスについてこういうことを言うのもナンですが、わたしたちはこのティップスを過大評価してはいません。もちろん、わたしたち教師にとってさまざまな局面でティップスが助けになる、ないよりはあったほうが絶対によいに決まっているということは信じていますけれども。

しかし、しめくくりとして、ここではあえて、ティップスをはじめとする「それぞれの教員が自分の授業の腕を磨こう」路線がもちうるマイナス面についても触れておかねばなりません。そこで、かりにすべての大学教員がこのティップスを読み、自分の授業改善に乗り出したとしましょう。この結果、ひとつひとつの授業はとても内容豊かで、わかりやすく、学生に考える力を与えるようなものになったとします。あなたも快い充実感を感じることができでしょう。けれどもこれで、学生の4年間の大学教育全体に対する満足度をアップさせるのに十分でしょうか？ 大学が社会的使命を果たしたことになるでしょうか？

学生が現代の市民に必要とされる高度な知識と能力を身につけ、満足して社会に巣立ってもらうためには、個々の授業が充実していることはもちろんですが、彼らが4年間学ぶカリキュラムが、全体として整合的で明確な教育目標にもとづいたものであることが欠かせません。そしてこうした教育目標の明確化とカリキュラム全体の構築は、一人ひとりの教員の個人的努力でどうなるものでもありません。

さらに、われわれ教師が本腰を入れて授業改善に取り組もうとすると、とたんにさまざまな障害に出くわすことも明らかです。TAが足りない、カリキュラムが過密だ、会議に追われて提出物を十分にチェックできない……。ようするに、個々の教師が本当によりよい授業を行っていくためには、大学全体での教育目標の構築と、制度的・財政的基盤の構築という、大学全体として取り組むほかにはない作業が前提条件として必要になるということです。このような状況下では、「教師はみんな授業の腕を磨こう。授業がよくなれば大学はよくなるのだから」という掛け声は、ひょっとしたら、こうした真の授業改善のための基盤構築から眼をそらし、問題をそれぞれの教師の個人的努力へと還元してしまうことになるかもしれません。

むしろ、わたしたちの希望は次のことです。このティップスには、今日からできるノウハウもたくさん詰まっています。今日できることは今日からやってみましょう。それで、あなたの悩みはいくぶん軽くなることでしょう。そして、授業をよくすることが楽しくなってきたら、次にはあなたの授業をさらによくすることを阻止している要因に目を向け、それを改善するためにすこしでも力を尽くしていこうではありませんか。このティップスが、そのためのささやかなきっかけになることを祈っています。

このように、大学の組織的取り組みなしで教員の個人的努力に授業改善のすべての責任を求めることにつながることの危険性を示した。これは、教員が個人でできるノウハウを

提供する『成長するティップス先生』の枠組みがもつ限界である。

教員が授業改善の主要アクターであることは間違いないであろう。しかし、それは教員のみが授業改善のアクターであるということを意味しない。大学組織は、大学の教育目標にそった整合的なカリキュラムの設計、授業環境の整備、教員の授業サポートなどの形で授業改善に関わることができる。また、学生も授業改善のアクターと見なすこともできるだろう。教員や大学組織が授業改善を進めたとしても、最終的に学生が主体的に大学教育に参加しなければ教育効果は限定的なものになるだろう。さらに、広くとらえれば、文部科学省や外部評価機関なども、教育政策や評価活動の実施などを通じて大学の授業に関わっていると言える。このように大学の授業を取り巻くアクターは実際には多数存在していると見なせる。

『7提案』においては、授業改善の主要アクターとして教員・学生・大学の三者を取りあげることにし、それぞれ授業改善にどのような取り組みができるのかを示すことを試みた。結果として、教員・学生・大学のそれぞれの役割と責任が明示化されバランスのよい授業改善の実践に結びつくのではと考えたのである。

3. 開発に向けた調査活動

『7提案』の開発に向けて大学における教授・学習に関する調査活動を進めてきた。調査活動は主に3つのコンポーネントに分類される。それは、①『優れた授業実践のための7つの原則』に関する調査、②『優れた授業実践のための7つの原則』の名古屋大学への適応可能性調査、③名古屋大学の教育実践の分析である。

3.1 『優れた授業実践のための7つの原則』に関する調査

『7提案』の開発構想のきっかけとなったのは、1980年代後半から米国高等教育学会（American Association for Higher Education）の研究グループを中心に開発された『優れた授業実践のための7つの原則』（Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, 以降、7原則）である。『7原則』は、7つの原則に関する概要、教員向け冊子（Faculty Inventory）、大学組織向け冊子（Institutional Inventory）、学生向け冊子（Student Inventory）の4つの開発物から構成されている。1987年3月号の米国高等教育学会会報（AAHE Bulletin）に概要が発表され、1989年に教員向け冊子と大学組織向け冊子、1992年に学生向け冊子が発表されている。携帯に適したサイズで、簡素な製本で十数頁にまとめられたこれらの冊子は、米国、英国、カナダで20万部以上配布され、全米の多くの大学において教員研修などで活用されている。

『7原則』の特徴と三者のチェックリスト項目に関しては、中島・中井（2005）にまとめて紹介した（本報告書 27~36 ページに再掲）。7つの原則は、①学生と教員のコンタクトを促す、②学生間で協力する機会を増やす、③能動的に学習させる手法を使う、④素早いフィードバックを与える、⑤学習に要する時間の大切さを強調する、⑥学生に高い期待を伝える、⑦多様な才能と学習方法を尊重する、から構成される。

さらに、『7原則』の原則にそって全米のさまざまな大学において教員の独自の実践手法がまとめられていることがわかった。それらの教員の実践手法を抽出し整理しその特徴を中井・中島（2005）においてまとめた（本報告書 9~25 ページに再掲）。これらの調査によ

って、アメリカで開発された7つの原則が、実践手法を束ねる枠組みとして有効であることが明らかにされた。また、望ましい大学教員像としては、単なる知識伝達者としての狭義の教員像ではない広く学生の発達に関与する教員像が反映されていることが明らかにされた。

3.2 『優れた授業実践のための7つの原則』の名古屋大学への適応可能性調査

米国において開発された『7原則』は、あらゆる学問分野の教員が利用可能なことをコンセプトとして作成された。また、利用の広がりを見る限り、さまざまなタイプの大学において有効であったとも推測できる。このような学問分野や大学の属性を超えた教育改善の指針と方法は、はたして国境をも越えて有効なのであるかという疑問にたどりつく。そこで、アメリカで開発された『7原則』が、日本の大学の教育現場ではどのような意味を持つのか、そしてどの程度名古屋大学の授業実践において適応できるのかを明らかにするために調査を行った。

具体的には、『7原則』の学生・教員・大学の三者のチェックリストの項目を用いて学生・教員・大学執行部対象に調査票を作成し、項目を現在実践しているかについて、そして項目を名古屋大学の学生・教員・大学組織が実践すべきかについての回答を収集した。

調査結果からいくつかの示唆が得られた。まず、米国版の『7原則』に示された実践手法の多くが、名古屋大学においても概ね適用可能であることが明らかにされた。現在ほとんど実践していないが実践すべきであるとの回答を得た項目も少なくなく、現状の教育実践を改善する内容として有効であると言える。さらに、米国版の『7原則』に示された実践手法の中には、制度や文化の違いなどから名古屋大学に適用するにあたり改善すべき項目も明らかにされた。これらの調査結果については日本高等教育学会第8回大会（2005年5月）において発表した（本報告書165~198ページに関連資料）。

3.3 名古屋大学の教育実践の分析

名古屋大学では、教養教育の授業における個々の教員の実践における工夫などを事例集として報告書にまとめている（名古屋大学教養教育院, 1998-2005）。この過去の報告書から授業の具体的な工夫を抽出し、『7原則』で提示された7つの原則にそって分類した（本報告書103~130ページ参照）。その結果、教員が実践している工夫の大部分が7つの原則の枠組みの中に分類された。また、7つの原則に含まれなかったものはその他という項目の中に入れた。

また高等教育研究センターでは、スタディティップスの開発に向けて、学生の大学における実践ノウハウや教員から学生への具体的アドバイスを蓄積してきた（名古屋大学高等教育研究センター, 2005a）。それらの実践の工夫を7原則にそって分類し、どのような要素があるのかを明らかにした（本報告書131~164ページ参照）。

4. 開発のプロセス

以上の調査活動の成果に基づき、名古屋大学の教育現場に適した『7提案』の最終成果物を開発することになった。その開発のプロセスを、①原則と実践アイデアの決定、②最終成果物の形態とコンセプト、③最終成果物の名称、④センターの他の開発物との関係

の4つの側面から振り返る。

4.1 原則と実践アイディアの決定

アメリカ版『7原則』と同様に原則のような枠組みと実践アイディアをセットにするという方針で進めることはプロジェクトの早期に決定していたが、どの原則をいくつ採用し、どのような実践アイディアをどれだけ採用するかについては、開発グループで何度も議論を行った。

『7提案』の原則を決定するにあたっては、以下のような点が考慮された。第一に、これまでの調査活動から、アメリカ版の原則が概ね名古屋大学においても適応可能性が高いことが明らかにされた。実践アイディアのレベルでは名古屋大学にはふさわしくない項目はいくつか見られたが、原則レベルでは特に必要がないと指摘されたものはなかった。さらに、名古屋大学の実践アイディアの事例分析によって、教育実践の工夫の多くはアメリカ版の7つの原則に分類された。

第二に、大学の教育方針との整合性をとることを目指した。名古屋大学の教養教育院では、全学教育科目の担当者へのガイドラインが設定されている。それは、①明確な学習目標を定め学生に周知しましょう、②学習者が自発的に学習できる授業にしましょう、③教師と学生及び学生相互のコミュニケーションを促進しましょう、④学習者の多様性に配慮した授業にしましょう、⑤授業改善のためのスキルを磨きましょう、から構成される。

第三に、教員編、学生編、大学編の3冊子の原則の相互の整合性がとれることを目標とした。アメリカ版の『7原則』は教員用冊子と大学用冊子が初めに作成されて、その後に学生用冊子が作成された。また、大学用冊子は、教員用冊子のように原則別に分類されていない。本プロジェクトでは同時に3冊子を開発するという利点を活かし、3者の役割の整合性をとることを試みた。

以上のような点を考慮し開発スタッフで十分に検討した結果、表1のような枠組みを用いることにした。

表1 教員編・学生編・大学編のそれぞれの提案

教員版	学生版	大学版
学生と接する機会を増やす	教員と接する機会を増やす	学生と教員が接する機会を増やす
学生間で協力して学習させる	他の学生と協力して学習する	学生間で協力して学習させる
学生を主体的に学習させる	主体的に学習を進める	学生を主体的に学習させる
学習の進み具合をふりかえらせる	学習の進み具合をふりかえる	学習の進み具合をふりかえらせる
学習に要する時間を大切にする	学習に要する時間を大切にする	学習に要する時間を大切にする
学生に高い期待を寄せる	意欲的な目標に挑戦する	学生に高い期待を寄せる
学生の多様性を尊重する	異なる考え方や背景を尊重する	学生の多様性を尊重する

このような枠組みのもとに、名古屋大学において有効性の高いと考えられる実践アイディアを整理することにした。実践アイディアの抽出においては、名古屋大学の教員対象のアンケートによって、授業で取り入れてみたいという回答の多かった項目を優先した。プ

ロセスとしては、各枠組みのもとに約 20 項目の候補を列挙し、それを教員・学生・大学組織間の整合性をとりながら、最終的にはそれぞれ 7 項目のみに絞ってまとめた。

4.2 最終成果物の形態とコンセプト

最終的な成果物の形は本報告書 55 ページから 101 ページの通りである。教員編・学生編・大学編の 3 冊子とし、それぞれ 12 ページの簡潔なものにまとめた。ティップス先生という名称を入れたため、これまで『成長するティップス先生』で掲載したイラストを利用した。

最終成果物では、内容においていくつか注意した点がある。まずは、この冊子は教育評価の基準を提供するものでないという点を強調した。アメリカ版『7原則』では、それぞれの実践手法に対して 5 段階で個々の授業実践を評価できるようなフォーマットになっているが、そのような形は名古屋版ではとらなかった。評価色を薄めて、教員間のアイディアの共有という目的を重視したほうが名古屋大学では適切だと考えたからである。同様な理由で原則（principle）というやや強く感じる言葉を使わずに、提案という言葉を使用した。そして、冊子の目的は名古屋大学に埋もれていた優れた教育実践とそのための知恵を明示化し、大学の全構成員が共有するための枠組みを提供することにあると強調した。

また、優れた授業を通して教育効果を高めるためには、学生・教員・大学組織の三者の努力が同じ方向に向かって統合されていく必要があるということも強調した点である。そのわかりやすい例として、オフィスアワーによる教育実践における三者の役割を説明文で示した。

4.3 最終成果物の名称

本プロジェクトの最終成果物の名称を何に決定するかについては、センタースタッフでアイディアを出し合った。次のような案がスタッフからあげられた。「ユニバーシティデザイン 7 原則—名古屋大学の教育の質的向上に向けた教員・学生・大学の役割」、「U L T R A 7」、「5 レンジャー」、「学士課程教育を活性化する 7 つの秘訣」、「授業をおもしろくする 7 つの秘訣」、「名古屋大学の授業に満足するための 7 つの秘訣」、「全学協力式授業宣言!」、「ワールドクラスの教育に参加する 7 原則」、「授業でつなぐ学生・教員・大学ネットワーク」、「おいしい大学のための簡単レシピ」、「ティップス先生の 7 つの法則」、「ティップス先生の 7 つの提案」である。最終的には、7 月 25 日における開発スタッフ全員が集合した会議において、「ティップス先生からの 7 つの提案」に決定した。3 分冊のそれぞれは、「ティップス先生からの 7 つの提案〈教員編〉」、「ティップス先生からの 7 つの提案〈学生編〉」、「ティップス先生からの 7 つの提案〈大学編〉」と呼ぶことにした。

4.4 センターの他の開発物との関係

『7 提案』は、「ティップス先生からの 7 つの提案」という名称をつけたように、これまで高等教育研究センターが開発してきた『成長するティップス先生』と関連がある。特に教員編の冊子は教育改善のための具体的なアイディアの部分に『成長するティップス先生』と重複する要素がある。共通する要素はあるものの、その分類方法が異なると言えよう。『成長するティップス先生』では、場面別・時系列別にノウハウが整理されたが、『7 提案』

では、学習理論別にノウハウが整理された。教員の中には、場面別・時系列別の整理を好む者もいれば、学習理論別の整理を好む者もいるのではないかという思惑があった。さらに、12 ページという気軽に読める小冊子もこれまでの開発物と異なる点である。

また、高等教育研究センターで試作版を開発した『名古屋大学新入生のためのスタディティップス』とも関連がある。『7 提案』の学生編は、学生のためのスタディティップスと見なすことができる。現在スタディティップスは試作版の段階なので、『7 提案』の成果の一部は、2006 年 3 月に完成を目指すスタディティップスに反映できるのではないかと考えられる。

『7 提案』は学生・教員・大学組織の三者の役割と具体的な実践方法を整理した点に特徴があり、『成長するティップス先生』と開発中のスタディティップスのそれぞれの枠組みの中ではできない教育改善の統合的なアプローチを示すことができる。『7 提案』は、高等教育研究センターの開発物と重複する部分はあるが、相互に補完的な関係にあるとも言える。

5. 到達点と残された課題

『7 提案』を制作するきっかけになったのは、米国高等教育学会で開発された『7 原則』であった。この原則を参考にしながら、名古屋大学における調査活動の結果を反映することで名古屋大学に適用可能性の高いものとなった。最終的には、アメリカの大学の現場を背景に開発された『7 原則』とは異なったオリジナリティの高い冊子が作成できたと言える。それを可能とした要因としては、高等教育研究センターに教授・学習に関する理論と実践の研究蓄積があったこと、開発物の対象を名古屋大学という一つの大学を念頭において開発を進めたこと、現場からの適切なフィードバックを得ることができたこと、3 つの冊子を相互に整合的に開発することができたことなどが挙げられる。『7 提案』のような開発は日本の大学において初めての試みであり、大きな意義があると考えられる。

今後の課題としてここでは二点を挙げたい。第一に、ファカルティディベロップメントへの適用である。『7 提案』は初めて読む人にもわかりやすく整理されているため、ファカルティディベロップメントにも利用されやすいと考えられる。ただ冊子を教員や学生に配布するだけでなく、ファカルティディベロップメントの中でどのようにして有効活用ができるのかの経験を蓄積する必要がある。第二に、内容自体の改訂である。今回の冊子は第一版にすぎない。名古屋大学の中で多様なフィードバックをもらうことで、次のバージョンアップが見えてくると思われる。授業のアイデアはまだ個々の教員の中に埋もれていると考えられる。それらを掘り起こして共有するために改訂を進めていく必要があろう。

参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部。
- 戸田山和久編（2001）『大学新入生の実態に即した教授技法の開発に関する調査研究』平成 11・12 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究実績報告書、名古屋大学。
- 中井俊樹・中島英博（2005）「優れた授業実践のための 7 つの原則とその実践手法」『名古

- 屋高等教育研究』第5号, 283-299 頁.
- 中島英博・中井俊樹 (2005) 「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, 71-80 頁.
- 名古屋大学教養教育院 (1998-2005) 『豊かな教養教育を目指してー共通教育の方針・事例集』各年度版.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2002) 『「成長するティップス先生」の記録 2001.04-2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005a) 『初年次オリエンテーションを支援するスタディティップスの開発と活用に関する事業』平成16年度学生支援特別経費成果報告書.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005b) 『実践的の大学教授法の開発を目指してー「成長するティップス先生」の記録 2004.08-2005.03』特色GPシリーズ1号.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005c) 『ティップス先生からの7つの提案〈学生編〉』.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005d) 『ティップス先生からの7つの提案〈教員編〉』.
- 名古屋大学高等教育研究センター (2005e) 『ティップス先生からの7つの提案〈大学編〉』.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989a) *Faculty Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989b) *Institutional Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1992c) *Student Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

中 井 俊 樹*

中 島 英 博**

<要 旨>

本稿では、米国で開発された「優れた授業実践のための7つの原則」の開発成果とこの原則を実現する実践手法の特徴を明らかにする。明らかにされたことは以下のようにまとめられる。

米国高等教育学会の研究グループを中心に開発された「優れた授業実践のための7つの原則」は、これまでの教授法研究の成果が教員にとって利用しやすい形でまとめられているため、全米の大学に広く普及している。対応する実践手法は各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されていることがウェブ上で確認される。また、各大学に蓄積されている実践手法を収集することによって、どのような授業においても実践できる学問分野に依存しない教授法が相当量存在し、7つのそれぞれの原則は実践手法を束ねる枠組みとしてバランスのとれた原則であることが確認される。さらに、実践手法には学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような行動が含まれており、単なる知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されていることがわかる。

1. はじめに

どのような教師の働きかけが大学生の学習を促進するのであろうか。この課題に対し、これまでに学会などにおいて大学教授法研究が積み重ねられ、大学生の学習成果の向上に影響を与える教授法が抽出されている。抽出された教授法は、ファカルティ・ディベロップメントなどの活動によっ

* 名古屋大学高等教育研究センター・助教授

** 名古屋大学高等教育研究センター・助手

本稿は、『名古屋高等教育研究』第5号(2005)283-299頁に所収されたものを許可を得て再掲したものである。

て大学教員の間で共有されつつある。しかし、個々の教授法を実現する具体的な実践手法については、多くの大学教授法の研究において対象に含まれておらず、具体的な実践手法は研究的視点から整理されていないのが現状である。

個々の教授法は、抽象性の高いものから具体性の高いものまでさまざまなレベルにあると見なせる。本稿では、図1のように「教授法の理論」と「実践手法」に二分化することによって、抽象度の異なる教授法の整理を試みる。例をあげると、「教員と学生のコミュニケーションは学習効果を高める」は教授法の理論であり、それを実現する「授業終了後、しばらく教室に残る」や「メーリングリストで授業内容に関連した情報を学生に送る」などは実践手法である。

近年、大学教育の現場で求められているものは、抽象性の高い「教授法の理論」以上に、それを実現する「実践手法」である¹⁾。どのように授業を設計するのか、どのように学生とコミュニケーションをとるのか、どのように学生を評価するのかなどの具体的な実践手法が求められてきていると言える。

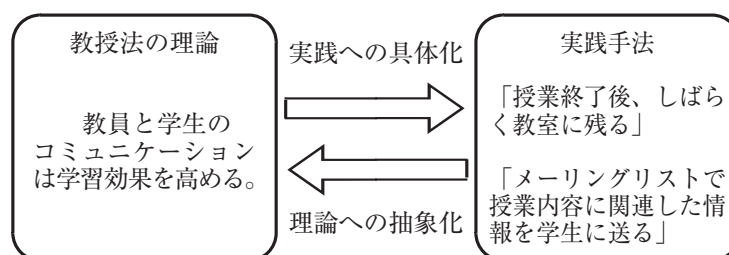


図1 教授法の理論と実践手法

国内においても授業改善のための実践的な手法に関する研究プロジェクトが見られるようになってきている。その一つは池田他(2001)による『成長するティップス先生』であり、これは大学教育における授業改善のための考え方や手法の提供を意図したものである。また、日本数学会(2000)は、「受講生が多い場合どうするか」、「欠席・遅刻をなくす方策」などの問題別解決策をまとめ、授業改善の手法の提供を試みている。

これらの試みは、全国の大学においてファカルティ・ディベロップメント活動が推進されるにつれ、一定の有効性が認められている²⁾。しかし、これらの試みにも次の2つの点で課題が残されていると見ることもでき

る。第一に、提供されている実践手法が十分な具体性を備えていないという点である。そのため、特に教育学を専門としない教員には、授業改善において何が重要であるかを理解するヒントにとどまり、どのように行動すれば授業改善に結びつくのかについて明示されていない場合が多い³⁾。第二に、提供されている実践手法が、必ずしも教授法の理論に基づいて構造化されていないという点である。そのため、授業改善においてどのような教授法の理論が重要なのかについて整理されていない。また、教授法の理論を具体化するための実践手法にどのようなものがあるのか、逆に具体的な実践手法はどのような理論に基づいているのかなどについて明確に示されていない。

米国における大学教授法研究においては、教授法の理論と実践手法という視点に基づいた研究が蓄積されている。その中心的研究は、Chickering and Gamson(1987)による「優れた授業実践のための7つの原則」(以降、7つの原則)研究とそれに対応した実践手法研究である。「7つの原則」は、全米の多くの大学におけるFD活動に利用され、現場の大学教員の認知度が高い研究成果である。

本稿では、米国で開発された「7つの原則」とそれを具体化する実践手法の特徴を明らかにし、日本の大学における授業現場への適用可能性を検討するための素材を提供することを試みる。具体的には、「7つの原則」の開発とこれまでの成果を明らかにし、全米の大学等で蓄積されている「7つの原則」に基づく実践手法の抽出を行うことで、実践手法の特徴を明らかにすることを本稿の目的とする。

以下では、本稿の目的にそって次のような構成をとる。まず第2節では、「7つの原則」の開発とこれまでの成果を既存の文献からまとめる。第3節では、全米の大学で蓄積されている「7つの原則」に対応した実践手法を抽出しその特徴をまとめる。第4節では、本稿で明らかにされたことをまとめ、今後の課題を考察する。

2. 「優れた授業実践のための7つの原則」の開発と成果

「7つの原則」は、1980年代後半から米国高等教育学会(American Association for Higher Education)の研究グループを中心に開発されたものである。この成果は、全米の大学関係者の間で最も認知度の高い教授法であり、現在でも全米をはじめ世界の多くの大学で活用されている。なぜ

これほどまでに「7つの原則」が普及しているかという背景は、関連するさまざまな文献から推測することができる。

ChickeringとGamsonを中心とする研究グループの問題意識は、学士課程教育の質的向上を効果的に促進するための方法論にあった。その解決方法として、彼らは以下のコンセプトから教授法の原則をまとめることを試みた。それは、(1)それまでの教授法研究の成果をふまえたもので、(2)誰でも覚えられるように5から9の原則に集約し、(3)原則が抽象的になりすぎないように配慮し、実践的な例を束ねた枠組みとしてまとめることで、(4)教員をはじめ事務職員、大学執行部などすべての大学関係者に届くような形でまとめるというものである(Gamson, 1991, pp.5-9)。

「7つの原則」の発表以前においても、大学における教育の質的向上に関する研究はさまざまな形で行なわれていた。しかしながら、それらの研究成果は多くの大学の教員が利用しやすい形でまとめられていなかった。このような状況の下で、研究グループは、教員をはじめ大学の構成員が実践可能なガイドラインの開発の必要性を感じていた。

優れた授業実践を実現するための基礎となるコンセプトは「学生を学習に巻き込むこと」(Involvement)であることは、Astin(1984)やFeldman(1997)などの研究成果が示している。研究グループはこのコンセプトを重視して、1987年に7つの原則にまとめ、表1のように現場の教員に示した(Chickering and Gamson, 1987)。

表1 「優れた授業実践のための7つの原則」

-
1. 学生と教員のコンタクトを促す
 2. 学生間で協力する機会を増やす
 3. 能動的に学習させる手法を使う
 4. 素早いフィードバックを与える
 5. 学習に要する時間の大切さを強調する
 6. 学生に高い期待を伝える
 7. 多様な才能と学習方法を尊重する
-

研究グループは、これらの原則をどのように現場の教員に還元するかについてのコンセプトも持っていた。それは、(1)あらゆる学問分野の教員が利用可能なこと、(2)専門用語を使わないこと、(3)すべての教員が実践できるような行動として示すこと、(4)それらをすべての教員に届くよう

1つの原則につき1ページ程度でまとめて提供することである(Gamson, 1991, pp.7-10)。このようにして、教授法の原則とそれに対応する実践手法をわかりやすく示したことが、全米の多くの大学で受け入れられることとなった重要な要因の一つと言える⁴⁾。

3. 7つの原則に対応した実践手法とその特徴

「7つの原則」の有効性などに関する研究は、研究論文の形で発表されている⁵⁾。しかしながら、実践手法自体の多くは、必ずしも研究論文という一般化された形ではなく、各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されている。このような実践手法の収集は困難である面もあるが、いくつかの大学では教育支援組織によって教員向け実践手法集として提供されている。本稿では、こうした機関レベルで提供されている実践手法に注目し、その収集を試みる。

実践手法の多くは、教員の利便性を考慮して現在ではウェブを通じて提供されている。ここでは、ウェブを通じて入手できる資料から、包括的にまとめられた10の資料(文末の資料1参照)を抜粋し、実践手法をまとめる。10の資料に限定したのは、「7つの原則」に対応した実践手法のサイトは膨大な量存在することと、選択した10の資料の実践手法で内容がおおむね網羅すると判断したためである。

まず、収集した資料にリストアップされた実践手法をすべて翻訳し、いくつかの資料で重複する手法の一つにまとめる。その上で、教員の行動として示すことができない抽象度の高いものを捨象して整理する。こうして、まとめられたものが表2の7つの教授法の原則に基づく実践手法である。

表2にまとめられた実践手法から次のようなことがわかる。第一に、どの学問分野の授業においても教員が実践できるような手法が相当量存在するということである。実践手法の収集プロセスにおいて、各大学において蓄積された実践手法に重複はあったが、各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されていることが再確認された。始めにChickeringとGamsonが教員用チェックリストとしてまとめられた実践手法は、原則毎に10項目で合計70項目であった。しかし、各大学において蓄積されている実践手法は合計で239項目に達することがわかった。

第二に、各教授法の原則に対する実践手法の数にそれほど差がつかなかったことである。最も実践手法が多く抽出された原則は、「素早いフィー

ドバックを与える」の44個であり、一方最も実践手法が少なく抽出された原則は、「多様な才能と学習方法を尊重する」の27個である。7つの原則が実践手法を束ねる枠組みとしてバランスのよいものであることが確認された。

第三に、複数の原則に対応した実践手法があることである。たとえば、学生の自己紹介は、「学生と教員のコンタクトを促す」ための手法であり、同時に「学生間で協力する機会を増やす」ための手法である。同様に、オフィスアワーは、「学生と教員のコンタクトを促す」ための手法であり、同時に「素早いフィードバックを与える」ための手法である。このように1つの実践手法が複数の教授法の原則に対応する場合があることが確認された。

第四に、実践手法は教室内での教授法という範囲を超えたものが多数あるということである。たとえば、「学生と教員のコンタクトを促す」という教授法の原則の中には、「学生が主催するイベントに参加する」、「学生が他の教員とネットワークができる機会を与える」、「教室間を学生と一緒に歩く」など学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような実践手法がある。このように単なる教室の中の知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されている。

表2 7つの原則に基づく実践手法

1. 学生と教員のコンタクトを促す

- ・ 学生が研究室に立ち寄ることをすすめる
- ・ 自分の過去の経験や考え方などを学生に話す
- ・ その分野の就職情報やキャリア形成などのアドバイスをする
- ・ 学生が主催するイベントに参加する
- ・ 学生のカリキュラム外の活動や大学外の生活について知る
- ・ 授業開始2週間目までに学生の名前を覚える
- ・ 学生に非公式のアドバイザーとして接する
- ・ 学生に自分の領域の学会や研究会などに連れて行く
- ・ 学生がキャンパスで問題に巻き込まれたときには、解決にむけて助けに行く
- ・ 学生とeメールでコミュニケーションする
- ・ 初日の授業が始まる前に学生にウェルカムレターを送る
- ・ 授業の後で学生に個人的に話す
- ・ 学生をひとりの人間として接する
- ・ 学生にとって便利なオフィスアワーをつくる
- ・ 学生に自己紹介をさせる

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

- ・アイスブレイキングのテクニックを使う
- ・ユーモアをはさむ
- ・可動式の机や椅子を使って学生との距離を調節する
- ・試験が終わった後、フィードバックを与えるために研究室に来ることをすすめる
- ・学生のクラブ活動などの顧問になったり、観戦したりする
- ・クラス内外で社会的な交流を進める機会を設ける
- ・教室間を学生と一緒に歩く
- ・オープン・ドア・ポリシーを伝える
- ・家族の許可をとって、かけてよい時間帯を教えて、自宅の電話番号を伝える
- ・学生の課題に対して、個別のフィードバックを与える
- ・学生から情報を提供してもらう
- ・学生が他の教員とネットワークができる機会を与える
- ・他の教員の意見や研究内容を教える
- ・授業が終わった後に、すぐ帰らない
- ・授業についていけない学生や欠席の多い学生を知る
- ・自分と異なる文化をもった学生にも合わせるように努力する
- ・メーリングリストや電子掲示板を利用する
- ・eメールで質問がきたら、学生の名前は伏せて全員に答える
- ・自分の研究内容について話す
- ・学生が興味のあるような学外の活動を紹介する
- ・学生が自分の考え方を述べたりディスカッションに参加することをすすめる
- ・ワン・ミニット・ペーパーを使って学生からフィードバックをとる
- ・メールでのディスカッショングループをつくる

2. 学生間で協力する機会を増やす

- ・お互いファーストネームで呼ぶようにする
- ・学生に自己紹介をさせる
- ・学生間で今興味のあることや過去の経験などを話させる
- ・授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒にいることをすすめる
- ・難しい概念を学生間で説明させる
- ・学生間で完成した課題の良かった点を指摘させあう
- ・重要な概念について学習歴や考え方の異なる学生間で議論させる
- ・出身や文化の異なる学生で作業グループを作る
- ・学生に学内のサークルや委員会に一つ以上所属するようにすすめる
- ・他の学生に教えることが自分の成績を下げるにつながらないことを伝える
- ・学生間でそれぞれの課題の批判、添削、評価を行わせる
- ・少人数で予備ディスカッションをしてからディスカッションを行なう
- ・授業時間の内外で共同で行う課題を出す

- ・グループのメンバーをときどき入れ替える
- ・チューターセンターやピアサポーターを訪問・活用させる
- ・メールや電子掲示板などのコミュニケーションツールを使う
- ・多人数の授業でもお互いに学ぶ機会を設ける
- ・共同作業の最中はなるべく学生に任せる
- ・学生が提出したレポートや成果物をクラスの学生で共有する
- ・グループ活動は自発性に任せずに教員が設計する
- ・学生間で考え方を共有することが大事であると伝える
- ・学生の質問には個人的に応えずに全員に答える
- ・初回の授業では学生がお互いを知り合える活動を取り入れる
- ・試験前や課題提出前にはグループで勉強するように呼びかける
- ・学生がお互いに信頼し尊敬できるように励ます
- ・初回の授業で学生がお互いに持っている問題意識を質問しあう
- ・電子掲示板はグループ専用のものを用意してあげる
- ・グループディスカッションでは人物ではなく意見を批判するように伝える
- ・前の学期の学生がグループで話していたことを今の学生に伝える

3. 能動的に学習させる手法を使う

- ・学生に授業に期待することを述べさせる
- ・学んだことを他の学生に教えさせる
- ・授業のはじめに問題提起をして授業に臨む準備を促す
- ・授業の中で学生の成果を共有させる
- ・異なる理論家、研究成果、芸術作品の共通点と相違点を学生にまとめさせる
- ・学生に授業外の事例を授業の内容と関連させる
- ・学生に研究活動や個別学習をさせる
- ・教師の考え、他の学生の考え、教材などに書かれている考えに対して批判的になることをすすめる
- ・授業の中でシミュレーションやロールプレイの方法を使う
- ・新しい参考文献、研究プロジェクト、フィールドワークなどを学生が提案することを促す
- ・授業の内容に応じたフィールドワーク、ボランティア活動、インターンシップなどを紹介する
- ・学生と共同で研究プロジェクトをすすめる
- ・実験・臨床の機会を増やす
- ・授業中に書く活動、書いたものを校正する活動を行う
- ・課題についての記録を書かせて教員と意見交換をする
- ・授業中に実際に問題を解かせる
- ・新しい科目の開設を検討する際に学生に参加させる
- ・教員の研究の補助をする機会を与える

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

- ・数人のグループで問題解決活動を行い、授業ではグループ間で議論させる
- ・実社会の問題解決につながるような課題を設定する
- ・一週間・一学期間で最低限交換すべきメールの数を決めておく
- ・ウェブで入手できるフリーのゲーム、シミュレーションを活用する
- ・授業の内容がこの後受ける授業でどのような意味を持つかを説明する
- ・懸賞論文等の課外の活動への参加をすすめる
- ・授業の内容やの進め方について学生と相談して決める
- ・学生に文献の読み方を教える
- ・授業ではすべての学生に発言する機会を与える
- ・他の学生の課題に対して批判的にコメントさせる
- ・ディスカッションやシミュレーションの後にはフォローアップの文献を読ませる

4. 素早いフィードバックを与える

- ・頻繁に小テストや課題をすることで、学生の進捗状況をチェックする
- ・授業内で学生に課題をさせることで、学生にすばやいフィードバックを与える
- ・試験の答案やレポートを1週間以内に返却する
- ・学期の早い内に、学生の成果に対して細かなフィードバックをする
- ・学生と進捗状況について話すための日程調整をする
- ・試験やレポートなどのよかった点と改善したほうがよい点をコメントする
- ・授業の初めのうちに、学生の能力をチェックする
- ・学生に授業や自分の進捗状況に関する記録を残させる
- ・期末テストの結果について話し合うことができることを伝える
- ・授業を欠席した学生に電話をしたり、伝言したり、メールする
- ・毎回の授業前に課題を課す
- ・試験が終わった直後にフィードバックとレビューをする
- ・学生と一緒に課題にあたらせる
- ・学生に自己評価をさせる
- ・中間試験をする
- ・クラスの平均的な学生の理解度を知る
- ・クラス内で編集作業をする
- ・学生に授業中に自分の考えを意見させる
- ・文章のドラフトをまず書かせる
- ・レポートのドラフトに対してフィードバックを与える
- ・多くの練習と課題を用意する
- ・試験では使用しないサンプルテストを与える
- ・できるだけほめ、建設的な批判をする。
- ・授業に関する記録を残させる
- ・質疑応答の時間をつくる

- ・小さな人数のグループ学習をとりいれる
- ・授業の中で課題の成果について話す
- ・オフィスアワーで個別にフィードバックを行なう
- ・自動的な返信メールなどで学生に課題が提出されたことを伝える
- ・課題はある一定の期間内に返却されることを伝える
- ・成績の基準を学生に明確に示し、それにそって成績評価する
- ・学生に研究会に出席することをすすめる
- ・学生からのフィードバックに合わせて、学期中に授業内容や方法を調整する
- ・学期を通じて定期的に簡単なフィードバックを与える
- ・学期を通じて最低1回は明確かつ詳細なフィードバックを与える
- ・学生による授業評価に合わせて、次の学期の授業内容や方法を修正する
- ・授業に同僚に来てもらい、教え方について話し合う
- ・学期中に1回の授業をビデオテープに録画し、授業を検討する
- ・授業の録音もしくは録画をする
- ・学生に授業で学んだことを5分間で書かせる
- ・学生にレポートを2部提出させて、一部は学生に相互評価させる
- ・優れた学生の成果を紹介し、なぜ優れているのかを説明する
- ・学生に何を期待しているのかをしめすために課題の解答見本をしめす。
- ・授業の初めと最後にテストをする

5. 学習に要する時間の大切さを強調する

- ・学生に出された課題にすぐに取り組むように伝える
- ・学生に課題を出すときに最低どれくらいの時間をかけなければならないかを伝える
- ・複雑なことを理解させるときに、説明に要する時間を先に伝える
- ・学生が意欲的な目標を設定できるように支援する
- ・学生がプレゼンテーションをするときは、前もってリハーサルをさせる
- ・学生に欠席するとどのような結果を招くおそれがあるかを伝える
- ・フルタイムの学生であることは、フルタイムの労働者と同じ時間の学習が必要であることを伝える
- ・学習習慣や、時間管理などでうまく行かない学生には個別に会って話をする
- ・学生が授業を欠席した時は、追いつくための学習が必要であることを伝える
- ・授業で一定時間内に書く機会を設ける
- ・ディスカッションの際には時間を設定する
- ・授業は時間通りに始めて時間通りに終わる
- ・授業中はできる限り集中しなさいと伝える
- ・課題を出す時は期限も同時にしめす
- ・宿題の重要性を強調する
- ・学生が学習時間を有効に使えるように宿題や課題を明確に指示する

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

- ・ 学生が効率的に学習できるように教員と学生、または学生間でコンタクトを持つ機会を増やす
- ・ 重要な文献はあらかじめ教材として用意しておく
- ・ パートタイムの学生には特にワークショップや集中講義などへの参加を呼びかける
- ・ コースの開始時に学生に求める学習の全体像を提示する
- ・ レディネスに関するアンケートを行い、結果をすぐに提示する
- ・ 授業の内容が実社会のどのような面で役に立つかを提示する
- ・ 学生への課題に要する時間を計算し、現実的に行える学習時間に合うように調整する
- ・ 大きな課題の締切には段階的な締切をいくつか設定する
- ・ 一回の授業にはどれだけの時間外学習が必要かを伝える
- ・ 課題をするときには質を落とさずにできるだけ短い時間でやるように学生に言う
- ・ 教科書のみを勉強しすぎないように指導する
- ・ 授業中に板書を正確に写すことだけが重要ではないことを伝える
- ・ 予定を立てるときに綿密すぎる予定のたて方をしないように指導する
- ・ 大量の暗記をすることだけが学習ではないことを伝える
- ・ 計算に電卓を使うことは悪いことではないことを伝える
- ・ 学生にレポートなどの筆記課題は提出する前に校正をするように指導する
- ・ 授業内容についていけない時は教員に相談するように伝える
- ・ 学生にはコースの内容を理解するのに必要な学習時間を明確に伝える
- ・ レポート課題を出すときには、何回も校正することを求める
- ・ 授業時間外の学習活動を行わせるときに、他の教員が授業で課している時間外学習課題について把握する
- ・ 学生向けのタイムマネジメントセミナーに参加させる
- ・ 課題を完成させるために行う学習活動の手順をしめす

6. 学生に高い期待を伝える

- ・ 授業で学生に一生懸命勉強してほしいということを伝える
- ・ 成績を高い水準で維持することが重要であることを授業で強調する
- ・ 毎回の授業の始めにその日の授業で期待することを口頭で伝え板書する
- ・ 自ら意欲的な目標を設定する学生をほめる
- ・ 期限までに課題を出さなかった場合にどのような対応をするかを説明する
- ・ 発展的な学習を求める学生のために、追加の文献や課題を提供する
- ・ 学生にたくさん書くようにすすめる
- ・ 優れた成果を出した学生には全員の前でほめる
- ・ 学期中に定期的に授業がうまくいっているかを議論する
- ・ 学生に時間を守るように伝える

- ・レポートなど提出物に不十分な点があれば書き直しをさせる
- ・シラバスで授業の目標を明確にしめす
- ・学生に高い成果を期待していることを伝え、その具体例をしめす
- ・学生の能力を超えない範囲でより努力するように常に励ます
- ・学生に期待する理想的な学習計画を参考として提供する
- ・授業前に教科書を読む、宿題を終える、質問を用意するなどの準備をしてくるよう伝える
- ・学生の最終成果をウェブで公開する
- ・最終成果の評価基準とともに、優、良、可のレポート例をしめす
- ・成績評価の基準を学生に示して学生と合意する
- ・授業の内容には多少意欲的に取り組まなければ達成できない課題を用意しておく
- ・高い水準に到達できない学生には個別指導を行う
- ・学生に成績よりも最善の努力を尽くすことの方が重要であると学生に言う
- ・どうしても内発的に動機づけられない学生には、表彰したり報償を与える
- ・教材が系統的にまとめられて示されると学生の学習意欲が向上する
- ・学生のレディネスと学生の学習方法についてしっかりと把握する
- ・学生は学習にあたって不安があることを理解し、授業では深刻な不安を作らないように配慮する
- ・学生を学会や研究会のメンバーに参加させる
- ・学生間で協力して目標を立てる機会を設ける
- ・学生が課題を完全に達成したら感謝の意をしめす
- ・アルバイト等による言い訳を一切聞かない
- ・必須の課題以外の課題を用意しておいてそれらを行うことをすすめる
- ・学生をほめる時は大勢の前だけでなく個別にもほめる
- ・学生が期限までに課題を終えられなかった時には説明を求める
- ・シラバスには課題、課題の期限、課題の評価基準を書く

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

- ・わからないときはわからないと言うことを学生にすすめる
- ・他人を傷つけるような皮肉や冗談を慎むようにする
- ・多様な学生に合わせて多様な教授法を使う
- ・学生のバックグラウンドにあった教材を使う
- ・基本的な知識やスキルが身につけていない学生には、追加の教材や練習問題を与える
- ・授業の中に少数グループの視点を取り入れる
- ・個別学習を求める学生にはその機会を提供する
- ・コースの初めに学生の学習スタイル、興味、バックグラウンドを知る
- ・授業の中にビデオ、ディスカッション、講義、グループ学習、相互学習などの

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

多様な学習活動を用意する

- ・論理的な判断力が得意な学生もいれば、直感的な創造力が得意な学生もいることを理解する
- ・メールや電子掲示板の活用をすすめる
- ・視覚や聴覚などの補助器具などの便宜をはかる
- ・書かせたり、話させたり、プロジェクトをしたりと評価を多様にする
- ・オンライン教材によって、それぞれのスピードで学習させる
- ・履修する学生に、対面型の講義と教科書による授業、コンピュータを使った講義と教科書による授業などの選択肢を与える
- ・教室を出てフィールドワークを行う
- ・一回の授業の中で多様な学習活動を含める
- ・異なるバックグラウンドをもった学生の意見を授業内で共有する
- ・学生間で協同学習をさせる
- ・学生の異なるバックグラウンドや興味について理解する
- ・学生に自分の考えを発言することをすすめる
- ・学生に他の学生に対して尊敬することの重要性を伝える
- ・差別的発言や攻撃的な言動は慎ませる
- ・どの学生にとっても安心して学習できる環境を提供する
- ・学生の持っている長所を活かして教える方法を見つける
- ・学生の学習の進捗状況を知るために、何度かそして多様な方法で評価する
- ・さまざまな知能を認め、お互いに補い合うことが大事と主張するハワード・ガードナーの研究成果に精通する

4. おわりに

本稿では、米国で開発された「優れた授業実践のための7つの原則」の開発とこれまでの成果と「7つの原則」を具体化する実践手法のリストとその特徴を明らかにしてきた。そこで明らかになったことをまとめると以下のようなになる。

- ・米国高等教育学会の研究グループを中心に開発された「7つの原則」は、これまでの教授法研究の成果が教員にとって利用しやすい形でまとめられているため、全米の大学に広く普及している。
- ・「7つの原則」に対応する実践手法は、大学等においてウェブ上にまとめられている。その実践手法の内容から、現場レベルで多様化された形で蓄積されていることが確認された。

- ・「7つの原則」の実践手法を収集することによって、どの学問分野の授業においても実践できるような手法が相当量存在することが確認された。
- ・抽出した原則別の実践手法の数は、27個(多様な才能と学習方法を尊重する)から44個(素早いフィードバックを与える)の範囲においてばらつきがある。7つの原則が実践手法を束ねる枠組みとして比較的バランスのよいものであることが確認された。
- ・「学生の自己紹介」や「オフィスアワーの設置」など1つの実践手法が複数の教授法の原則に対応する場合があることが確認された。
- ・実践手法の中には、学生に対してメンターやアドバイザーとして接するような行動が含まれている。単なる知識伝達者としての狭義の教師像ではない広く学生の発達に関与する教師像が反映されている。

このような「7つの原則」は、日本の大学の授業の現場ではどのような意味を持つのだろうか。米国において開発された「7つの原則」は、あらゆる学問分野の教員が利用可能なことをコンセプトとして作成された。また、アメリカでの広がりを見る限り、さまざまなタイプの大学において有効であったとも推測できる。このような学問分野や大学の属性を超えた教授法の原則は、はたして国境をも越えることができるのであろうか。

この問題に答えるには実証的な研究が必要である。日本の大学には独自の学生像や教師像、授業文化などがあるため、慎重に検討する必要があるだろう。しかし、日本の大学のニーズに適した「優れた授業実践のための原則と実践手法」を作成するにあたって、「7つの原則」の経験を踏まえることは有益であろうと考えられる。次の課題としたい。

注

- 1) たとえば、2004年9月30日に名古屋大学教養教育院で実施されたFDでは、学生をほめることの重要性が指摘されたが、全体会の後の分科会ではどのように学生をほめたらいいのかという具体的な実践的手法について質問提起があり議論となった。
- 2) 『成長するティップス先生』の有効性は、名古屋大学高等教育研究センター(2002)においてアクセス数と反響からまとめられている。
- 3) 中井ら(2002)によると、『成長するティップス先生』の課題として具体的な

例が不十分であることが指摘されている。

- 4) 7つの原則は、その反響の大きさから発表直後に小冊子にまとめられて出版されたが、この冊子は、全米をはじめ英国やカナダの大学関係者の間で1年半のうちに15万冊の注文があったとされている (Gamson, 1991, p. 8)。また、89年に発表した教員・高等教育機関向けチェックリストも、1週間で4万部、合計で50万部以上の小冊子が販売されたとされている (Gamson, 1991, p. 10)。7つの原則の発表直後に行われた調査では、7つの原則を大学のFDワークショップなどで活用している大学は約54%に上ることが示されている (Poulsen, 1991, p. 30)。インターネット上においても、7つの原則に関連するウェブサイトは多い。2004年11月現在で、検索エンジンGoogleを用いて“Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”をフレーズ検索した結果、約7400サイト存在していることが確認される。
- 5) たとえばSorcinelli(1991)は、7つの原則の有効性検証に関するレビューをまとめている。またPoulsen(1991)は、7つの原則の各大学における活用状況の調査をまとめている。

資料1 実践手法のウェブサイト

- Gonzaga University (1999) Institute for Law School Teaching: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://law.gonzaga.edu/ilst/7PsIntro.htm>
- Howard Community College (2004) Director of Distance Education: Principles of Best Practice in the Design and Delivery of Online Education at Howard Community College. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.savstate.edu/ctlas/ats/webct/vista/Principles.htm>
- Jones, K. (2001) College of Saint Benedict Saint John's University: Learning Enhancement Service: Best Practice. Retrieved October 4, 2004, from http://www.csbsju.edu/les/pastevents/best_practices.htm
- Michigan State University (2004) Applying The Seven Principles For Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.msu.edu/user/coddejos/seven.htm>
- Panitz, T. (2004) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education Implementation Ideas, Retrieved October 4, 2004, from <http://home.capecod.net/~tpanitz/7ideas.htm>
- The University of Florida (2002) Seven Principles of Good Practice: A Feeds Evaluation. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.unf.edu/dept/cirt/teaching/7principles.pdf>

- University of Missouri-Rolla (2001) Ad hoc Mentoring Committee: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://campus.umar.edu/lead/7principles/MentoringCommReport.htm>
- Walker, G. (1998) Teaching Resource Center of The University of Tennessee at Chattanooga: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.utc.edu/Administration/WalkerTeachingResourceCenter/FacultyDevelopment/7principles.html>
- Wayne State University (2004) Teaching Matters, The Office for Teaching and Learning Newsletter, Vol.8, No.7. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.otl.wayne.edu/pdf/newsltr/apr04.pdf>
- Winona State University (2001) A Message from the President: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.winona.edu/president/index.htm>

参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部
- 中井俊樹・首藤貴子(2002)「インターネット上での反響」名古屋大学高等教育研究センター『「成長するティップス先生」の記録2001.04－2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書、名古屋大学、pp.11-18.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2002)『「成長するティップス先生」の記録2001.04-2002.03』平成13年度名古屋大学教育改善推進費プロジェクト報告書、名古屋大学
- 日本数学会・大学数学基礎教育WG教授法研究班(2000)『大学での数学の教え方いろいろ－1998年5月のアンケート調査結果のまとめ』
- Astin, A. (1984) Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education, *Journal of College Student Personnel*, No.25, pp. 297-308.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Feldman, K. (1997) Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon

優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法

Press.

Gamson, Z. (1991) A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp.5-12.

Poulsen, S. (1991) Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp.27-35.

Sorcinelli, M. (1991) Research Findings on the Seven principles, *New Directions for Teaching and Learning*, No. 47, pp.13-25.

優れた授業実践のための7つの原則に基づく 学生用・教員用・大学用チェックリスト

中島英博、中井俊樹
(名古屋大学高等教育研究センター)

(キーワード: 教授法、授業改善、実践手法、ファカルティ・ディベロップメント)

The Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education and Inventories for Students, Faculty and Institutions

Hidehiro Nakajima and Toshiki Nakai
(Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University)

(Key words: teaching methods, teaching improvement, practical examples, faculty development)

1. はじめに

大学教育の質の向上のために、これまで教育学研究者は研究成果の発表を通じて貢献してきた。具体的な成果の一部は、大学教授法の領域における研究開発物の提供である。例えば、マッキーチ⁽¹⁾やデイビス⁽²⁾などによるハンドブックの提供が、その代表的なものである。日本においても、香取らが米国で発表されたハンドブックの翻訳を提供するだけでなく⁽³⁾⁽⁴⁾、池田らが日本の文脈にあわせて編集したハンドブックの提供を行っている⁽⁵⁾。近年では、各大学がそれぞれのニーズや課題に沿って独自にハンドブックをまとめ、ファカルティ・ディベロップメントを通じて普及する活動が、盛んに行われている⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

こうしたハンドブックにおいて共通に見られる特徴は、教員の教授スキルの向上に主眼をおいている点である。これは、教育実習もなく教員としての研修を受ける機会を与えられないまま教員となった大学の研究者に対して、自学自習用の教育学のテキストを提供する試みと言ってもよいだろう。

一方これらのハンドブックでは、教員が新たな内容を学ぶという点で、教員にかかる負担を大きくするかもしれない。例えば、インストラクショナル・デザイン、コースパッケージ、ティーチングポートフォリオなどが、教員にとって初めて接する概念やノウハウである場合、それがどのような

ものか、なぜ大事なのか、どのように実践すればよいのかについて初歩から学び、実践に結びつけていかなければならない。またハンドブックには、比較的抽象的な教授法の説明も少なくない。例えば、「導入部は刺激的に、展開部はスリリングに、エンディングは印象的に」、「初日の授業では学生のニーズを把握しよう」、「質問や発言を上手に促そう」という説明があったとしよう。こうしたノウハウは重要であるものの、それを知ることが即座に教員の実践に必ずしも結びつくとは限らないだろう。これらのハンドブックが果たす役割は大きい、抽象性の高い「教授法の理論」と同様に、それを実現する「実践手法」の提供も現場の教員にとっては重要である。

本稿では、米国で大学教育の現場で求められる実践手法をまとめた資料、「優れた授業実践のための7つの原則」(The Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education)を紹介する。日本においても現場の教員が、少ない負担で実践に結びつけられるような授業改善ノウハウを提供する取り組みを進める際に、「7つの原則」は有用な資料となるだろう。

2. 「優れた授業実践のための7つの原則」の開発成果とその特徴

「7つの原則」は、1980年代後半から米国高等教育学会 (American Association for Higher

本稿は、『大学教育研究ジャーナル』第2号 (2005) 71-80頁に所収されたものを許可を得て再掲したものである。

Education) の下でチッカリングとガムソンを中心とした研究グループによって開発されたものである⁽⁹⁾。7つの原則とは、具体的には次の7つを指す。

表1 「優れた授業実践のための7つの原則」

- | |
|----------------------|
| 1. 学生と教員のコンタクトを促す |
| 2. 学生間で協力する機会を増やす |
| 3. 能動的に学習させる手法を使う |
| 4. 素早いフィードバックを与える |
| 5. 学習に要する時間の大切さを強調する |
| 6. 学生に高い期待を伝える |
| 7. 多様な才能と学習方法を尊重する |

この成果は、全米の大学関係者の間で最も認知度の高い教授法であり、現在でも全米をはじめ世界の多くの大学で活用されている。開発成果は、87年に発表された「7つの原則」をまとめた小冊子（以下、「7つの原則」と呼ぶ）⁽¹⁰⁾、その実践手法を教員・大学組織へ向けてまとめ 89 年に発表され 2 つの小冊子⁽¹¹⁾⁽¹²⁾、92 年に発表された学生向けの小冊子⁽¹³⁾（これら 3 冊を以下「チェックリスト」と呼ぶ）の合計 4 つの冊子にまとめられている。

携帯に適したサイズで、安価かつ簡素な製本で十数頁にまとめられたこれらの冊子は、米国、英国、カナダで 20 万部以上配布され、発表直後は全米の半数以上の大学において、教員研修などで活用された実績がある⁽¹⁴⁾。

開発者であるチッカリングとガムソンを中心とする研究グループの問題意識は、学士課程教育の質的向上を効果的に促進するための方法論にあった⁽¹⁵⁾。彼らは、教育学を専門としない多くの教員が教育に関する議論を煩わしく思っている現実に直面していた。そのため、教員にとって理解が容易、実践的な内容を含む、資料として活用しやすい形、幅広い分野の教育に応用できる、といった特徴を持つ方法論の提供について模索していた。こうした背景を持って開発された「7つの原則」は、以下のような特徴がある。



図1 4つの小冊子

第一に、それまでの教授法研究の成果を集約したものである点である。優れた授業実践を実現するための基礎となる概念は「学生を学習に巻き込み参加させること」(Involvement) である。研究グループは、学習への参加に関する先行研究を整理した上で、抽象的になりすぎないレベルの塊にまとめて、原則として示した。原則で示されている7つの内容が、学生の学習成果と高い相関を持つことはフェルドマンによっても示されている⁽¹⁶⁾。「7つの原則」の発表以前においても、大学における教育の質的向上に関する研究はさまざまな形で行なわれていた。しかしながら、それらの研究成果は多くの大学の教員が利用しやすい形でまとめられていなかった。「7つの原則」では、教員をはじめ全ての大学の構成員が実践可能なガイドラインの開発を意図して編集した点が、大きな特徴である。

第二に、「チェックリスト」は自己点検評価シートとして活用できる点である。次節で示すように「チェックリスト」では、1つの原理について10個程度の実践手法が示されている。冊子では、それぞれの実践手法の項目について、次のような5段階で自己評価を行うチェック欄が設けられている。

- 1 よくあてはまる
- 2 あてはまる
- 3 ときどきあてはまる
- 4 あまりあてはまらない
- 5 あてはまらない

利用する教員にとっては、それまで知らなかった実践手法の発見に加えて、自分の長所や短所を

知ることができ、改善に意識的に取り組むべき分野を客観的に認識するための支援となる。本稿で

「チェックリスト」と呼ぶ背景も、ここにある。

第三に、「チェックリスト」は、優れた授業実践において学生、教員、大学組織の三者に役割があることを示した点である。授業改善において、教員の役割が重要であることは言うまでもないが、教員のみが取り組むべき役割とするには負担が大きく、熱意とスキルのある一部の教員しか取り組めないだろう。全ての教員が授業改善に取り組めるためには、大学組織の支援が欠かせない。さらに、教員側、大学側が一方的に学生に働きかけるだけでなく、学生側も授業改善へ参加することで、三者が授業改善に向けて互いに歩み寄るという、全学的な取り組みとしていく必要がある。「チェックリスト」では、7つの原則に沿いながら、特別なスキルを必要としない実践手法が、学生、教員、大学組織の三者に向けて示されている。授業改善において、学生や大学の役割まで示した文献は少なく、本稿が三つの冊子を紹介する意図

もここにある。

3. 「7つの原則」と「チェックリスト」の紹介

以下に「7つの原則」とそれに基づく学生・教員・大学向けの「チェックリスト」を紹介する。

3. 1 「7つの原則」の概要

はじめに、「7つの原則」の小冊子を紹介する。全16頁で構成されるこの小冊子は、87年にThe Wingspread Journalの特別版として出版された。内容は、7つの原則の内容を簡潔にまとめた概要、7つの原則の開発理由、7つの原則に沿った各大学の取り組み事例の3部で構成されている。次に示すものは、そのうちの概要の部分の翻訳である。後掲する3つのチェックリストも含めて、7つの原則に関わる小冊子は、現在でもミネソタ州ウィノナ大学にある7つの原則資料センター(Seven Principles Resource Center)を通じて入手することができる。

資料1 「優れた授業実践のための7つの原則」の概要

以下は、米国高等教育学会とジョンソン財団の支援の下にまとめられた、優れた授業実践のための7つの原則の簡単な紹介です。

1. 教員と学生のコンタクトを促す

授業中や授業時間外に教員と学生が頻繁にコンタクトをとることは、学生の学習への動機づけと学習成果の向上において最も重要な要因の一つです。たとえ教員でも教員との距離が近づくことで、学生は学習への参加が促進され、自分の価値と将来の目標を考える支援になります。

2. 学生間で協力する機会を増やす

学習は一人で行うよりも仲間と協力して取り組む方が、学習の質が向上します。仕事と同様に学習も競争的に孤立して行うよりも、社会的な関係を持って協力的に行うものです。他者と共同で作業を行うことが学習成果を高め、自分の考えや他者の考えを集団で共有することが理解の向上につながります。

3. 能動的に学習させる手法を使う

学習は、スポーツ観戦のように教室で座って教員の話を聞き、記憶中心の画一的な試験に対応しているだけでは不十分です。学生は学んだ内容について、自らの過去の経験との関連づけと、日常生活への適用について、口頭・文章で説明できなければなりません。すなわち、学生は学んだ内容を自分のものにならなければなりません。

4. 素早いフィードバックを与える

自分が理解している部分と理解していない部分を明確に認識することで、学習は効率的になります。授業を通じた学力向上を図る上で、学生には学習成果に対する適切なフィードバックが必要です。授業の開始時には、自分の既知の知識や得意な分野を学生が自覚できる支援が必要です。授業中には、試験・課題・発表・実習など学生が自ら取り組む機会を設定し、成果を改善・向上させるアドバイスを受ける必要があります。卒業時、および卒業までの節目の時点で、学生が自身の学習した内容を振り返り、これから学ばなければならないことを自覚し、自分自身を評価する機会が必要です。

5. 学習に要する時間の大切さを強調する

学習には、それに投入する時間と労力が必要です。時間は取り戻すことができません。よって、仕事と同様に学習においても適切な時間管理が決定的に重要です。学生には学習にあたって効果的な時間管理ができるような支援が必要です。必要な時間をきちんと配分することが、学生の学習においても教員の教育においても重要です。大学が学生、教員、執行部、専門職員に対して時間の大切さをいかに語るかが、全体の活動成果を決めるといっても過言ではありません。

6. 学生に高い期待を伝える

高い期待を持って取り組むことで得られるものは大きくなります。これは、基礎学力で劣る学生や精一杯の努力をしない学生であっても、基礎学力が高くやる気にあふれた学生であっても、全ての学生にとって重要なことです。学生に高い学習成果を修めてもらいたいという期待は、教員や大学組織がその期待を持ち続け、実現に向けた努力を重ねることで現実のものにすることができます。

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

学習には様々な方法があります。学生は、各自の多様な才能と学習方法をもって大学へ入学して来ます。セミナーでは優秀な学生でも実験や芸術のクラスでは不器用かもしれません。実務経験の豊富な学生でも理論は苦手かもしれません。それぞれの学生が活躍できるよう多様な才能と学習方法を表現する機会を設ける必要があります。そうすることで、それまで難しかった新しい学習方法にもチャレンジできるようになります。

3. 2 教員用チェックリスト

次に、教員用チェックリストを紹介する。教員用チェックリストは、7つの原則が発表された87年の2年後、89年に大学用チェックリストとともに発表された。冊子の冒頭には、チェックリストを開発した目的が教員のサポートであることが述べられて

いる。また、チェックリストの形式をとっているがこの意図は、教員個人を評価するためではなく、授業改善に資するための工夫であることも述べられている。従って、教員が自らの行動を率直に振り返りながら使われることが重要である。

資料2 教員用チェックリスト

①よくあてはまる ②あてはまる ③ときどきあてはまる ④あまりあてはまらない ⑤あてはまらない

1. 教員と学生のコンタクトを促す		①	②	③	④	⑤
1	将来の進路について学生にアドバイスをする					
2	学生が研究室に遊びにくる					
3	自分の考え方や過去の経験を学生に話す					
4	学生が主催する行事・勉強会などに参加する					
5	顧問や相談員として学生の課外活動に積極的に関わる					
6	授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える					
7	自分と異なる人種・文化背景の学生の支援に努力する					
8	学生とは先輩・非公式のアドバイザーとして接する					
9	学生を自分の専門領域における学会などに連れて行く					
10	学生が問題に直面した際は、解決へ向けた手助けをする					
2. 学生間で協力する機会を増やす		①	②	③	④	⑤
1	学生に自分の興味や過去の経験をお互いに話すよう求める					
2	授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒にやるよう促す					
3	学生が共同プロジェクトを行うように働きかける					
4	課題をお互いに評価し合う活動を取り入れる					
5	難しい概念をお互いに説明し合う活動を取り入れる					
6	課題ができたときにお互いにほめる機会を設ける					
7	大事な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける					
8	授業の受講者でグループを作る					
9	学生が参加できる大学の組織の一つ以上所属するように働きかける					
10	他の学生の成績を上げることが、相対的に自分の成績を下げるにつながらないことを学生に伝える					

3. 能動的に学習させる手法を使う		①	②	③	④	⑤
1	授業の中で学生の課題を発表させる					
2	学生に異なった理論、研究上の知見、あるいは芸術的作品の類似点・相違点を要約させる					
3	授業に関連する学外のイベントや活動に関わるよう求める					
4	学生による調査・自主研究を奨励する					
5	学生に教師・クラスメイトの意見、文献や授業の資料を批判的に検討することを奨励する					
6	具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する					
7	シミュレーション、ロールプレイ、実験を行う					
8	授業をよりよくするための学生の提案・アイディアを歓迎する					
9	授業に関連するフィールド調査、ボランティア活動、インターンシップを紹介する					
10	学生を研究プロジェクトに参加させる					
4. 素早いフィードバックを与える		①	②	③	④	⑤
1	小テスト・宿題を課す					
2	学生が自分で答えを合わせられる宿題・問題を用意する					
3	テスト・レポートを1週間以内に返却する					
4	学期の初めのうちは課題の評価・コメントを詳細かつ丁寧に行う					
5	学生に課題の進捗状況を報告させる					
6	試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する					
7	学期の初めに事前テストを行う					
8	学生に課題の進捗状況を記録させる					
9	学期の終了後に最終試験の成果について面談をする					
10	欠席した学生に電話・掲示など連絡をする					
5. 学習に要する時間の大切さを強調する		①	②	③	④	⑤
1	課題にはすぐに取り組むように促す					
2	授業の予習に必要な時間を示す					
3	難しい内容には理解のために必要な学習時間を示す					
4	学生には高い到達目標を立てることをすすめる					
5	プレゼンテーションの際に事前にリハーサルをさせる					
6	日常的な学習、たゆまぬ努力、自分のペースで行うこと、学習の計画性の重要性を強調する					
7	学生に欠席しないことの重要性を説明する					
8	フルタイムで勉強することは、フルタイムで働くことに等しいことを説明する					
9	学習習慣や学習計画の面でうまくいかない学生に会って相談にのる					
10	授業を欠席した場合は、自習などで追いつくことを求める					
6. 学生に高い期待を伝える		①	②	③	④	⑤
1	学生に一生懸命勉強してほしいと言う					
2	授業で良い成績を取ることの重要性を強調する					
3	学期の開始時に学生に期待することを述べたりシラバスに書く					
4	学生が意欲的な目標の設定を支援できるよう支援する					
5	期限までに課題を提出できなかった場合の処置を説明する					
6	意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する					
7	学生にたくさん書くことをすすめる					
8	優れた成果をあげた学生は授業ではめる					
9	授業内容を常に改訂する					
10	学期中は授業改善について定期的に学生と議論をする					

7. 多様な才能と学習方法を尊重する	①	②	③	④	⑤
1 授業が理解できないときはきちんと言うようにすすめる					
2 虚偽の発言、嫌み、冗談、他の学生の妨害行為をやめさせる					
3 多様な学生にあわせて多様な学習活動を用意する					
4 学生の過去の経験にあわせて適切な文献や学習活動を選ぶ					
5 予備知識などが足りない学生用に補習教材・問題を用意する					
6 女性やマイノリティに関する新しい動向を授業に取り入れる					
7 自主的な学習をしたい学生向けの課題・テーマを用意しておく					
8 自ら学習目標を立てる活動、コンピュータを活用した学習を取り入れる					
9 学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを奨励する					
10 学期の初めに学生の学習スタイル、興味・関心、過去の経験を知る努力をする					

3. 3 学生用チェックリスト

さらに、学生用のチェックリストを紹介する。学生用のチェックリストは教員用と大学用のチェックリストが発表された89年から3年後の92年に発表された。その冒頭で、開発の目的は、学生が学習に

積極的に関わることの支援であると述べられている。教員用チェックリストと同様、自らの行動を素直に振り返り、自分の強みと弱みを認識し、学習の改善に役立てるために使われるものであり、学生個人を評価するものではないことが述べられている。

資料3 学生用チェックリスト

①よくあてはまる ②あてはまる ③ときどきあてはまる ④あまりあてはまらない ⑤あてはまらない

1. 教員と学生のコンタクト	①	②	③	④	⑤
1 一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくらうとする					
2 自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする					
3 教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする					
4 教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする					
5 他の担当科目、専門領域など、教員のことを知る努力をする					
6 教員が関わっている研究会などの催しに参加する					
7 履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える					
2. 学生間で協力する機会	①	②	③	④	⑤
1 クラスメイトと友達になるように努めている					
2 授業中に他の学生と一緒に勉強する					
3 友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する					
4 他の学生がわからないことを尋ねてきたら教える					
5 クラスメイトが優れた成果を出したと思った時はそのことを言葉にして言う					
6 自分と意見が異なる人と思人と議論をする					
7 自分が得意な分野に関しては他の学生に教える役割を果し、他の学生と知識や技能を共有する					
3. 能動的な学習手法	①	②	③	④	⑤
1 授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う					
2 授業についていく上で必要なことを教員に質問する					
3 授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている					
4 授業の中で過去の体験や日常の経験が活かせる場面を常に探している					
5 授業に向けて入念な準備をする					
6 授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す					
7 授業中は丁寧にノートをとる					

4. 素早いフィードバック		①	②	③	④	⑤
1	教員からもらった試験、レポート、課題のコメントから自分の良かった点・悪かった点を見つめ直す					
2	わからないことがあればできるだけ早く教員にコメントをもらいにいく					
3	文章を書く時は教員からコメントをもらいながら何度も書き直す					
4	授業や文献の内容でわからないことをリストアップし、友達、教員、自分自身でそれらを検討してみる					
5	クラスメイトからのコメントを尊重し、取り入れ方を慎重に検討する					
6	勉強したことを振り返れるように記録をつけておく					
7	授業で学んだことについて教員と議論をする機会をつくる					
5. 学習に要する時間の大切さ		①	②	③	④	⑤
1	課題はすぐに取りかかり、正確に行う					
2	課題を提出する前には見直し・推敲を行う					
3	授業でプレゼンテーションをする前には練習をする					
4	履修中の全ての授業について計画通りに勉強する					
5	授業には休まず、遅刻せず出席する					
6	授業についていけないかどうか不安な時は教員に相談する					
7	自分の苦手な内容を意識して、その克服に努める					
6. 高い期待		①	②	③	④	⑤
1	授業を受ける際に自分の目標を設定する					
2	教員が示す目標を明確に理解できるよう調べる					
3	自分の専攻や職業に直接関連しないとしても、授業の内容に興味を持ち続ける努力をする					
4	自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる					
5	単に成績のために学習しないように気をつけている					
6	どの授業でも最善の努力を尽くして取り組む					
7	勉強を進めるにあたって学内にある施設・人材・資料などあらゆる資源を活用する					
7. 多様な才能と学習方法の尊重		①	②	③	④	⑤
1	他の学生を困らせる行為をしないよう努めている					
2	教員の授業スタイルにあわせて学習方法を変える					
3	自分の興味や得意な勉強方法を他の学生に話す					
4	学習歴や学力水準の異なる他の学生に敬意を持っていることを示す					
5	教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する					
6	人種差別・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時はそのことを言うよう努める					
7	自分と異なる意見について偏見なく考える努力をする					

3. 4 大学用チェックリスト

最後に大学用チェックリストを紹介する。上述の通り、大学用チェックリストは89年に教員用のものと同時に発表された。大学用チェックリストは、教員用・学生用で示されているような7つの原則に沿った構成となっていない。7つの原則に依拠しながら、組織の活動を包括する6つの領

域（学習環境、授業実践、カリキュラム、教員、学生支援サービス、施設）について、チェックリストを示している。チェックリストは、学生を学習に巻き込み参加させるために大学組織ができることを示しており、執行部の教育担当者や学務部などの責任者による活用を想定している。

資料4 大学用チェックリスト

①よくあてはまる ②あてはまる ③ときどきあてはまる ④あまりあてはまらない ⑤あてはまらない

1. 学習環境		①	②	③	④	⑤
1	学生と教員が授業時間外に面会の機会を持てる					
2	学部や全学の委員会に学生の代表が出席する					
3	学内の研究者の優れた研究成果について学生が知っている					
4	マイノリティの教員・職員・学生を受け入れる					
5	執行部が組織運営に対する学生や教員の貢献度を知っている					
6	大学の出版物は学生・教員・職員の多様な活動を反映している					
7	教員が学生の高い成果を引き出せるよう事務組織が支援する					
8	学長や執行部に教員や学生がコンタクトできる仕組みがある					
9	教員と事務組織が快適なキャンパスづくりに努力する					
10	事務長、学部長、学科長が協力関係を作る					
11	教職員が一生懸命働いていることを学生が知っている					
2. 授業実践		①	②	③	④	⑤
1	履修に際して学生が既知の知識・内容を確認できる					
2	大学が授業と家族サービスや課外活動とのバランスに関する見解を持っている					
3	男性職員と女性職員の所得の差を公表する					
4	大学が卒業生の進路・キャリアを把握している					
5	学生が開講授業を評価し、改善を提案できる機会がある					
6	不可の成績の上限数を大学が決めている					
7	成績評価の明確な基準を教員が持っている					
8	大学は必要に応じて会議で検討中の内容を学生に伝えている					
9	非常勤講師が授業以外の活動に参加している					
10	大学が学生の成長を評価している					
11	スポーツ選手も他の学生と同等の学習を期待されている					
3. カリキュラム		①	②	③	④	⑤
1	実践的な実務経験、研修の機会を与える科目がある					
2	教員が教養課程の内容を検討し改訂する					
3	教員が専門課程の内容を検討し改訂する					
4	コンピュータを活用した学習など、主体的に学習できる機会がある					
5	新入生が参加する特別プログラムがある					
6	学生がインターンシップや就業体験できる機会がある					
7	教員と学生が卒業までに身につける知識・スキル・態度を共有している					
8	学生が自ら専攻を決められる					
9	学生が学際的な専攻に進むことができる					
10	多様な文化の価値を学ぶプログラムに学生が参加している					
11	学生が科目間の関係を理解するのに役立つ学習コミュニティやセミナーがある					
4. 教員		①	②	③	④	⑤
1	学生が会えるよう平日は教員がキャンパスにいる					
2	成績評価は明確な基準に基づいて行う					
3	教員が新たな教授法を試したり支援を受ける時間的余裕がある					
4	教員が授業の成果についてフィードバックを受けたり与えたりする					
5	学外でのコンサルタント活動やベンチャー企業経営等に関する制限が議論されている					
6	教員は学問的な指導を真剣に行っている					
7	定期昇給が教育成果と関連している					
8	教員が学生課の職員と協力して働いている					
9	大学が、教員の労働時間が合法的な範囲におさまるよう指導をする					
10	教員が長期計画、予算、人事など重要な意思決定に参加する					
11	執行部の教育への貢献を教員が評価している					

5. 学生支援サービス		①	②	③	④	⑤
1	学生の様々な相談にカウンセリングサービスが対応する					
2	学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する					
3	学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う					
4	成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する					
5	学生課、学務課、学生自治会が協力・協同してオリエンテーションプログラムを実施する					
6	学生が他の学生のチューター、アドバイザー、リソース・パーソンとして活躍している					
7	学生が財政的援助に関して専門家から支援を受けられる					
8	教育目標が学生の行動目標で表現されている					
9	学生が在学中は同一のアドバイザーから指導を受けられる					
10	大学が学生の多様性に対応できるよう教員・職員・学生に研修を行う					
11	奨学金は期限までに申し込んだ学生には授業開始時に支給されている					
6. 施設		①	②	③	④	⑤
1	教室の机・椅子が可動式である					
2	学生と教員が面会できるラウンジなどが整備されている					
3	静かで集中できる学習スペースがある					
4	娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている					
5	食堂が日中・夜間通じて開いている					
6	キャンパスに学生が自由に使えるビデオ視聴室、実験室、芸術活動用の施設がある					
7	大学のコンピュータを利用できる					
8	学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある					
9	日中・夜間に使用できる公共交通機関がある					
10	学期中は図書館が週末・夜間も利用可能である					
11	夜間コースの学生のために事務室が夜間も開いている					

4. おわりに

本稿では、7つの原則とその実践手法をまとめた学生、教員、大学組織用のチェックリストを紹介した。80年代後半に発表され、全米で活用されたこれらの開発物は、現在でも様々な形で活用されている。特に、実践手法は、各大学の各現場レベルで無数あるだろう。そのため、チェックリストの内容を各大学の状況や課題にあわせて柔軟に変更し、独自にチェックリストを作っている大学も少なくない。チェックリストに示された内容は、それぞれ10個前後であるが、具体的な実践手法の事例は豊富であるほど利用しやすいものになるだろう。

実践手法は現場レベルで蓄積される暗黙知となっているケースが多く、文献としてまとめられているものは非常に少ない。しかしながら近年では、7つの原則に基づく実践手法を学内で独自にまとめ、ウェブサイトで公開する大学がある。中井らはこの点に注目し、ウェブサイトで公開されている実践手法をレビューしてまとめている⁽¹⁷⁾。そこでは、それぞれの原理について27個から45個の実践手法が紹介

されている。

7つの原則の取り組みの特徴は、何が大事かの説明ではなく、どうすればよいかを示した点である。これは、日本においても現場のニーズに合致するものだろう。今後、授業改善の支援を進める上で、7つの原則の取り組みが参考になるだろう。

注

- (1) McKeachie, W. McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers, Houghton Mifflin Company, 1999.
- (2) Davis, B. Tools for Teaching, Jossey-Bass, 1993.
- (3) 香取草之助監訳『授業をどうする！—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』東海大学出版会 1995
- (4) バーバラ・グロス・デイビス著 香取草之助監訳 光澤舜明・安岡高志・吉川政夫訳『授業の道具箱』東海大学出版会 2002

- (5) 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部 2001
- (6) 長崎大学『FD ハンドブック (第1巻～第11巻)』2001
- (7) 徳島大学大学開放実践センター『FD 推進ハンドブック』2002
- (8) 愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部『もっと！！授業を良くするために』2004
- (9) Chickering, A. and Gamson, Z. "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", AAHE Bulletin, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education 1987.
- (10) Chickering, A. and Gamson, Z. "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", The Wingspread Journal Special Section, Winona State University, 1987.
- (11) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Faculty Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1989.
- (12) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Institutional Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1989.
- (13) Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. "Student Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University, 1992.
- (14) Poulsen, S. "Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories", New Directions for Teaching and Learning, No.47, 1991, pp.27-35.
- (15) Gamson, Z. "A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", New Directions for Teaching and Learning, No.47, 1991, pp.5-12.
- (16) Feldman, K. "Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings" in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice, Agathon Press, 1997.
- (17) 中井俊樹・中島英博「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号 2005

米国ミシガン大学における優れた授業実践および「7つの原則」の推奨
ー新任教員オリエンテーションでの FD 活動からー

鳥居 朋子

1. ミシガン大学（アナーバー校）の概要と新任教員に対する FD

毎年、全米トップ校に名を連ねるミシガン大学（University of Michigan-Ann Arbor 以下 UM と略記）は、1817 年にミシガン州デトロイトに設立され、1837 年に同州アナーバーにメインキャンパスを移した歴史ある大規模州立大学である¹。学士課程に在籍する学生数は約 25,000 人、大学院に在籍する学生数は約 15,000 人（ともに 2004 年度）で、計 40,000 人の規模を誇る。なおかつ、単年度の研究費が 750,000,000 米ドル（2004 会計年度）を超える研究重点大学である。UM には 19 のスクールおよびカレッジ²があり、教育研究活動に関する意思決定の分権が各部局に定着している。学士課程の学生の入学を迎え入れているのは、School of Art and Design、College of Engineering、Division of Kinesiology、College of Literature, Science, and the Arts（以下 LS&A と略記）、School of Music、School of Nursing の 6 部局である。このうち、教養教育を担っている LS&A は約 1,000 名のファカルティを擁し、3,500 以上のコースを提供している。

こうした機関の特性を持つ UM のファカルティには、卓越した研究能力とともに、優れた教育力量が求められている。このことは、とくにみずからのアカデミックキャリアのスタートを UM で切り、クラスを担当する新任教員にとって、きわめて大きなプレッシャーとなっている。

本稿では、2005 年度秋学期の直前に開催された新任教員オリエンテーション（New Faculty Orientation、2005 年 8 月 31 日）に筆者がオブザーバーとして参加した体験や、当日の配布資料等をもとに、とくにセッション（分科会）で論じられていた UM における優れた授業実践および「7つの原則」の推奨のあり方について紹介することを目的とする³。UM において「7つの原則」がどのように推奨されているのかに注目することによって、機関に固有な文脈にそくした「7つの原則」の適用の方法について示唆が得られるものと考えられる。

新任教員オリエンテーションは、教授学習支援組織である Center for Research of Learning and Teaching（以下 CRLT と略記）が、大学執行部との共催という形で実施主体となっている。とりわけ、教授学習活動の向上にかかわる企画立案および実施は CRLT がイニシアティブをとっている。オリエンテーションには、全学から 151 名の新任教員が参加し、会場となった Michigan League（大学会館）の大広間は活況を呈していた。

オリエンテーションでは、受付と朝食を兼ねた時間の後、全体会を経て個別テーマのセ

¹本稿で引用した UM の基本情報およびデータに関しては、同大学の HP を参照した。
<http://www.umich.edu/flash.html>

² Architecture & Urban Planning、Art & Design、Business Administration、Dentistry、Education、Engineering、Graduate Studies、Information、Kinesiology、Law、Literature、Science、& the Arts、Medicine、Music、Natural Resources & Environment、Nursing、Pharmacy、Public Health、Public Policy、Social Work

³ 「7つの原則」に関する研究の背景や特徴に関しては、本報告書 9-36 ページの中井・中島論稿を参照されたい。

セッション（1 時間半）に分散する。セッションに先立ち、朝食時のインフォーマルな会話では、新しく授業を受け持つ教員の授業運営に対する率直な不安が語られていた。たとえば、自分の教授経験の乏しさをどのようにカバーしたらよいのか、前任校での教授経験がはたして UM でも通用するのだろうか、自分の信じる教え方は UM でも妥当なのか、などである。これら教員の潜在的な悩みを解決するという課題を、FD の課題として引き取り、CRLT がセッションのテーマを選定している。テーマは、1. すべての学生に伝えるための資源および授業方略（Resources and Classroom Strategies to Reach all Students）、2. カレッジの授業における優れた実践に関する研究（Research on Best Practices in College Teaching）、3. 教授技術の資源および支援（Instructional Technology Resources and Support）、4. 臨床における批判的思考：問題の発生源の発見（Critical Thinking in the Clinic: Finding the Root of the Problem）であった。

このうち筆者は、LS&A のファカルティを中心に 65 名の新任教員が集ったセッション 2 に参加した。セッション 2 の目標は、UM の新任教員（とりわけ教授法に関心を寄せる教員）に、①カレッジにおける教授と学習に関する 2 つの研究の概要、②定評ある教授法の体験の機会、を提供することであった。

セッションでは、CRLT の講師による概要説明が行われた後、面識のない新任教員同士のアイスブレイキングの場として、ミニ演習の時間が挿しはさまれた。たとえば、UM の近隣に位置する Eastern Michigan University の Faculty Center for Instructional Effectiveness が作成した「自己診断フォーム（Self-Assessment form）」⁴を援用し、教員の行動チェックリスト（Teacher Behaviors Inventory）に沿って各自が自己評価を行い、その結果を同僚間で話し合うということが実施された（自己診断の項目については本稿末に資料として掲載）。こうしたミニ演習は、講師が推奨する教授法を新任教員が「学生」の立場になって経験し、教授法の有効性を体得するだけでなく、新任教員同士の打ち解けたムードを醸成し、協働する楽しさを共有する機会となっていた。教員の行動チェックのほかにも、ミニゲームなどが実施され、グループワークが 3 回実施された。

2. 学士課程教育におけるすぐれた実践の 7 つの原則の推奨

セッションの中心的なトピックである「7 つの原則」は、過去 50 年に及ぶ研究の蓄積を基礎とし、なおかつもっとも認知され普及している優れた実践として紹介された。とりわけ、UM の CRLT が「7 つの原則」に注目する意図は、あらゆるタイプの教授法、授業内外における学習経験や、教員と学生との公式・非公式の交流などに、優れた実践に関する研究の枠組みを適用するため、と説明された。以下、「7 つの原則」に沿って、どのようなポイントに強調点をおきながら紹介されていたのかを概観していきたい。

原則 1 学生と教員のコンタクトを増やす（Encourages student-faculty contact）

原則 1 に関しては、学生の学習に対する動機や積極的なかわりを向上させ、リテンションを高めることに有効であると説明された。なおかつ、学生の知的、人

⁴ オリジナルは、Harry Murray（psychology professor, University of Western Ontario）が開発したチェックリストであるという注記が付けられている。

間的成熟を促し、将来計画や専攻の決定に有効に作用することが紹介された。

具体的な実践方法として、授業内では積極的な学習環境づくりを行うこと、たとえば、教員が早めに教室に来て、授業終了後も少し残ること、学生の名前（顔）をおぼえること、などが推奨された。また、教員の側から学生に問いかけること、オフィスアワーに来るように誘うこと、等も勧められた。

授業外の行動については、教員と学生との公式・非公式の交流がたいせつであることが指摘された。たとえば、研究重点大学としての特性を持つ UM に固有なプログラムである学士課程研究機会プログラム（Undergraduate Research Opportunities Program: UROP）を活用し、教員の研究領域に対する学生の関心を引き出すこと、UM に存在するさまざまなラーニング・コミュニティを利用すること、が提唱された。

原則2 学生間で協力する機会を増やす（Encourages cooperation among students）

原則2に関しては、より高い次元の批判的思考能力の育成や、チームワークの力量形成などを目標とした学生同士の学びの推進に有効であると紹介された。また、知識の社会的構築という視点や、多くの学生が好む学習スタイルといった調和の観点からも、学生同士が協力することの重要性が主張された。さらに、「なにが効果的な授業実践に作用するのか？」という問いをめぐる教育学領域の研究を手がかりに、授業は文脈に依存し、学生は仲間から学ぶ、という知見が講師から紹介された。

具体的な方法としては、少人数グループによる討論、プロジェクトチームによる学習などが推奨された。

原則3 能動的に学習させる手法を使う（Encourages active learning）

能動的な学習は、単なる事実の習熟からより高い次元の批判的思考能力に至るまで、すべてのレベルの学習を促進することが強調された。また、学生が講義を受動的に聴くだけでなく、学生みずからが話し、書き、処理し、整理し、解決し、概念を応用できるように、学生に自分自身の学習行動やすでに学んだことについて振り返るよう勧めることの大切さが主張された。

具体的な実践方法としては、学生がペアで考えアイデアを共有させること、ミニット・ペーパー（学生が毎回の授業を短時間で評価する簡単なフィードバック用紙）、などを活用することが推奨された。

原則4 素早いフィードバックを与える（Gives prompt feedback）

原則4に関しては、学生が何を理解し、何を理解していないのかを即座に知ることの有効である点が強調された。良いフィードバックの具体的な条件には、1. タイムリー、2. 具体的、3. 発展的、4. 頻繁、5. 形成的、6. 累積的、であることが挙げられた。

具体的な実践方法としては、Muddiest Point（その授業でもっとも分かりづかった点を学生に書かせる評価法）、ミニット・ペーパー、カードの利用が提案され

た。

原則 5 学習に要する時間の大切さを強調する (Emphasizes time on task)

原則 5 については、教員と学生双方の学習（あるいは作業）に要する時間を重視することが主張された。とりわけ、教員の側は、授業外においては授業の編成、計画、課題の設計などが、授業内ではコースの目標に合致した授業時間の運営、意図的な時間配分、無用な「寄り道」の回避などが挙げられた。さらに、学生の時間を有効に使うためのガイドラインを作成し、学生が所要時間を予想できるよう支援することが推奨された。

また、UM の学生の特性として、成果志向が非常に強いという情報が提供された。とくに、多くの学生が成績評価（グレード）という形での学習成果を強く意識していることから、時間管理能力の獲得は学生たちにとってもニーズが高いことが報告された。

原則 6 学生に高い期待を伝える (Communicates high expectations)

原則 6 に関しては、学生に対する高く、かつ現実的な期待を教員が伝えることによって、学生に主体的に学ぶ意欲と所要時間に対する意識を呼び覚ますことが紹介された。

学生への高い期待をどのように表現するか、という点については、学生が獲得できる目標よりも高めに設定すること、つねに肯定的な態度を示すこと、が主張された。その背景として、教員自身がすべての学生が成功できるという信念をもつことの大切さが強調された。

逆に、困難を抱えている学生に対しては、安易に期待値を下げるよりも、学習に関する支援や人的な支援を提供することの重要性が説かれた。たとえば、期待や評価の基準を明確に説明すること、目安となるモデルを提供すること、進度をチェックし頻繁にフィードバックすること、どこに行けば適切な支援が得られるのかを明確に伝えることが有効であるとされた。

原則 7 多様な才能と学習方法を尊重する (Respects diverse talents and ways of learning)

原則 7 に関しては、学生たちは多様な能力を持っていること、なおかつさまざまな学習スタイル（それらは学生同士でも異なり、教員とも異なる）を持っていることをよく理解し尊重することが強調された。とくに、成長発達過程にある学士課程の学生にむけた多様な方略として、多様な教授法や多様な評価方法を用いることが推奨された。さらに、一般的に、学生は教員から「生徒」として扱われるよりも、自立した学習者としてアクティブ・ラーニングや仲間同士の相互学習をより好むことが紹介された。

以上のように、「7つの原則」の紹介時には、CRLT の講師が一般論を基礎としつつ、UM における具体的な授業の場面を事例として挙げながら説明していた点が特徴的であった。

また、原則を具体化するための実践方法は多様であり画一的ではないこと、個々の教員の専門領域に適した教授法を工夫することが必要であること、機関に固有な文化や学生の気質に配慮することが重要であることが繰り返し説かれていた。あわせて、教授学習に関するさまざまな科学的研究成果が紹介されていた。たとえば、一般的に学生の集中力が持続するのは 15 分間であること、そうしたタイムスパンに配慮した授業計画をたてる必要があること、というティップスには多くの新任教員が反応を示していた。

3. 参加者の反応および議論

「7つの原則」がひととおり紹介された後、全体的な質疑応答の時間がとられた。新任教員から寄せられた代表的な質問には、「ミニレスポンスペーパーは、記名式にすべきか、無記名式にすべきか」（原則4）、「学生に高い期待を伝えるのは、授業の初回の方がよいのか？」（原則6）、「期待を寄せるだけでなく学生個々人のレベルに応じてはたらきかけるために、授業内でプレ・プレースメントテスト（習熟度テスト）を利用するのは有効か？」（原則6）、などがあった。概して、学生の特性をつかみ、かれらと円滑なコミュニケーションを図るための方法論に関心が寄せられていたといえる。

これらの新任教員からの質問に対して、CRLT の講師は断定的な回答を避け、ほかの教員が同じような状況に置かれた場合はどう対処するか、という第2の質問をフロアに投げかけ、議論を深化させる方向で舵取りを行っていた。たとえば、ミニレスポンスペーパーの使い方に関しては、記名式か無記名式かの是非は一概に問えないこと、それぞれ利用する教員の意図を明確にして用いることが妥当であること、などが論じられた。

また、講師の側から、原則はあくまでも原則であり、それを実践化する方法は何通りもあり得ること、柔軟に適用することが大切であることが繰り返し強調されていた。そのための前提として、教員が UM の学生像を正確につかむことが不可欠であることが主張されていた。

総じて、ワークショップでは、授業の成功へのニーズを持つ新任教員からの個別具体的な質問と活発な議論が展開されていた。なかでも、演習型のワークショップは、当初やや緊張気味であった新任教員たちが自己を開放するとともに、優れた授業実践という共通の課題をめぐって専門領域の異なる同僚たちとラポールを築く場となっていた。とくに、前任校で教授経験を持つ教員たちからいくつもの事例が提供され、とかく一般論にとどまりがちな「7つの原則」の説明が一気に具体性を帯びたものになっていたことは注目に値する⁵。

なお、セッション2のしめくくり、CRLT からのメッセージとして新任教員に贈られたことばを紹介しておきたい。UM における教授学習支援組織としての基本姿勢が集約されているといえよう。“Let us know if there is any way we at CRLT can assist you. Best wishes for a successful, rewarding, and exciting year!”

⁵ ただし、オリエンテーション全体に関するアンケート（メールによる質問と回答）は実施されていたものの、セッションレベルの参加者のフィードバックはとられていなかった。このようなセッションの場合こそ、実際の教員のニーズを集約する貴重な機会としてアンケートなどを実施することが有効であろう。

4. まとめにかえて

UM の新任教員オリエンテーションにおける「7つの原則」の紹介を軸とした優れた授業実践の推奨は、日本の大学における FD を考えるうえでも示唆に富むものであった。もっとも、「7つの原則」が編み出された米国においては、新任教員のなかには自分自身が学生のために「7つの原則」にそくした教授法を受けてきた者や、大学院生のときにティーチングアシスタントとして実践した者もあり、日本における認知度とはひらきがあることも事実である。しかしながら、「7つの原則」を、実際の授業でどのようなタイミングでいかにして適用するか、という問いに対する解はひとつではなく、ここにこそ新任教員の悩みが存在し、「7つの原則」を FD のテーマとして取り上げる意義があるといえよう。UM のワークショップでは、これらのごく「当たり前」の原則を実践に移す際には、具体的な方法を必要とすること、多様な背景をもつ同僚がさまざまな視点から方法を検討することに教員コミュニティとしての意義があること、が一貫して主張されていた⁶。

また、UM における「7つの原則」を軸とした優れた授業実践の推奨では、教員個人の工夫や取り組みのみでは達成できることに限界があり、大学の組織的な支援体制の存在が不可欠になっていることが示唆されていた。具体的には、原則6の「学生に高い期待を寄せる」に関して、学生の成功に教員が高い期待を寄せていること、そのために励ます姿勢を持つことのほかに、あわせて、自信をもてない学生、伸び悩んでいる学生、さまざまな学生生活に関する悩みや問題を抱えた学生に対して、教員が学内のしかるべき専門部署を紹介し、大学全体が連携しながら学生を見守る、ということが強調されていた点である。各種の学生支援組織が活発に機能している UM に固有な文脈にそくしたメッセージであるといえよう。「高い期待」という一見抽象的なことがらを、学生に対して具体的に、組織的な支援という形で可視化していく、というアプローチに学ぶべき点は多い。本報告書で提起している名古屋大学における7提案も、「教員編」「学生編」とならんで、「大学編」の重要性が認知され、支援体制が組織的に整備されれば、7提案全体の意義がより強化されると考えられる。

今回、UM での新任教員オリエンテーションに参加して痛感したことは、結局のところ、授業を担当する教員も、組織としての大学も、まずは目の前の学生を知ることがいかに大切か、ということがらに尽きる。ほかでもなく、その機関に属する学生の志向性や気質などの特性を正しくつかむ努力を教員や大学が払うことが、「7つの原則」に基づく授業実践の成功へのひとつの鍵を握っているといえよう。

⁶ UM における優れた授業実践の推奨の先には、教員コミュニティの協働によるカリキュラム開発、スポーツ、文化、社会奉仕、インターンシップ、学士課程研究機会プログラムなどの正課以外のカリキュラム (co-curriculum) 開発に関する取り組みを促進することが意図されている。UM におけるカリキュラム開発に関しては稿を改めたい。

表 教員の行動に関する自己チェックリスト(Teacher Behaviors Inventory)
(項目のみ抜粋。1=almost never、2=rarely、3=sometimes、4=often、5=almost always の 5 段階評価)

Clarity: method used to explain or clarify concepts and principles

- ☐ Gives several examples of each concept
- ☐ Uses concrete, everyday examples to explain concepts and principles
- ☐ Defines new or unfamiliar terms
- ☐ Repeats difficult ideas several times
- ☐ Stresses important points by pausing, raising voice, etc.
- ☐ Uses graphs or diagrams
- ☐ Points out practical applications of concepts
- ☐ Answers students' questions thoroughly
- ☐ Suggests ways to memorize complicated screen
- ☐ Writes key terms on chalkboard or overhead screen
- ☐ Explains subject matter in familiar, conversational language

Enthusiasm: use of non-verbal behavior to solicit student attention and interest

- ☐ Speaks dramatically or expressively
- ☐ Moves about while lecturing
- ☐ Gestures with hands or arms
- ☐ Exhibits facial gestures or expressions
- ☐ Makes eye contact with students
- ☐ Walks up aisles beside students
- ☐ Gestures with head or body
- ☐ Tells jokes or humorous anecdotes
- ☐ Departs from prepared lecture if necessary
- ☐ Smiles or laughs while teaching
- ☐ Avoids distracting mannerisms

Interaction: techniques used to foster students' class participation

- ☐ Encourages questions or comments during lectures
- ☐ Corrects student errors without criticizing
- ☐ Praises students for good ideas
- ☐ Asks questions of individual students
- ☐ Asks questions of the class as a whole
- ☐ Incorporates students' ideas into lecture
- ☐ Presents challenging, thought-provoking ideas
- ☐ Uses a variety of media and activities in class
- ☐ Avoids rhetorical questions

Organization: ways of organizing or structuring subject matter

- ☐ Uses headings and subheadings to organize lectures
- ☐ Puts outline of lecture on chalkboard or overhead screen
- ☐ Clearly indicates transition from one topic to the next
- ☐ Gives preliminary overview of lecture at beginning of class
- ☐ Explains how each topic fits into the course as a whole
- ☐ Begins class with a review of topics covered last time
- ☐ Periodically summarizes points previously made

Pacing: rate of information presentation, efficient use of time

- ☐ Spends the right amount of time on obvious points

- ☐ Stays with major theme of lecture
- ☐ Covers the right amount of material in class
- ☐ Asks if students understand before proceeding to next topic
- ☐ Sticks to the point in answering students' questions

Disclosure: explicitness concerning course requirements and grading criteria

- ☐ Advises students on how to prepare for tests or exam
- ☐ Provides sample exam questions
- ☐ Tells students exactly what is expected on tests and assignments
- ☐ States objectives of each lecture
- ☐ Reminds students of test dates or assignment deadlines
- ☐ States objectives of course as a whole

Speech: characteristics of voice relevant to classroom teaching

- ☐ Speaks clearly
- ☐ Speaks at an appropriate volume
- ☐ Speaks at an appropriate pace
- ☐ Modulates voices (does not drone)

Report: quality of interpersonal relations between teacher and students

- ☐ Addresses individual student by name
- ☐ Announces availability for consultation outside of class
- ☐ Offers to help students with problems
- ☐ Shows tolerance of other points of view
- ☐ Talks with students before or after class

主要参考文献およびサイト

- Chickering, Arthur W. and Gamson, Zelda F.(1999). “Development and Adaptations of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *New Directions For Teaching and Learning*, no.80, Winter, San Francisco: Jossey-Bass .pp.75-81.
- Murray, H.G. (1985). “Classroom Teaching Behaviors Related to College Teaching Effectiveness”. In J.G. Donald & A.M. Sullivan (Eds.), *New Directions In Teaching and Learning: Using Research to Improve Teaching*. San Francisco: Jossey-Bass.pp.21-34.
- O’Neil, Christopher.(2005).”Research on Best Practices in College Teaching” (presentation handout), Center for Research on Teaching and Learning, August 31, 2005.
- Sorcinielli, Mary Deane.(1991).”Research Findings on the Seven Principles”, *New Directions For Teaching and Learning*, no.47, Fall, San Francisco: Jossey-Bass . pp.13-25.
- College of Literature, Science, and the Arts (LS&A), University of Michigan
<http://www.lsa.umich.edu/lsa/home/>
- Center for Research of Learning and Teaching, University of Michigan
http://vrd.ucv.cl/importaciones/Teaching-Learning/Teaching_Strategies_Website/abocrlt.html

謝辞

本稿を執筆するうえで、UM の多くの方々からご厚誼を賜った。とくに、同大学の客員

研究員である筆者（平成 17 年 7 月～10 月滞在。平成 17 年度文部科学省海外先進教育実践支援プログラムにより派遣）に、新任教員オリエンテーションへのオブザーバー参加という貴重な機会を授けてくださった CRLT のダイレクターの Constance Cook 氏には心から御礼申し上げたい。また、LS&A における教育方針に関してさまざまな示唆を与えてくださった Robert Megginson 氏 (Associate Dean of Undergraduate and Graduate Education, LS&A)、LS&A のアドミニストレーションにかかわることがらに知悉し、筆者との数次にわたる対話に快く応じてくださった Marjorie Horton 氏 (Assistant Dean of Undergraduate and Graduate Education, LS&A) に感謝の意を表したい。

7つの原則に基づくウェブ活用授業の実践手法とその適用可能性

中島 英博 岡田 啓
中井 俊樹 山里 敬也

1. はじめに

1.1 研究の背景

1987年にチッカリングとガムソンを中心とした研究グループによって発表された、「優れた授業実践のための7つの原則」は、米国の高等教育に大きな影響を与えた。この成果は、全米の大学関係者の間で最も認知度の高い教授法であり、現在でも全米をはじめ世界の多くの大学で活用されている (Gamson, 1991, Poulsen, 1991)。「7つの原則」は、学生を巻き込み参加させる教授法の原則をまとめたものであり、具体的には次の7つを指す。(1) 学生と教員のコンタクトを促す、(2) 学生間で協力する機会を増やす、(3) 能動的に学習させる手法を使う、(4) 素早いフィードバックを与える、(5) 学習に要する時間の大切さを強調する、(6) 学生に高い期待を伝える、(7) 多様な才能と学習方法を尊重する。

「7つの原則」では、原則それぞれについて10個程度の実践手法が示されている。ここでいう実践手法とは、学生を授業・学習に参加させるために、学問分野を問わず全ての教員が実践できるような行動リストのことをいう。具体的には、「学生を研究室に遊びにくるよう招く」、「授業開始後2週間までに学生の顔と名前を覚える」、「テストやレポートは1週間以内に返却する」などの内容である。

一方で、この間の情報技術の発展は目覚ましいものがあり、高等教育の現場で活用できるツール群もその量、質ともに飛躍的に充実してきている。例えば、電子メール、電子掲示板、チャット、ビデオ会議システム等の今日における普及は、学生と教員のコンタクトの促進、学生間での協力、素早いフィードバックの付与の手段を広げることに貢献している。近年はコースマネジメントシステム等の普及に伴い、日本においてはウェブを活用した授業が急速に普及してきた。それに伴い、ウェブ活用授業において、教員がどのような実践手法を用いると教育効果が向上するのかを知るための潜在的ニーズが高まっている。しかしながら、教授法の原則を実現する具体的な実践手法については、多くの大学教授法の研究において対象に含まれておらず、具体的な実践手法はウェブを活用する教員レベルで蓄積されているのが現状である。

いくつかの海外の大学では、上述のような教員のニーズに対応するために、ウェブを活用した授業を実践する教員が持つ実践的なノウハウを収集し、公開・共有することに取り組んでいるようである。しかしながら、日本においてはウェブ活用授業に適した実践手法は、文献等に散在しているのが現状である。近年のウェブ活用授業においても、どのような教員の働きかけが学生の学習を促進するのかに関する関心は高いが、教授法の原則に沿った形でまとめられた実践手法は未だ発表されていない。

海外の大学では、ウェブなどの新しい技術を遠隔教育のためのツールとして用いる事例も多い。しかし、日本では対面授業を補完するためにウェブを活用する事例が多く、海外で蓄積されたノウハウが直ちに活用できるとは限らない。日本の教員向けに編集された実

実践手法の提供には、潜在的に高いニーズがあると考えられる。

1.2. 本稿の目的

本報告の第一の目的は、ウェブ活用授業における学生参加度を高めるための実践手法について、各大学の現場レベルで蓄積された実践手法を収集することである。第二の目的は、収集した実践手法の内容を、日本の大学教育の現場でウェブ活用授業の経験を持つ教職員に評価をしてもらい、この結果を通じて日本の現場で有効な実践手法を検討することである。

2. 実践手法の収集と整理

2.1 実践手法の収集

「優れた授業実践のための7つの原則」に関連する実践手法自体は、各大学の現場レベルで多様化された形で蓄積されている。このような実践手法の収集は困難である面もあるが、いくつかの大学では教育支援組織が教員向け実践手法集として提供している。本稿では、こうした機関レベルで提供されている実践手法に注目し、その収集を試みる。

欧米の大学の教育支援組織が提供する教員向け実践手法集は、現在では教員の利便性を考慮してウェブを通じて提供されているものが多い。そこでウェブを通じて入手できる資料を中心に実践手法をまとめる。収集と整理の手順は次の通りである。まず、ウェブを通じて入手できる資料から実践手法をまとめ、全て翻訳する。これらは主に文末に示した4つのウェブサイトの実践手法を中心に収集した。また、いくつかの資料で重複する手法を一つにまとめる。その上で、教員の行動として示すことができない抽象度の高いものを捨象して整理する。次にこうして作成した実践手法のリストを、ウェブを活用した授業の実践経験を持つ筆者らのグループで検討した。特に、筆者らの経験に基づいて日本の現場に合うよう実践手法を修正する作業を行った。こうしてまとめられたものが、表に示す学生参加度を高めるウェブ活用授業の実践手法である。

2.2 収集された実践手法の特徴

収集された実践手法を見るとわかるように、その多くは対面授業においても活用できるものも数多く含まれている。日本における実践は、ハイブリッド型やブレンディッド型といわれるように、対面授業における補助ツールとしてウェブを活用する事例が多く、本稿もそうした実践の支援を意図しているため自然な結果といえる。しかし、一方でウェブを活用することではじめて可能になる固有の実践手法もいくつかある。ここでは、こうした実践手法が持つ特徴について触れておきたい。

第一に、インタラクションの促進である。具体的には、学生が教員や他の学生にコンタクトをとる上で、また教材にアクセスする上で、新たなチャンネルを追加する特徴である。例えば、メール、掲示板、チャットなどによって学生が教員と適切なコンタクトを取れることで、学生はより授業に参加することになるだろう。また、グループ内で使えるメーリングリスト、チャットルーム、掲示板を用意することで、学生は必ずしも同じ場所に集まって作業する必要がなくなる。こうした機能は、対面授業だけでは提供されてこなかったものであり、表に示すリストにはこの長所を活かした実践手法が多数含まれている。

第二に、アクティブラーニングの促進である。具体的には、学生が学習を進める上で、新たな学習方法を追加する特徴である。実際の授業では、予備知識が不足している学生、意欲的で発展的な内容を知りたい学生、学習内容の修得に時間がかかる学生など多様な学生が混在している。自己採点できるセルフテストや、一定の基準に到達できない限り次の単元・課題に進めないオンラインテストを設けることで、こうした多様な学習者に、主体的に学習に取り組む機会を提供できる。表のリストにはこの長所を活かした実践手法も多数含まれている。

これらの実践手法は、全てを教員が実践しなければならないという意味で示すものではない。むしろここに示した実践手法の全てを、一人の教員が担当する授業に取り入れることは困難であろう。これらは、授業でウェブを活用してみたいと考えている教員、とりわけウェブ活用を通じて学生の学習への参加を促進することに関心のある教員に対して、まずできるところから取り組めるようきっかけを提供するものである。そして、それまで知らなかった実践手法を知り、関心がある実践手法、担当する授業に適した実践手法を活用する取り組みを支援するものである。

3. 実践手法の評価

3.1 調査の方法

以下では、収集された実践手法について、日本の大学教育の現場でウェブ活用授業の経験を持つ教職員から得た評価を示す。調査の方法は次の通りである。収集した実践手法を、第3回日本 WebCT ユーザカンファレンス（2005 年 6 月 3 日、4 日開催、於東京国際交流館、のべ参加者数 271 名）で公開し、参加者に評価を呼びかけた。日本 WebCT ユーザカンファレンスは、ウェブ活用授業の実践を進める教員が多数参加するコミュニティであり、日本の現場における実践手法の適用可能性を問う上で適切なコミュニティと考えられる。調査ではポスター上に示された 49 の実践手法のうち、評価者が「実践すべき」と考えるもの、「実践すべきでない」と考えるものそれぞれにシールでマークをつける方法で意見を収集した。全ての実践手法についてどちらかの判定をすることは求めず、評価者が強く実践すべきである、あるいは実践すべきでないとするものについてのみ判定を求めた。

3.2 評価の結果

下に示す表には、収集された実践手法とともに、評価者によって「実践すべき」あるいは「実践すべきでない」と判定された数を示している。この評価結果は、大きく分けると（1）多数が「実践すべき」と判定し「実践すべきでない」という判定がないもの、（2）「実践すべき」という判定が相対的に多いもの、（3）「実践すべき」という判定と「実践すべきでない」という判定が混在するもの、（4）「実践すべきでない」という判定が相対的に多いもの、という 4 つに分類できる。以下ではこの分類に沿って実践手法の特徴を示す。

第一に、多数が「実践すべき」と判定し「実践すべきでない」という判定がない実践手法がある。この実践手法は、日本におけるウェブ活用授業でも適用可能性が高いと考えられる。具体的には、「学生が気楽に教員にコンタクトをとることを奨励する」「質問などに対しては 2 日以内などできるだけ早くレスポンスをする姿勢を伝える」「試験の答案へのフ

ィードバックは一定の期間内に返却する」「書かせる、発表させる、プロジェクトをさせるなど、成績評価の対象となるものを多様にする」などがこれにあたる。これらの実践手法は、ウェブ活用授業に限らず対面型の授業においても同様に重要かつ有効な手法と考えられる。調査では、学生による学習への主体的参加を促進する実践手法は、対面型の授業で有効な手法はウェブを活用した授業においても同様に有効であることが明らかとなった。

第二に、「実践すべき」という判定が相対的に多い実践手法がある。具体的には、「発展的学習を求める学生向けに、追加の文献や課題を与える」「掲示板に優れた意見や課題が提出されたときは、他の学生に見るように呼びかける」「学習に使用する文献はあらかじめ教材として用意しておき、いつでも閲覧できるようにしておく」「オンライン教材によって、それぞれのスピードで個別に学習できる活動を組み入れる」などがこれにあたる。これらの実践手法は、対面型の授業では実現しにくいものの、ウェブを活用することでその実現が容易にできるものが含まれていると考えられる。

第三に、「実践すべき」という判定と「実践すべきでない」という判定が混在する実践手法がある。具体的には、「授業を録音・録画をしてアップロードしておく」「ある水準を合格しないと何度でも繰り返して受け直させるテストを用意する」「定期的に授業のメールマガジンを送る」「学生の最終成果をウェブで公開する」などがこれにあたる。これらの実践手法も、対面型の授業では実現しにくいものの、ウェブを活用することでその実現が容易にできるものが含まれている。しかしながら、学問分野や学習内容によって取り入れ易い部分、取り入れにくい部分もあるだろう。最終成果をプレゼンテーションで行う場合に、「学生の最終成果をウェブで公開する」ことが有効かもしれないが、同時にある水準を合格しないと何度でも繰り返して受け直させるテストを用意する」ことが困難な場合もあるだろう。この点は追加的な調査により、どのような授業で適用可能性が高くなるかを検討する必要があるだろう。

第四に、「実践すべきでない」という判定が相対的に多い実践手法がある。具体的には、「掲示板で最低限発言すべき回数を示す」「レポート課題を出す前に何回も見直すことを求める」「ディスカッションの口火を切る役割をあらかじめ数人の学生に割り当てる」などがこれにあたる。これらの実践手法には、学生の主体的な参加を促すために、教員が直接的に学生の行動を規定するものが含まれており、こうした手法には否定的な評価が多い結果となった。これらについては、日本の現場では有効となり得ない可能性があり、今後の検討が必要である。

表 学生参加度を高めるウェブ活用授業の実践手法とその評価

1. 学生と教員のコンタクトを促そう	実践すべきである	実践すべきでない
学生が気楽に教員にコンタクトをとることを奨励する	11	0
バーチャルオフィスアワー、チャットタイムを設定する	1	1
質問などに対しては2日以内などできるだけ早くレスポンスをする姿勢を伝える	16	0
掲示板で最低限発言すべき回数を示す	0	3
定期的に授業のメールマガジンを送る	2	3

教員の写真や顔のイラストなどを載せる	5	2
メールなどにおいては学生に個人の名前で呼びかける	6	0

2. 学生間で協力する機会を増やそう	実践すべきである	実践すべきでない
ディスカッションの口火を切る役割をあらかじめ数人の学生に割り当てる	1	4
掲示板への投稿を期待していることを伝える	6	0
授業の早い内に学生がお互いに知り合いになれるようなゲームなどを取り入れる	1	1
グループで使えるメーリングリスト、チャットルーム、掲示板を用意する	4	1
授業の予習や試験前、課題提出前にはグループで勉強するように呼びかける	3	2
学生間でそれぞれの学習成果にコメントし合う機会を設ける	6	1
授業時間の内外において共同で行う課題を出す	5	1

3. 能動的に学習させる手法を使おう	実践すべきである	実践すべきでない
授業の要約を作成させる活動を取り入れる	2	1
学生に授業に期待することを述べさせる	2	0
教員の考え、他の学生の考え、参考書などに書かれている考えに対して批判的なコメントをさせる	1	2
ある水準を合格しないと何度でも繰り返して受け直させるテストを用意する	4	3
授業の内容に関連する発展的な学習ができるように準備する	4	1
フリーで公開されているオンライン教材を学習活動に取り入れる	1	2
価値ある情報源のすべてが電子リソースとしては存在しないことを伝える	3	0

4. 素早いフィードバックをしよう	実践すべきである	実践すべきでない
授業についていけないと思われる学生にコンタクトを取る	5	0
試験の答案へのフィードバックは一定の期間内に返却する	12	0
学生のアクセス情報を参照し、学習状況を把握する	4	0
学生全員から課題を受け取った直後に、解答を公開する	1	1
優れた学生のレポートを公開し、優れている理由を説明する	6	0
授業を録音・録画をしてアップロードしておく	4	3
メールなどで課題を受け取ったら、まずそのことを返事する	6	0

5. 学習に要する時間の大切さを強調しよう	実践すべきである	実践すべきでない
コースの開始時に学生に求める学習の全体像を提示する	5	1
課題の完成に最低どれくらいの時間が必要なのかを伝える	1	1
授業を欠席したときは、追いつくための学習が必要であることを伝える	0	0
レポート課題を出す前に何回も見直すことを求める	0	1
学習に使用する文献はあらかじめ教材として用意しておき、いつでも閲覧できるようにしておく	2	0

一回の授業にはどれだけの時間外の学習が必要かを伝える	0	0
大きな課題を出すときには、小さな課題に分割する	6	1

6. 学生に高い期待を伝えよう	実践すべきである	実践すべきでない
授業で学生に一生懸命勉強してほしいと伝える	0	2
掲示板に優れた意見や課題が提出されたときは、他の学生に見るように呼びかける	3	0
学生の最終成果をウェブで公開する	2	3
発展的学習を求める学生向けに、追加の文献や課題を与える	4	0
自ら意欲的な目標を設定する学生や優れた成果を出した学生を褒める	6	0
関連する外部の掲示板に参加することをすすめる	0	2
授業内容の延長上にある最先端の研究を紹介する	5	0

7. 多様な才能と学習方法を尊重しよう	実践すべきである	実践すべきでない
コンピュータの操作の苦手な学生に対して十分なオリエンテーションを行う	3	0
基本的な知識やスキルが身につけていない学生には、追加の教材や練習問題を与える	2	0
オンライン教材によって、それぞれのスピードで個別に学習できる活動を組み入れる	4	0
書かせる、発表させる、プロジェクトをさせるなど、成績評価の対象となるものを多様にする	8	0
授業の中にビデオ、ディスカッション、講義、グループ学習、ペア学習などの多様な学習活動を用意する	7	0
授業内でもオンライン上でも他人を傷つける言動を慎ませる	3	0
自分と異なる考え方や経験を尊重することの重要性を伝える	4	0

4. おわりに

本稿では、ウェブ活用授業において、学生参加度を高めるための実践手法の適用可能性を検討した。今回まとめた実践手法のリストは、日本におけるウェブ活用授業実践においてある程度有効なものと考えている。その一方で、日本でウェブ活用授業を実践する教員から実践すべきであるとは思わないと判定された手法もある。また、今回の調査に参加した判定者は教える学問分野も多様であり、指導する学生の学力や学習歴、所属する組織の教育方針も多様である。こうした違いが実践手法の適用可能性の判定に影響を与えることも考えられる。今回の調査は予備的なものであり、今後より詳細な調査を行う必要があるだろう。さらに、多くの実践者が暗黙知として蓄積している実践手法、あるいは筆者らがリストアップしたもののうち日本の現場では妥当とならない実践手法などがあるだろう。これらは今後の課題としたい。

資料 実践手法のウェブサイト

- ・ Graham, C., Cagiltay, K., Lim, B., Craner J. Duffy, T. (2004) Seven Principles of Effective Teaching: A Practical Lens for Evaluating Online Courses, Retrieved April

- 29, 2004, from <http://www.westvalley.edu/wvc/trc/seven.html>
- ・ Panitz, T. (2004) Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education Implementation Ideas, Retrieved October 4, 2004, from <http://home.capecod.net/~tpanitz/7ideas.htm>
 - ・ State University of West Georgia (2004), Seven Principles of Good Teaching Practice, Retrieved October 4, 2004, from <http://www.westga.edu/~distance/webct/facultymanual/AfacCommun.html>
 - ・ Walker, G. (1998) Teaching Resource Center of the University of Tennessee at Chattanooga: Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education. Retrieved October 4, 2004, from <http://www.utc.edu/Administration/WalkerTeachingResourceCenter/FacultyDevelopment/7principles.html>

参考文献

- 中井俊樹・中島英博（2005）「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号，283-299頁。
- 中島英博・中井俊樹（2005）「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号，71-80頁。
- Astin, A. (1984) “Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education”, *Journal of College Student Personnel*, 25, pp.297-308.
- Chickering, A. and Ehrmann, S. (1996) “Implementing the Seven Principles: Technology as Lever,” *AAHE Bulletin*, October 1996, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) “Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Gamson, Z. (1991) “A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education”, *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, pp.5-12.
- Feldman, K. (1997) “Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings” in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon Press.
- Poulsen, S. (1991) “Making the Best Use of the Seven Principles and the Faculty and Institutional Inventories”, *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, pp.27-35.

テイプス先生からの7つの提案

教員編



名古屋大学高等教育研究センター

ティップス先生からの7つの提案とは

この冊子は、名古屋大学の学生・教員・大学組織がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学の先生方は、すでにさまざまな優れた授業を実践しています。本冊子は、主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供するものです。

この冊子のねらいは、教育評価の基準を提供することではなく、名古屋大学に埋もれていた優れた教育実践とそのための知恵を明示化し、大学の全構成員が共有するための枠組みを提供することにあります。優れた授業を通して教育効果を高めるためには、学生・教員・大学組織の三者の努力が同じ方向に向かって統合されていく必要があります。授業改善を教員の努力のみに求めることは効果的とは言えません。大学組織の支援も重要ですし、学生が主体的に授業に参加する姿勢をもつことも大切でしょう。

たとえば、オフィスアワーを例にとってみましょう。最近多くの大学では、オフィスアワーが導入されていますが、必ずしも学生の利用が期待どおりに進んでいないと言われています。オフィスアワーを通じた教育が、より充実したものになるためには、まず大学組織はオフィスアワーを制度化するだけでなく、教員と学生が気軽に話せる場所を提供することが大事です。また、教員も単にシラバスにオフィスアワーの時間帯を示すだけでなく、授業の中で「気軽に研究室に來なさい」と伝えたり、研究室のドアを開放して歓迎の意思表示を行うことが必要でしょう。さらに学生自身も授業でわからないことをそのままにしないで、教員の研究室に足を運ぶといった積極的な学習態度を身につける必要があります。こうした三者の取り組みがお互いを支え合ったときに、はじめて目標が達成されるのです。



図 大学教育の質的向上を支える学生・教員・大学組織

以上のような考えに基づいて開発したため、『ティップス先生からの7つの提案』は教員向け、学生向け、大学組織向けの三分冊からなっています。それぞれ教員、学生、大学組織がよりよい授業を実現するために、役に立つ提案を7つの短い文章にまとめ、それぞれの提案のもとにすぐにでも実行可能なアイデアを7つずつ配置しました。それぞれの分冊は、他の2つの分冊と内容的に関連づけられており、教員、学生、大学組織の三者の視点から同じ目標が達成されるようになっています。また、『ティップス先生からの7つの提案』という名称をつけた理由は、高等教育研究センターにおいてすでに開発された授業の秘訣集である『成長するティップス先生』と本冊子が相互に補完的関係にあるためです。

本冊子を制作するヒントになったのは、米国高等教育学会で開発された『優れた授業実践のための7つの原則』でした。この原則を参考にしながら、日本の大学での活用をめざし、名古屋大学が蓄積してきた事例、独自の調査、教授・学習理論研究の成果を用いた結果、オリジナリティの高いものが作成できたと自負しています。

ティップス先生からの7つの提案の使い方

この冊子は、以下のように使うことができます。

1. 7つの提案は、覚えやすい簡潔な文章からなっています。ご自分が日頃気をつけていること、努力していることを整理して、体系化するための枠組みとして活用できます。
2. 49個のアイデアの中には、自分では実践したことのないような項目も含まれているでしょう。その中でご自分の授業に取り入れてみたいものがあつたら、ぜひ実践してはいかがでしょう。とはいえ、すべてを実践する必要はありません。ご自分の個性や授業の目的に照らして有効と思われるものを見つけてください。
3. 学生向け、大学組織向け冊子もぜひご一読ください。三分冊は同じ目標を達成するために教員、学生、大学組織の三者がそれぞれ何をしたらよいかを関連させてあります。とくに、学生向け冊子をクラスに配布して紹介すると、授業改善のためのあなたの取り組みがより効果的になるでしょう。
4. この冊子に含まれているアイデア以外に、さらに優れたアイデアを実践されている方もいるかもしれません。あなたが日頃の授業で大事にされていること、あるいは工夫されていることを高等教育研究センターまでお伝えください。次回の改訂に活用させていただきます。

提 案 1

学生と接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるときよりも、一人の個人として見なされるときの方が、学生は授業に対する帰属意識や責任感を持つものです。授業への参加度を高めるためにも、学生と接する機会を増やしてみましょう。学生にとって自ら積極的に教員に接することは勇気がある行為なので、教員からきっかけをつくってあげることも大切です。

- ➡ クラスの学生に出会ったら声をかける
- ➡ 学生にオフィスアワーを積極的に利用するようにすすめる
- ➡ 学生に自分のメールアドレスを公開し、e メールによる質問を受け付ける
- ➡ 授業終了後しばらく教室に残り、学生の質問に答える
- ➡ 自分の研究内容について話す
- ➡ 学生が教員に親しむための親睦会を開く
- ➡ 学生が主催する勉強会やイベントに参加する



提 案 2

学生間で協力して学習させる

クラスメイトが仲間になれば、学生は授業に参加しやすくなります。さらに、それぞれの学習方法や考え方の違いを認め互いに補い合うことで、授業内容をより深く理解することが期待できます。ただし、協力的な関係を持った学習活動は自然にはなかなか起こりにくいので、協力して学びやすい雰囲気や仕組みづくりを心がけましょう。

- 学生同士で協力して学ぶことの重要性を伝える
- 初回の授業では学生がお互いに知り合える活動を取り入れる
- 授業時間の内外において共同で行う課題を出す
- 少人数のグループに分けてディスカッションを行う
- 学生のグループで利用できるメーリングリストや電子掲示板を設定する
- 学生が提出したレポートや答案の内容を受講生全体で共有する
- 学生間でそれぞれの課題を評価し合う活動を取り入れる

提 案 3

学生を主体的に学習させる

受け身の学習では高い学習効果を期待することはできません。また、大学教育においては、主体的に学習する姿勢を学生に身につけさせることも重要です。授業を担当するにあたっては、授業の内容を充実させるだけでなく、それらの内容をどのように主体的に学ばせるのかについても配慮してみましょう。

- ➡ 主体的に授業に参加することの重要性を伝える
- ➡ 授業ではすべての学生に発言・質問する機会を与える
- ➡ 授業の中で学生の課題を発表させる
- ➡ 学んだことを他の学生に教える活動を取り入れる
- ➡ 学生が個別に研究活動をする機会を設ける
- ➡ 授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する
- ➡ 授業内容に関連する研究会やインターンシップなどを紹介する



提 案 4

学習の進み具合をふりかえらせる

学生にとって、どこまで学習目標に近づいているのかを確認することは、その後の学習を進める上で貴重な情報です。また同時に、教員にとっても授業の進め方をチェックするよい機会となります。学期の途中でも大事な内容を教えた直後に、小テストなどによって学習の進み具合をふりかえる機会を与えましょう。

- ➡ 授業の内容が理解できないときは教員に伝えるようにすすめる
- ➡ 小テストや宿題を課すことで学生の進捗状況を常に確認する
- ➡ 良かった点を褒め、同時に建設的なコメントを与える
- ➡ 出席票に質問や意見を書かせ、次回の授業で回答する
- ➡ 試験の答案やレポートを一週間以内に返却する
- ➡ テスト終了直後に解答例を学生に配布する
- ➡ 学期中に1回以上、個々の学習成果に対して詳細なコメントを与える





提 案 5

学習に要する時間を大切にする

授業時間外の学習の大切さは広く理解されてきたようですが、どのように学習時間をやりくりしたらよいかにとまどう学生も少なくありません。時間を有効に活用することは、学生の学習成果を左右するきわめて大切な要素です。教員は、授業への取り組み方の指導や課題を通して、学生に学習時間を管理する方法を身につけさせましょう。

- ➡ 日常的な学習や学習計画の重要性を伝える
- ➡ 授業は時間通りに始め、時間通りに終了する
- ➡ 授業の予習・復習や課題に取り組むために必要な学習時間量を伝える
- ➡ 授業には毎回出席して、学習に集中するように求める
- ➡ 大きな課題の場合には、段階的な締切をいくつか設定する
- ➡ 学生に発表させる時は、事前にリハーサルをするように求める
- ➡ 重要な文献は教材集などの形で早い時期に学生に渡しておく

提 案 6

学生に高い期待を寄せる

学生は、教員や周りの期待に対し敏感に反応するものです。学生は期待されていないとわかったら、学ぶ意欲を衰退させ、結果として学習効果は低下するでしょう。授業のさまざまな場面で学生に対して期待していることを伝えたり、努力すれば手に届く具体的な目標を設定したりすることで、学生の学ぶ意欲を刺激してみましょう。

- ➡ 学習する内容が学生の将来において持つ意味を考えさせる
- ➡ 毎回の授業の始めにその日の学習目標を板書し、口頭でも説明する
- ➡ がんばって取り組まなければ達成できない課題を用意する
- ➡ 意欲的な学生向けに発展的内容の文献や課題を用意する
- ➡ 大学院の授業を見学する機会を与える
- ➡ 授業内容の延長上にある最先端の研究を紹介する
- ➡ 優れた答案やレポートの例を紹介し、どの点が優れているか説明する



提 案 7

学生の多様性を尊重する

大学はさまざまな学習スタイルや属性を持った学生を受け入れることで活力を生み出しています。教員は、そうした多様性を尊重するとともに、学生にもそのことを伝えていく必要があります。また、学生の多様性は授業を阻害する要因と見なすのではなく、学生の視野を広げ教育効果を高める一手段としてとらえてみてはいかがでしょう。

- ➡ 自分と異なる考え方や背景を尊重することの重要性を学生に伝える
- ➡ 学生間の経験、興味・関心、学習スタイルの違いについて知る努力をする
- ➡ 予備知識が足りない学生のために補習教材を用意する
- ➡ 障害をもった学生のために補助器具や教授法の工夫などの便宜をはかる
- ➡ 映像教材、ディスカッション、グループ学習などの多様な学習活動を用意する
- ➡ 他の学生に対する差別的発言や攻撃的な言動をしないように求める
- ➡ 教員自身が持つバイアスやステレオタイプに敏感になる

お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイデアや他の分冊(学生編と大学編)の内容を知りたい方のためにホームページを作成しました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

2. この冊子をお読みにになった感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイデアなどのコメントをぜひお寄せください。また本冊子をご入用の方もご一報ください。

連絡先: メールの場合は、staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

学内便の場合は、高等教育研究センター宛





本冊子作成のために参考にした主な文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部.
- デイビス, B. G. (香取草之助訳) (2002)『授業の道具箱』東海大学出版会.
- 中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.
- 中島英博・中井俊樹(2005)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, pp.71-80.
- 名古屋大学教養教育院(1998-2005)『豊かな教養教育を目指してー共通教育の方針・事例集』各年度版.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『実践的大学教授法の開発を目指してー「成長するティップス先生」の記録 2004.08-2005.03』特色GPシリーズ1号.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色GPシリーズ3号.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989) *Faculty Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

戸田山 和久
夏 目 達 也
近 田 政 博
中 井 俊 樹 (プロジェクトチーフ)
鳥 居 朋 子
中 島 英 博
青 山 佳 代

イラスト

プロダクションスコール株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈教員編〉

2005 年 9 月 1 日 第1版

著者 名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
052-789-5696
staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社プリンテック
名古屋市東区徳川一丁目9番 30 号
052-932-5768

© 名古屋大学高等教育研究センター

2005. Printed in Japan

ISBN4-901730-63-0



ISBN4-901730-63-0



テイプス先生からの7つの提案

学生編



名古屋大学高等教育研究センター

ティップス先生からの7つの提案とは

この冊子は、名古屋大学の学生・教員・大学組織がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。この冊子は、さまざまな調査により収集した事例をデータベース化し、学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。そのデータのなかには、名古屋大学の先輩学生からみなさんへのアドバイスもたくさん含まれています。

この冊子のねらいは、みなさんの学習態度を評価することではなく、名古屋大学の学生のなかに埋もれていた学習の秘訣を目に見える形にし、広く共有するための枠組みを提供することにあります。

この冊子を読んでほしい人は、次のような人です。高校までの勉強のやり方と大学での勉強のやり方の違いにとまどっている人。自分では頑張れると思って大学に入ってきたのに、なかなかうまくいなくて悩んでいる人。大学での勉強が楽しくなって、もっと成果を高めたい人。この冊子に収められているアイデアを取り入れて、学習の進め方をもう少し主体的なものにしてみよう。そうすると、視野が広がって学ぶことがより楽しくなると同時に、学習の効果も高まっていくでしょう。

実は、『ティップス先生からの7つの提案』は学生向け、教員向け、大学組織向けの三分冊からなっています。今みなさんが手に取っているのは、このうちの学生向け分冊です。私たちが三分冊構成にした理由を説明しましょう。学習効果を高め、みなさんの大学生活を充実したものとするには、学生・教員・大学組織の三者の努力が同じ方向に向かって統合されていく必要があります。名古屋大学の教員はさまざまな形で授業改善に取り組んでいるところです。また、大学組織もそうした取り組みを支援しています。でも、それらの取り組みが成功し、優れた授業が実現するためには、学生のみなさんも主体的に授業

に参加する姿勢をもつことが不可欠です。

たとえば、オフィスアワーを例にとってみましょう。最近多くの大学では、オフィスアワーが導入されていますが、必ずしも学生の利用が期待どおりには進んでいないと言われています。オフィスアワーを通した教育が、より充実したものになるためには、まず大学組織がオフィスアワーの制度を設け、教員と学生が気軽に話せる場所と機会を提供することが大事です。もちろん、教員も単にシラバスにオフィスアワーの時間帯を示すだけでなく、授業のなかで「気軽に研究室に來なさい」と伝えたり、研究室のドアを開放して歓迎の意思表示を行うことが必要でしょう。

でも、みなさん自身が授業でわからないことをそのままにしないで、教員の研究室に足を運ぶといった積極的な学習態度を身につけなければオフィスアワーの制度はうまく機能しないでしょう。

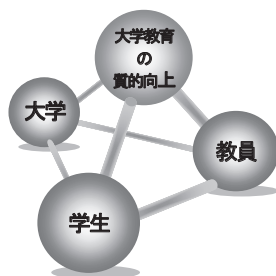


図 大学教育の質的向上を支える学生・教員・大学組織

以上のような考えに基づき、それぞれ学生、教員、大学組織がよりよい授業を実現するために、役に立つ提案を7つの短い文章にまとめ、それぞれの提案のもとにすぐにでも実行可能なアイデアを7つずつ配置しました。それぞれの分冊は他の2つの分冊と内容的に関連づけられており、学生、教員、大学組織の三者の視点から同じ目標が達成されるようになっています。

最後に、ティップス先生という名前の由来について紹介します。本冊子を作成した高等教育研究センターは、これまでに『成長するティップス先生』という大学教員向けの授業の秘訣集を開発し、ウェブページと書籍で公開しています。ティップス先生は、その中の物語の主人公です。この冊子は、『成長するティップス先生』と相互に補完的関係にあるため、『ティップス先生からの7つの提案』と名づけられています。

ティップス先生からの7つの提案の使い方

この冊子は、以下のように使うことができます。

1. 7つの提案は、覚えやすい簡潔な文章からなっています。みなさんが日頃気をつけていること、努力していることを整理して、体系化するための枠組みとして活用できます。
2. 49個のアイデアのなかには、自分では実践したことのないような項目も含まれているでしょう。このなかで取り入れてみたいものがあったら、ぜひ実践してみてください。やってみるときには、少しだけ勇気と努力がいるかもしれません。できそうなところから始めてみましょう。
3. この冊子に含まれているアイデア以外にも、自分はこんなことをやっている！ということがあるかもしれません。それを仲間や後輩に伝えてみませんか。あなたの学習のノウハウを高等教育研究センターまでお知らせください。次回の改訂に活用させていただきます。

大学での学習に主体的に関わり、実り豊かな大学生活を送るために、この冊子が役立つことを期待しています。



提 案 1

教員と接する機会を増やす

大学の教員は研究で忙しくて学生の相手などしてくれないと思うかもしれませんが、しかし、学生が質問に来ることを望んだり、学生の話聞いてみたいと思う教員も少なくありません。大学生活の中で、さまざまなことを話せる教員を見つけることができれば、大学での学びは楽しくなることでしょう。その第一歩として、意識して教員と接する機会をつくってみましょう。

- ➡ 知っている教員に会ったらあいさつする
- ➡ オフィスアワーを利用して教員の研究室を訪問する
- ➡ 授業中はできるだけ前の方に座る
- ➡ 授業に関する質問や意見など、授業時間内もしくは授業直後に教員に伝える
- ➡ 教員の書いた本や論文を読んで教員の考え方を知る
- ➡ 授業以外のことについても相談できる教員を見つける
- ➡ 学生が主催する勉強会やイベントに教員を招待する

提 案 2

他の学生と協力して学習する

クラスメイトと積極的に交流することは、はじめは勇気のいることかもしれません。しかし、一度交流が進めば、授業に参加することが楽しくなるでしょう。さらに、それぞれの学習方法や考え方の違いを知り互いに補い合うことを通じて、授業内容をより深く理解できるでしょう。もしかしたら、大学時代のかげがえのない友人に出会えるかもしれません。

- 他の学生の名前や顔を覚える
- 授業中にグループ学習の機会が与えられたときは、積極的に取り組む
- 自主的に他の学生とグループを作って課題に取り組む
- 他の学生が優れた意見や成果を出したときは賞賛する
- メーリングリストや電子掲示板で建設的な意見を述べる
- 他の学生から授業でわからない点について聞かれたら、教えたり一緒に考える
- 他の学生と定期的な勉強会を企画する

提 案 3

主体的に学習を進める

漠然と講義を聴くような受け身の学習では高い学習効果を期待することはできません。大学では、主体的に学習する姿勢を身につけることが特に求められています。教員からの指示がなくても、授業に積極的に参加したり、関連する学習を自ら進んで行うことができるようになります。そうすると、大学での学びをより楽しく、また有意義に感じるようになるでしょう。

- ➡ 十分な予習をして授業にのぞむ
- ➡ 授業中に積極的に発言・質問する
- ➡ 大学の授業に適したノートの取り方を身につける
- ➡ 教員の考え、他の学生の考え、教科書の考えなどを批判的に検討する
- ➡ 授業に関連する文献や研究会などを探す
- ➡ 授業をよりよくするための提案やアイデアを教員に伝える
- ➡ 学習内容に関連する研究会やインターンシップなどに参加する



提 案 4

学習の進み具合をふりかえる

自分が学習目標にどこまで近づいているのかを確認することは、その後の学習を進める上で貴重な情報です。学習活動をふりかえるときに大事なことの一つは、それを学習した直後に行うということです。もう一つは、ふりかえた結果に基づいて自分の理解度を把握し、十分に身につけていない部分をきちんと学習し直すことです。

- ➡ 授業の内容が理解できないときは教員に伝える
- ➡ 課題や小テストにはすべて取り組む
- ➡ 課題の提出前には入念に推敲や見直しを行う
- ➡ 授業で学んだことをまとめるノートを作成する
- ➡ 教員から試験・レポート・課題のコメントが返された時に、良かった点と悪かった点をふりかえる
- ➡ 試験でできなかった問題の解答を試験直後に確認する
- ➡ 提出したレポートの控えをとっておき、いつでもふりかえられるように整理しておく



提 案 5

学習に要する時間を大切にする

高校から大学に進学すると学習方法や生活が変わり、どのように学習時間をやりくりするのかにとまどう学生は少なくありません。時間を有効に活用することは、学習成果を左右する重要な要素です。学習時間の管理方法を身につけることによって、学習以外の大学生生活も有意義に過ごすことができるでしょう。

- ➡ 授業で出された課題には、できるだけ早く取り組む
- ➡ 授業には遅刻をせず毎回出席する
- ➡ 試験シーズンでないときでも、日常的な予習・復習を行うための時間を設ける
- ➡ 授業についていけないかどうか不安になった時は、早めに教員に相談する
- ➡ 大きな課題に取り組むときには、いくつかの段階を設定し、いつまでにどこまで仕上げるかを計画する
- ➡ 授業で発表をする前に自分でリハーサルする
- ➡ 私語や発表の直前キャンセルなどによって、他の学生の学習時間を奪わない

提 案 6

意欲的な目標に挑戦する

意欲的な目標を持った学生や努力する学生にとって、大学は恵まれた環境であると言えるでしょう。大学にはさまざまな分野の専門家がいてだけでなく、学内の施設に充実した学習資源があります。このような人的・物的資源を有効活用してみましょう。高い学習意欲を見せれば、教員や大学組織はさまざまな形であなたの学習を支援してくれるでしょう。

- ➡ 自分なりの意欲的な学習目標を立てる
- ➡ 受講した授業では最善を尽くす
- ➡ 授業に関連した学術雑誌を読む
- ➡ 教員が紹介した発展的内容の文献・課題に挑戦する
- ➡ 大学院の授業を見学したいと教員に伝える
- ➡ 成績優秀者に対する奨学金やコンテストなどに応募する
- ➡ 授業に関連した研究会や学会に参加する





提 案 7

異なる考え方や背景を尊重する

さまざまな学習スタイルや属性を持った学生がいることが、大学の活力を生み出しています。自分と考え方や背景などの異なる学生に対して偏見をもつことなく、そうした多様性を尊重していくことが重要です。いろいろな学生と積極的に交流することは、さまざまな意見や価値観を知ることになり、あなたの視野を広げる機会になります。

- ➡ 友人の学習姿勢・態度の中から優れた部分を自分に取り入れる
- ➡ 自分と異なる意見について偏見なく考慮する
- ➡ 自分の意見が少数意見であっても積極的に発言する
- ➡ 授業でグループを作るときは、自分と異なる意見をもった学生と積極的に組むようにする
- ➡ 人種差別、性差別、攻撃的な言動・態度に気づいたときは指摘する
- ➡ 障害を持った者や社会的弱者に対する配慮をする
- ➡ 異なる文化や価値観を理解するための授業や研究会などに参加する

お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイデアや他の分冊(教員編と大学編)の内容を知りたい人のためにホームページを作成しました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

2. この冊子を読んだ感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイデアなどのコメントをぜひお寄せください。

連絡先: staff@cshe.nagoya-u.ac.jp





本冊子作成のために参考にした主な文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部.
- コーンハウザー, A. W. (山口栄一訳) (2002)『大学で勉強する方法』玉川大学出版部.
- 中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.
- 中島英博・中井俊樹(2005)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, pp.71-80.
- 名古屋大学教養教育院(1998-2005)『豊かな教養教育を目指してー共通教育の方針・事例集』各年度版.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色GPシリーズ3号.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『初年次オリエンテーションを支援するスタディ・ティップスの開発と活用に関する事業』平成16年度学生支援特別経費成果報告書.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1992) *Student Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Newport, C. (2005), *How to Win at College: Surprising Secrets for Success from the Country's Top Students*, Broadwaysbooks.

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

戸田山 和久
夏 目 達 也
近 田 政 博
中 井 俊 樹 (プロジェクトチーフ)
鳥 居 朋 子
中 島 英 博
青 山 佳 代

イラスト

プロダクションスコール株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈学生編〉

2005 年 9 月 1 日 第1版

著者 名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
052-789-5696
staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社プリンテック
名古屋市東区徳川一丁目9番 30 号
052-932-5768

© 名古屋大学高等教育研究センター

2005. Printed in Japan

ISBN4-901730-64-9



ISBN4-901730-64-9



テイプス先生からの7つの提案

大学編



名古屋大学高等教育研究センター

ティップス先生からの7つの提案とは

この冊子は、名古屋大学の学生・教員・大学組織がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学の先生方は、すでにさまざまな優れた授業を実践しています。本冊子は、主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

この冊子のねらいは、教育評価の基準を提供することではなく、名古屋大学に埋もれていた優れた教育実践とそのための知恵を明示化し、大学の全構成員が共有するための枠組みを提供することにあります。優れた授業を通して教育効果を高めるためには、学生・教員・大学組織の三者の努力が同じ方向に向かって統合されていく必要があります。授業改善を教員と学生の努力に求めるだけでは限界があります。大学の仕組み、学習環境に関わる全学的・組織的な取り組みが不可欠です。

たとえば、オフィスアワーを例にとってみましょう。最近多くの大学では、オフィスアワーが導入されていますが、必ずしも学生の利用が期待どおりには進んでいないと言われています。オフィスアワーを通じた教育が、より充実したものになるためには、教員は単にシラバスにオフィスアワーの時間帯を示すだけでなく、授業のなかで「気軽に研究室に來なさい」と伝えたり、研究室のドアを開放して歓迎の意思表示を行うことが必要でしょう。さらに学生自身も、授業でわからないことをそのままにしないで、教員の研究室に足を運ぶといった能動的な学習態度を身につける必要があります。しかし、こうした教員や学生の取り組みを支えるためには、オフィスアワーの制度化を進める一方、気軽に話せるラウンジなどの施設を整備することなど、大学組織による取り組みが必要です。

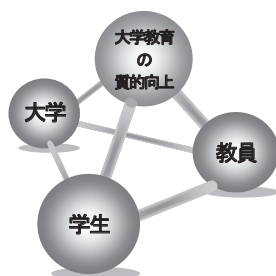


図 大学教育の質的向上を支える学生・教員・大学組織

以上のような考えに基づいて開発したため、『ティップス先生からの7つの提案』は教員向け、学生向け、大学組織向けの三分冊からなっています。それぞれ教員、学生、大学組織がよりよい授業・教育を実現するために役に立つ提案を7つの短い文章にまとめ、それぞれの提案のもとにすぐにでも実行可能なアイデアを7つずつ配置しました。それぞれの分冊は、他の2つの分冊と内容的に関連づけられており、教員、学生、大学組織の三者の視点から同じ目標へのアプローチが示されています。

本冊子を制作するヒントになったのは、米国高等教育学会で開発された『優れた授業実践のための7つの原則』でした。この原則を参考にしながら、日本の大学での活用をめざし、名古屋大学が蓄積してきた事例、独自の調査、教授・学習理論研究の成果を用いた結果、オリジナリティの高いものが作成できたと自負しています。また、『ティップス先生からの7つの提案』という名称をつけた理由は、高等教育研究センターにおいてすでに開発された授業の秘訣集である『成長するティップス先生』と本冊子が相互に補完的關係にあるためです。

すでに述べましたように、この冊子は評価基準を提供することを意図したものではありませんし、また、アイデアの中にはすでに名古屋大学において

実行されているものも多数含まれています。ですから本冊子はむしろ、大学にとって最も重要な活動である授業を充実させ、よりよい大学をつくっていくために、考えるべき点を整理したものとお考えいただければと思います。この冊子が議論のきっかけとなり、名古屋大学の教育の質的向上に資することになれば幸いです。





提 案 1

学生と教員が接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるときよりも、一人の個人として見なされるときの方が、学生は授業に対する帰属意識や責任感を持つものです。授業への参加度を高めるためにも、学生と教員が接する機会を大切にしましょう。大学組織としても、そのような機会が増えるような制度や環境を整えるなどの仕組みづくりを心がけましょう。

- ➡ 学内に学生と教員が話をすることのできるラウンジ等の施設が整備されている
- ➡ シラバスでオフィスアワーを設定するよう教員に求めている
- ➡ 学生・教員・職員が参加するレクリエーションなどのイベントの機会がある
- ➡ 教員の専門領域、研究内容、担当授業などを一覧できる資料が整備されている
- ➡ 教員の書いた本が図書館などにまとめて展示されている
- ➡ 学長、理事、学部長などが学生の意見を聞く機会をもっている
- ➡ 学生に対する指導に熱心な教員を高く評価している

提 案 2

学生間で協力して学習させる

学生は仲間と協力関係をもって学習にとりくむことで、授業に積極的に参加することになります。また、それぞれの学習方法や考え方の違いを認め互いに補い合うことで、授業内容をより深く理解することが期待できます。教室の内外で学生が他の学生と学習活動を容易に行えるような環境を整備することによって、協力して学びやすい雰囲気をつくりましょう。

- グループ学習の可能な施設が整備されている
- 学期中は図書館や食堂などが週末・夜間も開いている
- 机や椅子が可動式になっている教室が多く用意されている
- 学生が他の学生のアドバイザーとして活躍できる制度がある
- 学生が自由に利用できるメーリングリストと電子掲示板がある
- 学生が夜間安全に過ごせるように街灯が整備されたり、警備員が配置されている
- 学生の自主的な勉強会に対して、成果を発表する機会を提供している





提 案 3

学生を主体的に学習させる

大学教育においては、主体的に学習する姿勢を学生に身につけさせることが重要です。受け身の学習では高い学習効果を期待することはできません。残念ながら、大学には主体的な学習に慣れていない学生もいますし、主体的学習を促す教授法に慣れていない教員もいます。大学組織は、そのような学生や教員を支援することを期待されています。

- ➡ 学生に主体的に学習させることの重要性が大学の教育目標の中で示されている
- ➡ 学生の主体的な学習を促進するような教授法を教員が身につけるための研修を行っている
- ➡ 文献の探し方、文献の読み方、ノートを取り方、レポート・論文の書き方などのセミナーを開催している
- ➡ 授業時間外の学習を促進するようなシラバスづくりを教員に奨励している
- ➡ 学生が利用できるコンピュータが十分に用意されている
- ➡ 学生を対象に授業をよりよくするための提案やアイデアを集めるアンケートを実施している
- ➡ 研究会やインターンシップなどへの学生の参加を促進している

提 案 4

学習の進み具合をふりかえらせる

学生にとって、どこまで学習目標に到達しているのかを確認することは、その後の学習を進める上で貴重な情報です。また同時に、教員にとっても授業の進め方をチェックするよい機会となります。大学組織は、多様な方法で学習の進み具合をふりかえる機会を与え、その結果をフィードバックする仕組みをつくりましょう。

- ➡ 学生が学習履歴をふりかえるための情報が充実している
- ➡ 成績不振の学生に対する学習支援やカウンセリングを行う部署がある
- ➡ 習熟度別のクラス編成を行っている
- ➡ 複数回の試験や課題の結果に基づいて成績評価を行うことを教員に奨励している
- ➡ 試験やレポートの採点結果を学生に返却するよう教員に求めている
- ➡ 学生による授業アンケートが簡単に行える用紙が用意されている
- ➡ 個別の学生へのフィードバックを重視する授業にはTAが配置されている

提 案 5

学習に要する時間を大切にする

授業時間外の学習の大切さは広く理解されてきたようですが、どのように学習時間をやりくりしたらよいかにとまどう学生も少なくありません。時間を有効に活用することは、学生の学習成果を左右する重要な要素です。大学組織は、学習時間の管理方法を入学後早い段階で学生に身につけさせることが求められています。

- ➡ 学習に要する時間を考慮してカリキュラムが設計されている
- ➡ タイムマネジメントに関する学生向けセミナーが開催されている
- ➡ 出席を確認したい教員向けに出席カードなどが用意されている
- ➡ 学期内に履修登録できる単位の上限数が決められている
- ➡ 長期欠席をしている学生を事務室で把握している
- ➡ 授業時間外の学習量について教員間で議論する場が設けられている
- ➡ 学生が集中して授業に参加できる教室環境を整備している



提 案 6

学生に高い期待を寄せる

学生は、教員や周りの期待に対して敏感に反応するものです。学生は期待されていないとわかったら、学ぶ意欲を衰退させ、結果として学習効果は低下するでしょう。大学生活のさまざまな場面で学生に対して期待していることを伝えたり、学生の意欲に応えるような仕組みをつくることで、学生の学ぶ意欲を刺激してみましょう。

- 教育目標の中に、学生に対する高い期待が示されている
- 学習やキャリア形成などに関して、学生が相談できる組織がある
- 留学やインターンシップなどを希望する学生を支援する組織がある
- 意欲のある学生を対象にした学習・研究費助成を行っている
- 学部学生が大学院の授業を見学・参加することができる
- 成績優秀者に対して総長表彰、奨学金支給、飛び入学などの機会を与えている
- 教員の研究内容について学生が容易に知ることができるようになっている



提 案 7

学生の多様性を尊重する

大学はさまざまな学習スタイルや属性を持った学生を受け入れることで活力を生み出しています。大学は、そうした多様性を尊重するとともに、学生のみならず構成員全員にそのことを伝える必要があります。学生の多様性は授業を阻害する要因と見なすのではなく、学生の視野を広げ教育効果を高める一手段としてとらえてみましょう。

- ➡ 大学の目標・計画の中に多様性の尊重へ向けた取り組みが掲げられている
- ➡ 執行部・教員・職員・学生向けに多様性を理解するセミナーが実施されている
- ➡ 大学にふさわしい多様な学生を確保する入試のあり方について検討している
- ➡ 未履修科目がある学生向けに補習授業を開設している
- ➡ 成績評価において、教員が多様な方法で複数回評価することを奨励している
- ➡ 障害を持った学生や社会的弱者の学生に対する学習支援を行っている
- ➡ 日本語以外の言語で行われている授業がある

お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイデアや他の分冊の内容(学生編と教員編)をお知りになりたい方のためにホームページを作成しました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

2. この冊子をお読みにになった感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイデアなどのコメントをぜひお寄せください。また本冊子をご入用の方もご一報ください。

連絡先: メールの場合は、staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

学内便の場合は、高等教育研究センター宛





本冊子作成のために参考にした主な文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹(2001)『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部.
- デイビス, B. G. (香取草之助訳)(2002)『授業の道具箱』東海大学出版会.
- 中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.
- 中島英博・中井俊樹(2005)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第2号, pp.71-80.
- 名古屋大学教養教育院(1998-2005)『豊かな教養教育を目指してー共通教育の方針・事例集』各年度版.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『実践的大学教授法の開発を目指してー「成長するティップス先生」の記録 2004.08-2005.03』特色GPシリーズ1号.
- 名古屋大学高等教育研究センター(2005)『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色GPシリーズ3号.
- 夏目達也編(2005)『学生・教師の満足度を高めるためのFD組織化の方法論に関する調査研究』平成 16・17 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))中間報告書.
- ポイヤー, E. L. (有本章訳)(1996)『大学教授職の使命』玉川大学出版部.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barsi, L. (1989) *Institutional Inventory*, the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Gamson, Z. (1991)"A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education," *New Directions for Teaching and Learning*, No47, pp.5-12.

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

戸田山 和久
夏 目 達 也
近 田 政 博
中 井 俊 樹 (プロジェクトチーフ)
鳥 居 朋 子
中 島 英 博
青 山 佳 代

イラスト

プロダクションスコール株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈大学編〉

2005 年 9 月 1 日 第1版

著者 名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
052-789-5696
staff@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷 株式会社プリンテック
名古屋市東区徳川一丁目9番 30 号
052-932-5768

© 名古屋大学高等教育研究センター

2005. Printed in Japan

ISBN4-901730-65-7



ISBN4-901730-65-7



資料1 名古屋大学教養教育の授業実践事例の分類

中井俊樹 中島英博 東良介

名古屋大学では、教養教育の授業の実践事例集として報告書をまとめている。ここでは、過去の事例集から名古屋大学の授業実践を抽出し、「優れた授業実践のための7つの原則」の原則にそって分類した。対象とした事例は、平成9年度、10年度、11年度、15年度、16年度の名古屋大学の教養教育の授業事例集の報告書に含まれているものである¹。

分類の基準は、筆者らの判断によるものである。一つの実践事例が複数の原則にあてはまると判断した場合には、すべての対応する原則に入れた。また、7つの原則にあてはまらない実践事例は、その他のカテゴリーに入れた。

1. 学生と教員のコンタクトを促す

- ・ 「私の研究室に遊びに来なさい」と誘って、時間外に大学院生の実験を観察する機会を持たせてやれた。少数の受講者の眼は確かに輝いていた(基礎セミナー部会、平成12年度事例集、95頁)。
- ・ 授業外で研究室に相談に来るように学生に促したので、学生のテーマに対するモチベーションがさらに高まった。またそれにより、学生とのコミュニケーションがさらに充実し、学生と教官との関係も密になったように思う(基礎セミナー部会、平成16年度事例集、131頁)。
- ・ 自己紹介や授業ガイダンスをとおして意見交換に対する心理的バリアを除去することに努めた(基礎セミナー部会、平成17年度事例集、21頁)。
- ・ 最近の原著論文を各受講者に割り当て、最後の数時間枠に論文紹介させた。努力で読解しようと悪戦苦闘する受講者もいたが、「いつでも質問に來い」と促したところ約70%が来た(基礎セミナー部会、平成12年度事例集、95頁)。
- ・ 研究室にあればコンピュータを使い、助言を受けられることを保証したので、接触が増えた(基礎セミナー部会、平成16年度事例集、20-21頁)。
- ・ スピーチのアウトライン作成には、個別指導を行うためにオフィスアワーを設けた(基礎セミナー部会、平成16年度事例集、183頁)。
- ・ オフィスアワーを設けた(理系基礎科目、平成16年度事例集、251頁)。
- ・ 最後の講義日を質問日にしたら、意外に多くの学生が質問および将来の進路相談に來た(平成11年度事例集、167-168頁)。
- ・ 最後の講義日を質問日にしたら、意外に多くの学生が質問および将来の進路相談に來た(生物学小部会、平成10年度事例集、67-68頁)。
- ・ 一年生にとって研究室を訪問し直に研究者の話が聞けたのはよい経験になったようです。最大の「教育効果」だと思います(基礎セミナー部会、平成12年度事例集、83頁)。

¹名古屋大学四年一貫教育計画委員会『豊かな教養教育を目指してー共通教育の方針・事例集』1998、1999、2000、および名古屋大学教養教育院『豊かな教養教育を目指してー全学教育事例集』2004、2005。

- ・ 双方向授業を目指すために、講義の中で説明と実習を交互に行った(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、303 頁)。
- ・ 発音練習は個別に指導し、TA にも回ってもらう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・ 出席カードに授業の感想を書いてもらって学生の関心を把握しようとした(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、247 頁)。
- ・ 出席表に質問や意見を書かせ、次の講義でそれに答えると学生の理解が深まる。教官の反省材料にもなる。双方向性が実現できる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ 出席表に質問や意見を書かせ、次の講義でそれに答えると学生の理解も深まる。また、教官の反省材料にもなり、いわゆる双方向性が実現できる(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145－146 頁)。
- ・ 講義の要約、感想を書かせると学生とのコミュニケーション、次回の講義の参考のために大いにプラスになる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ 講義の終わりに質問用紙とそれに対する返答をすることで教師と学生間のコミュニケーションを図るよう努めた(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、310 頁)。
- ・ 出席表に質問や意見を書かせる(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ テストの余白に書かれた質問に答えた点では、わずかながら「双方向的」になったかもしれない(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、335 頁)。
- ・ 毎時間 10 分位で 1 回分の講義の要約、感想を書かせると学生とのコミュニケーション、次回の講義の参考のために大いにプラスになる(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145－146 頁)。
- ・ 数少ない機会であったが、私の研究内容を話したことがあった。これは好評であったと思う(物理学小部会、平成 10 年度事例集、57 頁)。
- ・ 私や TA の研究の内容や研究している中でのエピソードを話し、大学での研究というのはどんなものかに興味を持ってもらうようなことを行いました(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、96 頁)。
- ・ 興味をひくために、有機反応の将来の展望、現在のトピックス的な話もしている(化学小部会、平成 12 年度事例集、143 頁)。
- ・ 随所に、教官側から興味のもてそうな話題を提供した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、65 頁)。
- ・ 授業中に学生の意見を求める(地球科学小部会、平成 12 年度事例集、150 頁)。
- ・ それぞれのテーマに関して基礎となることを授業中に質問し、受講生の反応を確かめながら、授業を進めている。これは教員と学生間のコミュニケーションはとれたと考えている(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、329 頁)。
- ・ セミナーを研究室でやった。教官とは異なり学生はくつろいでいた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、28－29 頁)。
- ・ 大机を囲んで談話会形式とし、気楽に自由に発言できるようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、28－29 頁)。
- ・ 個別指導が不可欠(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。

- ・ 個人の参考書の貸し出し(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
- ・ 学生から申し出のあった図書館資料などの閲覧に便宜を図ってやる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 書籍を学生に貸し与えた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 発言の少ない学生に水を向ける(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ 授業参加、小テストの返却の際に学生の名前を中国読みで呼ばせる(平成 12 年度事例集、203 頁)。
- ・ オペラ鑑賞会を通して、自由に意見を交換する雰囲気も作ることができて、授業における討論等も活発に行われるようになり、学生のモチベーションが高まった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、34 頁)。
- ・ 討論を誘発するために、担当者はわざと弱点を見せた発言を行った。ある意味では道化師役を演じる必要もある。それはすなわち担当者が学生と等しい視点に立つことであり、実際にはきわめて努力を要することである(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、17-18 頁)。
- ・ 学生の討論を促進するために、学生の名前と興味を早く理解し、その場に応じて指名して意見を言わせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、176 頁)。
- ・ 討論の時間を設けたことによって、教官と学生相互との意見交換ができた(文系教養科目部会、平成 16 年度事例集、295 頁)。
- ・ 講義中の学生への質問・応答時間の設定(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、333 頁)。
- ・ 顔を覚えて声をかける(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ 大変であるが初めは学生を個々に指導するよう心がけるようにする。そうすることにより、学生との対話が生まれ学生に信頼されるようになる。学生の質問には時間をかけて答えることが必要(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167-168 頁)。
- ・ 学生を個々に指導するよう心がける(生物学小部会、平成 12 年度事例集、147-148 頁)。
- ・ 学生を個々に指導するよう心がける。学生の疑問には時間をかけて答えてやる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60-70 頁)。
- ・ 学生の疑問には時間をかけて答えることが必要(生物学小部会、平成 12 年度事例集、147-148 頁)。
- ・ 学生には最初きびしく接する。その後しっかりケアすれば時間外でも質問、相談にくるようになる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 学生には最初きびしく接する。その後しっかりケアすれば時間外でも質問、相談にくるようになる(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167-168 頁)。
- ・ 学生とのディスカッションを密にした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。
- ・ 絶えず質疑応答を繰り返す(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 絶えず質疑応答を繰り返すと学生とのコミュニケーションがとれる(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167-168 頁)。
- ・ 全体に PowerPoint で資料を提示し、提示した資料は教官所属の研究室のサーバーにファイルの形でアップした(特に HP は開設せず)。あくまで、板書は追加的な内容表示にのみ用いた。基本的には教科書、及び、指定参考書から取り出した図を中心にし、そ

れに必要な書き込みを加えたものを提示資料としたが、必要に応じて他の教科書からも図版を取り入れた。こうした点、著作権の問題に配慮し、ファイルは直接 <http> を打ち込んでダウンロードすることにした(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、65 頁)。

- ・ 教官は、Mailing List に提出された宿題のすべてに関して、授業前までに何らかのコメントを付して、同じ Mailing List に送った(言語文化部会、平成 16 年度事例集、202 頁)。
- ・ メール全体で連絡が取れるようにしておき、授業以外のときにも質問できる体制を取った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、149 頁)。
- ・ 電子メールによる作業指示と提出を通じて、電子メールの扱いに慣れる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、26 頁)。
- ・ 学生へのメールによる連絡、共通メールグループの設定(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20-21 頁)。
- ・ 電子メールで学生とのやり取りをするように心がけ、研究展開を補助する(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 授業開始時に「授業方針と受講者への要望」と題する紙を配り、そのなかでメールやファックスによる質問を奨励した(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、241 頁)。
- ・ 授業直後に質問時間を取り、更にオフィスアワーを授業担当者と TA にそれぞれ設けた(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、264 頁)。
- ・ 講義終了後しばらく教室に残って学生の質問に答えてやるのがよい(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145-146 頁)。
- ・ 講義終了後しばらく教室に残って学生の質問に答えてやるのがよい(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167-168 頁)。
- ・ 講義終了後しばらく教室に残って学生の質問に答えてやるのがよい(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 学生と教官、学生同士の融和が最も大切で、本セミナーでは最終回の授業の後にコンパを行ったが、授業開始時、出来れば 2 回目の授業の後でコンパをやるのが、その後の授業をスムーズにさせるであろう(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
- ・ 学生の討論を活発にするためには、学生間の警戒心を解き融和させることが肝要で、このためのコンパは有意義で、早い時期に行うとよく、TA の他にも先輩学生が参加するとより融和がスムーズにいく(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、80 頁)。
- ・ 課外活動として、一度、親睦会を催した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・ 個人的に医療について質問のある人に対して、講師のメールアドレスを公開した(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、310 頁)。
- ・ 教師は権威的な態度はとるべきではない(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161-162 頁)。
- ・ TA のオフィスアワーを設けて一般的質問にも応ずるように設定した(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、187 頁)。
- ・ 教師も TA もともに学生の立場に身を置き、積極的に討論に参加し、対話することで、立体的でダイナミックな授業を展開させることができた(基礎セミナー部会)。
- ・ TA に対しては発音指導をさせるようにしている(言語文化科目部会、平成 12 年度事例

集、199－201 頁)。

- ・ TA を活用することによって、実際には雑談が多かったようであるが、学生と教官の間でコミュニケーションを円滑に行えるような雰囲気が作れた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、36 頁)。
- ・ 授業中の作文過程における個別指導の補助(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・ 採点中は TA に、教室を回ってもらい、個別の学生の質問に答えてもらう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・ TA に自己紹介させた(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、184 頁)。
- ・ TA のメールアドレスを通知(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、187 頁)。

2. 学生間で協力する機会を増やす

- ・ 3 人 1 組のグループを作った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、34 頁)。
- ・ グループの発表では、担当グループのメンバーは 1 人 10 分以上の発表をし、発表担当になっていないグループの人は 1 人 1 回以上質問をする、という制約をつけました(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、15 頁)。
- ・ 各自が前半の発表でまとめた内容を 2 グループに分けて、グループごとに異なる部屋で討論を行わせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、131 頁)。
- ・ 2 人 1 組で他人紹介し集団に慣れる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、26 頁)。
- ・ テーマ毎にグループをつくり、調査・発表させた。テーマは学生に選べせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 12 名で討論するより、少人数のほうが意見を述べやすいので、2 グループに分かれて討論を行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、24－25 頁)。
- ・ プレゼンテーションは 3 名ずつ 4 組に分けて、コンピュータと液晶プロジェクトで行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、135 頁)。
- ・ 基本的にグループごとの発表とした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、157 頁)。
- ・ 各自調べてきたことをグループ毎で討議した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・ グループワークにしたため、学生同士のコミュニケーションは講義だけの授業より多かった(言語文化部会、平成 16 年度事例集、185 頁)。
- ・ 学生全員が十分に参加して相互に学習できるように、課題を明確に提示して、各自およびグループの発表の機会を多く計画した (基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、130 頁)。
- ・ 講義の中で各自プレゼンをさせようと試みたが、空気が重くなるきらいがあった。そこで、幾つかのグループに分け、まずはグループ討論をさせて代表者が発言して後の者は彼を支援する、という方針に変更したところ、非常に活発な討論が実現できた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、92－93 頁)。
- ・ 学生と教官が親密になるために、自己紹介と何をこのセミナーで行っていくかの方向性を与えた。興味の対象が近い学生でグループを作り、サブテーマはグループごとに

主体的に考えて決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、36-37 頁)。

- ・ 学生のモチベーションを高めるために、次の発表へむけての「お題」を教官が設定し、それに向けて授業時間外でグループごとに集まって準備を行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、157 頁)。
- ・ グループでの共同作業をさせることは、学生間の交流を深め、お互いにサブテーマの分担をすることで責任を持たせることができた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、36-37 頁)。
- ・ 学生と教官、学生同士の融和が最も大切で、本セミナーでは最終回の授業の後にコンパを行ったが、授業開始時、出来れば 2 回目の授業の後でコンパをやることが、その後の授業をスムーズにさせるであろう(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
- ・ 学生の討論を活発にするためには、学生間の警戒心を解き融和させることが肝要で、このためのコンパは有意義で、早い時期に行うとよく、TA の他にも先輩学生が参加するとより融和がスムーズにいく(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、80 頁)。
- ・ 課外活動として、一度、飲み会を催した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・ 内容を OHP に図式化および言語化させて、それをもとに全体でグループ発表および討論を再度行わせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、131 頁)。
- ・ 学生同士をなごませるために、最初にレジメを使って自己紹介をさせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、72 頁)。
- ・ 学生がお互いの生を知り合うことがセミナーの中では大事なので、写真つきの名簿を作成したり、自分の前の机に置く名札を準備した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、24-25 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高めるために、受講生同士が名前を覚え、親近感を持てるようにするため、名札を用意して、第一回より最後まで、セミナー中胸につけさせた(基礎セミナー部会、160 頁)。
- ・ 学生同士の間で競争させることによって討論を活発にすることが考えられる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、79 頁)。
- ・ 同質の学生の集まりになると、不活発になる可能性が高く、できるだけ異質の学生が集まるようにグループ分けを考慮している(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、72 頁)。
- ・ 受講生を貧困、食糧、温暖化を研究する 3 つのグループに分けた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・ レジメは発表毎に毎回作成し、報告書は班毎に作成させ、班員毎の分担分を明確化させるとともに感想等を別途付けさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。
- ・ レジメの作り方などは上級生がコンピュータの操作方法を含めて実践的に指導してくれた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、157 頁)。
- ・ レジメをレポートでまとめさせるとともに、パワーポイントを用いた発表を行った。今回は司会を教官と TA で行い、学生間でも発表に意見交換できる雰囲気を作った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。

- ・ 中間発表および最終発表では全員に意見を述べさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、36－37 頁)。
- ・ 学生発表に応じて全員参加の形で学生に意見を求め、自由討論を心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高めるためには、学生間の議論と、教官、TA の適切な助言により、それぞれのテーマを勉強した観点からコメントや質問をして、よい議論をした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、41 頁)。
- ・ 学生の討論を促進するために、教師よりも他の学生や TA に意見を求めることによって、意見の応酬をねらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、171－172 頁)。
- ・ 学生はディベートの優劣について判定を行い、その他の点についてもフィードバックを返す、という手法をとりました。また、担当者以外の学生の積極的な参加を促すために、この他に、ディベートの内容に基づいて自分の意見をまとめるというレポート数回提出させました(全学教養科目部会、平成 17 年度事例集、81 頁)。
- ・ 授業では専門的な内容の誤りなどあまり指摘せず、学生間の議論を中心にした。話す楽しさと難しさ、聞くときに性格に理解することの重要さとまたその難しさを多く経験してもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、98 頁)。
- ・ 司会、記録係、レポーターを順番に全員が担当するように、名簿とともに表を作成した(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、16 頁)。
- ・ 司会は討論をリードするよう要請し、記録係りは発言の要旨をメモし、次回にはコピーして全員に配布させた(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、16 頁)。
- ・ 学生自身に司会を委ねた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、77 頁)。
- ・ 学生に司会を順番に担当させる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20－21 頁)。
- ・ 毎回、2 名ずつセミナー司会係をおき、なるべく学生だけでセミナーを進行させ、自主性を高めつつ、発言をしやすくする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ ゼミ報告については、報告者に司会と進行役の機会を与えることとし、最初に TA のモデル報告を行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、18－19 頁)。
- ・ TA をディスカッションリーダーとして活用する(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 本授業に関心のある学生に来てもらって議論に参加してもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度、149 頁)。

3. 能動的に学習させる手法を使う

- ・ 学生自身に司会を委ねた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、77 頁)。
- ・ 学生に司会を順番に担当させる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20－21 頁)。
- ・ 毎回、2 名ずつセミナー司会係をおき、なるべく学生だけでセミナーを進行させ、自主性を高めつつ、発言をしやすくする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 司会、記録係、レポーターを順番に全員が担当するように、名簿とともに表を作成した(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、16 頁)。
- ・ 司会は討論をリードするよう要請し、記録係りは発言の要旨をメモし、次回にはコピ

- 一して全員に配布させた(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、16 頁)。
- ・ 司会は、前の週の発表者が行うことにして、かならず 1 つは質問をすることとした。また、TA にも何度か入ってもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、72 頁)。
 - ・ 司会も時計係も学生がやる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
 - ・ 学生の討論を促進するために、受講生に司会をさせた。期待以上にいつも討論が弾み、時間が短いくらいであった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
 - ・ 討論の進行は司会の学生の DUTY とする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
 - ・ 司会は、学生自身にさせ、教官や TA はコメントをする側に回った。最初のうちは発言する人が偏る傾向があったが、ある程度指導することにより、途中から全員が発言するようになった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、89 頁)。
 - ・ 学生自身にセミナーの進行をまかせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
 - ・ 授業では専門的な内容の誤りなどあまり指摘せず、学生間の議論を中心にした。話す楽しさと難しさ、聞くときに性格に理解することの重要さとまたその難しさを多く経験してもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、98 頁)。
 - ・ 学生に発表させるときには、質疑応答の時間をなるべく多くとるようにし、教師からも多く質問して、他の学生からの質問が出やすい雰囲気を作ろうとした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、149 頁)。
 - ・ 意図的に問題点を大きくし、意見を出しやすくした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、176 頁)。
 - ・ 学生はディベートの優劣について判定を行い、その他の点についてもフィードバックを返す、という手法をとりました。また、担当者以外の学生の積極的な参加を促すために、この他に、ディベートの内容に基づいて自分の意見をまとめるというレポート数回提出させました(全学教養科目部会、平成 17 年度事例集、81 頁)。
 - ・ 討論を始めるには「種火」が必要になる。具体的には、学生を順次指名して強制的に第一声を発言させたり、担当者が議論を呼びそうな話題を提供したりした。一度火がつけば、あとは比較的活発に討論が進むようになった(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、17-18 頁)。
 - ・ 授業のなかで生じた問題についても積極的に学生へ投げかけ、議論できる雰囲気作りに心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、133 頁)。
 - ・ 自由討論で活発な議論はなかったものの、意外なことに、黙って他人の話を聞くことによって、テキストに対する自分の考え方を修正・変化させ、理解を一層深める、という効果があった(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、16 頁)。
 - ・ 教官から話題やきっかけを提供し、議論を展開させていくような話し合いを数回にわたって行った(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、36 頁)。
 - ・ 討論では自由な質疑応答形式をとった。できる限り学生が自主的に討論ができるように、私(担当者)も TA も発言を控えるようにした。しかし、沈黙が続いたり、明らかな誤りやごまかしがあった場合、あるいは議論の幅が狭くなりすぎた場合は介入した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、25 頁)。
 - ・ 教官は、全体の企画と運営、議論の内容に対する専門性を生かした立場からの意見表

明などに関与し、学生による運営を能動的に見守ることが役割の大きな部分を占めることになる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、95 頁)。

- ・ レポーターにたいし、適宜関連した問題を提起して、全体で考えさせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、85 頁)。
- ・ 積極的に発言する学生がいたので、その発言を出発点に論点を広げることができた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、144 頁)。
- ・ 学生の自らの考え行動するという方向に 1 ミリでも進ませるために、教官が前に出るのを自制し、受講生に多くを委ねるという方針を貫いた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、112 頁)。
- ・ レジューメは発表毎に毎回作成し、報告書は班毎に作成させ、班員毎の分担分を明確化させるとともに感想等を別途付けさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。
- ・ 2 回に 1 回くらいの割合で、小レポートを出させ、蓄積したレポートを再構成して肉付けさせることにより最終レポートを完成させるようにしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 毎回約 30 問以上の演習問題を事前に宿題として指定し授業開始時に提出させる。次回に全ての問題を採点・添削して返却し、間違いが多い問題数問を選び授業時間中に解説することを行った(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、66 頁)。
- ・ 毎週、教科書の章末問題から選択して宿題として課し、翌週レポートとして提出してもらい、翌週の講義で、問題の解答を解説しながら復習している(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、65 頁)。
- ・ 講義の終わりに簡単な演習問題を課している。答案は回収し、後日採点して返却する(化学小部会、平成 12 年度事例集、143 頁)。
- ・ 報告者には 2 ないし 3 冊以上の文献を使用して、レポートを作成するよう指導している(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、77 頁)。
- ・ レポートの課題としては、式そのものの誘導を求めるものよりも、式から具体的な数値を求めるものの方が学生にとって物理量の単位を考えたり、あるいは友人の結果と比較しやすくて、教育効果が大きいようだ(化学小部会、平成 11 年度事例集、165 頁)。
- ・ レポートは、選択的に 1 課題にするより、同じような課題の講義 2〜3 をまとめて 1 課題として、全講義にわたり、3〜4 テーマについてレポートを書かせるようにするのがよい(総合科目・開放科目部会、平成 11 年度事例集、193 頁)。
- ・ レポートの形式には、講義で解説した内容の理解を問うもののほかに、講義内容に先行する形で意見などを求めるものも考えられる(地球科学小部会、平成 12 年度事例集、150 頁)。
- ・ レポーターは自分のレポートに責任をもち、質問に答えること。答えられなかった点は自習に調べたことを報告するよう指導した(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、16 頁)。
- ・ 討論を促すために、レポートの提出をさせ(4 回程度)、その発表・質疑を大幅に取り入れてゼミを進める(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
- ・ プレゼンテーションは 3 名ずつ 4 組に分けて、コンピュータと液晶プロジェクタで行

- った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、135 頁)。
- ・ 個人の参考書の貸し出し(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
 - ・ グループの発表では、担当グループのメンバーは 1 人 10 分以上の発表をし、発表担当になっていないグループの人は 1 人 1 回以上質問をする、という制約をつけました(基礎セミナー部会、平成 17 年度事例集、15 頁)。
 - ・ グループ分けをして、テーマを決めさせ、その中から個人の発表テーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
 - ・ 2 グループに分けることで、対抗意識が生じ、よりよいプレゼン、報告書の作成に意欲が沸いた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、121 頁)。
 - ・ 発表に対しては、教官の考えを押し付けるのではなくて、常に幾つかの選択ができるようなコメントを行い、学生自身が今後の方針を考える手助けになるように心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、72 頁)。
 - ・ 学生に毎回かならず 2 回は発言するように努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、147 頁)。
 - ・ 毎回、一度は発言するようにとの指示をしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
 - ・ 評価に反映することを説明し、毎回一回は発言するように求めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。
 - ・ 学生の討論を促進するため、毎時間、最低 1 回の発言を出席の要件とした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、114 頁)。
 - ・ 毎回一回は必ず発言することを原則とした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、8 頁)。
 - ・ ルールとして各回に全員が最低一回は発言することにした。積極的には発言しない学生からも興味深い論点が出されることもあった(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、25 頁)。
 - ・ 自発的な発言がない場合には、司会・進行係りが指名して発言を促してもいいことを伝えた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、70-71 頁)。
 - ・ 討論して自分の考えを客観的にとらえる訓練のために、OHP を使った発表、質疑応答を行った。計画を立案した段階と、最後に成果発表の段階の 2 回行った。その際、発表会の司会などの進行は、すべて学生に任せて、あえていろいろな種類の質問ができるように配慮した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、110 頁)。
 - ・ 内容を OHP に図式化および言語化させて、それをもとに全体でグループ発表および討論を再度行わせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、131 頁)。
 - ・ 発言が少ないため、報告者以外の全員から意見の発表を求めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、135 頁)。
 - ・ 教官は結果等についての説明をあらかじめせず、疑問をなげかけ、学生に考えさせた。学生の小さくても新しい着想などに対しては、なぜそれが素晴らしいかを皆に説明して、その方向への思考の導入を図った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、44 頁)。
 - ・ 講義で使用した資料は、授業後に教官所属の研究室のサーバーにアップし、受講者がダウンロードできるようにした(文系教養科目、平成 16 年度事例集、272 頁)。

- ・ インターネットやデータベースなど情報機器を自由に使わせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 教育機器として、OHP を利用し、研究の中間報告を 3 回に一度くらいさせるようにしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ インターネットの利用を奨めた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 地球環境問題に関連するビデオを見せる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、80 頁)。
- ・ 調査にはインターネットを使わせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、85 頁)。
- ・ 学生自らの足で参考書を探すこと、インターネットを利用することを推進した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、94 頁)。
- ・ インターネットやデータベースなどを自由に使わせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 2 台のスライド・プロジェクターを使用することによって、受講生には 2 つの写真資料を同時提示することができる。こうした方法は、資料の細部を相互に比較考察することが多い授業であるとか、全体と部分の関連などを比較考察することが多い授業において効果的である(基本主題科目部会、平成 10 年度事例集、5 頁)。
- ・ サブテーマとして、各自の課題を自由に設定させた。とくに、インターネットからの情報収集をメインとして、学生にはその課題設定動機から、取りまとめ内容の整理、考察、エピローグ、と一連の作業を与えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。
- ・ 問題を自ら引き寄せて考えるような状況にならなければ、自主的な勉強姿勢は生まれてこないであろう(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、79 頁)。
- ・ できるだけ身近な題材をとりあげるようにしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、72 頁)。
- ・ 興味を引くテーマを与え、宿題を課して考えさせる訓練をしたつもり(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、30－31 頁)。
- ・ 講義では学生が自ら調べる・考える・応用する、などの作業をレポートを通して実現することができる(地球科学小部会、平成 11 年度事例集、172－173 頁)。
- ・ 身近な問題を取り上げる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
- ・ 学生の身近なもの・馴染みやすいものなどから学習の対象を選んで、彼ら自身でテーマを決めて自発的に情報を集めさせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、73 頁)。
- ・ できるだけ自然科学と接点が多く、かつ社会的関心の高いテーマを選ぶようにしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、77 頁)。
- ・ テーマは各人が興味を持っているなるべく身近なものを選ばせるようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、89 頁)。
- ・ 各自にテーマを選ばせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、144 頁)。
- ・ 学生にサブテーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、135 頁)。
- ・ 調査内容を焦点化させるためのサブテーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、133 頁)。
- ・ 受講生ごとに調査テーマを設定させて、自主研究を促進するようにした(基礎セミナー

部会、平成 16 年度事例集、114 頁)。

- ・ テーマを自主的に選ばせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ テーマを自分で決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、85 頁)。
- ・ 学生に自らに研究テーマを決定させたことと教官が発言を控えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、140 頁)。
- ・ 学生の得意な分野、興味のある分野のテーマを選ばせ、自主的な勉学に基づく課題の理解と習得を心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。
- ・ 各自にサブテーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、123 頁)。
- ・ 学生各自が選んだテーマに従って発表・討論を行わせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、94 頁)。
- ・ 学生が調査・発表する「テーマ」を自分自身が最も知りたいと思っているものを選ばせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ 自分たちでテーマを考えさせた。特にネットワークを使った方法を行わせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、93 頁)。
- ・ 大テーマだけを与えて、小テーマや研究方法など殆どすべてを学生たちに決めさせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ サブテーマを学生に選ばせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、165 頁)。
- ・ テーマ毎にグループをつくり、調査・発表させた。テーマは学生に選ばせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 身近な問題を題材にする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 例題をあげるときは出来るだけ身近な事項・事例を用いるとよい(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 例題を挙げるときは、なるべく身近な事項・事例を用いるとよい(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167-168 頁)。
- ・ 学生の自ら考える力を養うために、事例問題を多く用いることにした。紛争の当事者間、あるいは学説の対立する点においては、意見を語ってもらう等のことを行った(文系基礎科目、平成 16 年度事例集、242 頁)。
- ・ 新聞や雑誌などを糸口に、世の中で何が起きているかに注意を向けさせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、79 頁)。
- ・ 受講生各自が興味・関心のある心理学的テーマを設定した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、70-71 頁)。
- ・ 現在話題となっている生殖医療、食糧問題などのテレビ放映された番組の録画を見せ、感想を聞き、その中から学生の調べ発表するテーマを選ばせようとした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
- ・ 新聞記事コピーを初日に配布。身近な問題であることを認識させ、興味をひきつけるため(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ 言語学の場合、自分の意思が通じた喜びを体験できれば、おのずと学習意欲も生まれる(言語文化科目部会、平成 11 年度事例集、213 頁)。
- ・ 一年生にとって研究室を訪問し直に研究者の話が聞けたのはよい経験になったようです。最大の「教育効果」だと思います(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。

- ・ 私が学生一人一人別のテーマを与えました。それについて学生にインターネットなどで調べさせ、また、ダウンロードさせてパワーポイントへ貼り付けることなどをやらせました(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、99 頁)。
- ・ インターネットに興味を持っている最新のエネルギー技術を探らせて、さらに関心を深めさせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 学生の関心にあった図書をみつける手助けをする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 大学生としての自発的・能動的学習態度を修得するための第一歩として、自らの責任において課題を選定し、学習・調査・研究して、発表する。そして、討論・批判などを通じて自己の幅を広げ、学問への認識を深める(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、78 頁)。
- ・ 最も工夫を凝らした部分は、講義の始めに「不思議な実験デモ」を実施したことである。このデモを通じて、目の前で起こる不思議なことを学術的に説明を加えることで「サイエンスへの興味」を最大限まで引き上げることができた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、92－93 頁)。
- ・ 英語学習のモチベーションを高めるために、インターネットを利用した学習に重点を置き、英語のメル友を作らせた(言語文化部会、平成 16 年度事例集、195 頁)。
- ・ 調べる内容は基本的に学生にまかせた。毎回の発表では、調べた内容を話すだけでなく、必ず自分の考えを話すように指導した。また、内容について、不備な点や今後の進め方についてコメントをして、学生が途方にくれないようにすることを心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、72 頁)。
- ・ テーマの決定、調査方法、まとめ方や、自らの意見を含めた考察のしかたについては、完全に学生の自主性と創意工夫に委ねた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、105 頁)。
- ・ 参考書は全体としては指定せず、自由に文献を探してもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、144 頁)。
- ・ 自分で探してきた本についてレポートして良いとしたので積極的に新しい話題を提供する学生もいた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、23 頁)。
- ・ 一人ひとつのテーマとする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ 双方向授業を目指すために、講義の中で説明と実習を交互に行った(理系基礎科目、平成 16 年度事例集、303 頁)。
- ・ 第二回目で図書館の利用方法、文献検索の方法についてガイダンスした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、76 頁)。
- ・ 文献のインターネット検索方法の指導。アンケート調査の実施。アドバイス程度にとどめ、講義による知識の伝達は一切行わなかった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、101－102 頁)。
- ・ 教官は、授業の目的と評価基準を示し、スケジュール管理と支援を行っただけで、あとは学生の自主的行動に任せた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、76 頁)。
- ・ 問題分割は学生の責任とした。文献も求められない限り指定しなかった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。

- ・ 英語学習の楽しさを感じてもらうためにも映画のシナリオを速読練習に入れた(言語文化部会、平成 17 年度事例集、32 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高め、また教える側に心を開いてもらうようにするために、よい意味での遊び心のある授業を目指し、上で述べた寸劇の他に、フランス語の早口言葉を用いた伝言ゲームやフランス語の歌なども積極的に取り入れた(言語文化部会、平成 17 年度事例集、35 頁)。
- ・ 各授業ごとに英文 100 語のまとめと、日本語でも英語でもいい発表に関する感想をメールで出させた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20－21 頁)。
- ・ 放課後や休日などにも研究が行えるように配慮する(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 式の誘導的な設問よりも、工学部の学生には、具体的な数値を求めさせる(たとえば、ジゼルエンジンで断熱圧縮された空気の温度が何度になっているのか、またそのためには計算途中で各物理量の単位をきちんと書くように指導する)のが、学生にとっても講義の理解度を確認したり、講義内容と他の工学部との関連を認識するためにも有用である(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、64 頁)。
- ・ 授業内容に即して所属学部に関連する事項について発問し、本講義の内容と所属学部における専門的事項との連関を理解できるように心がけた(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、298 頁)。
- ・ 学生に自分でもやれそうだと思うことを練習させる(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161－162 頁)。
- ・ 学生のやる気を高めるために、古典を読むということで、まずは「読んで面白い」作品を選んだこと(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、176 頁)。
- ・ インタビューの実習を設定し、これのベンチマークとなるような教科書を読ませた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、171－172 頁)。
- ・ TA による授業に関する情報の整理ページの作成(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・ 発音練習は個別に指導し、TA にも回ってもらう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・ TA をフルに活用し、学生の発言を促すきっかけ作りなどで活躍してもらった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、8 頁)。
- ・ TA、1 名の他にも大学院生の応援を得て、指導、ディスカッション、コミュニケーションがうまく行われた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、121 頁)。
- ・ 授業前に学生に予習してもらいたかったので、毎回次週に行う記事を配り、要約を書いてきてもらった。その要約には必ず教員の添削をつけて学生に翌週に返した(言語文化部会、平成 17 年度事例集、31 頁)。
- ・ 実際に教師宛にメールを出す宿題を与え、そのメール文を使って、どこをどう直せばいいのかなどをディスカッションしながら、指導するようにしている。はじめから答えを与えるのではなく、学習者自身の気づきを重視して、後日一人で書くときに自己修正ができるように留意している(言語文化部会、平成 17 年度事例集、44 頁)。
- ・ 質問を受けて、答えられなかった項目は、調べさせる(基礎セミナー部会、平成 12 年

度事例集、80 頁)。

- ・ 毎回、講義の終了前 10 分程度を利用して、講義内容に関する質問、講義についての要望などを用紙 1 枚に書いて提出させた(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、255 頁)。
- ・ 毎回演習問題を作成、講義の最後の 10－15 分を演習に当て、できれば宿題とした。予習・復習のきっかけになったのではないかと。6 割の学生は競って演習をやっていた(物理学小部会、平成 10 年度事例集、57 頁)。
- ・ 学生の理解を助けるために、演習問題、小テストをやる(数学小部会、平成 11 年度事例集、135 頁)。
- ・ 実験講義では、説明と同時に問題を解かせると有効である。解けないから理解していないことに気づくし、理解する動機になる(化学小部会、平成 11 年度事例集、166 頁)。
- ・ 毎回小テストを実施し、学生の理解度をチェックした。これはある程度学生の緊張感を保つことができる(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ 「聞いているだけ」ではまずほとんど理解できない。そこで、小テストを実施することにした(化学小部会、平成 11 年度事例集、165 頁)。
- ・ 終わりの 10 分くらいを使って小テスト、疑問点について解答させた(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ 学生に自分で考える機会を与えるため、小テストによる演習 30 分の割合で進め、学生に自分で考える機会を与えた(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、270 頁)。
- ・ 毎回 3 人ほどそれぞれのレポートにもとづくディスカッションを試みた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、74 頁)。
- ・ 学生自身に理解度を深めるべく、一回おきに、ティーチング・アシスタントの助けを得、授業終了の 15 分前頃に基本的問題を板書し、次回にレポートの提出を求めた(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、274 頁)。
- ・ 発表後の質疑応答は自らの問題に引きつけ、活発な議論展開になるように意識的に関わった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、133 頁)。
- ・ 学生の調べた内容が必ずしも正しくない、古いなどの際には、これを材料に資料集めの方法論、考え方を議論した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20－21 頁)。
- ・ 指定図書を多様化した分野にすることで何れかに関心を持って読ませるようにした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 毎回図書館のコピーカードを与えて、関連する諸問題について解説し、その諸問題について図書館で調べてレポートを提出するように求めた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、74 頁)。
- ・ 第一期の半年間は、系統立てた板書を、次の半年間は口述内容を学生にノートさせる方式も可能(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ 自分なりのノートを取る技術、論理的な文章を書く技術を習得させるよう方向付ける(生物学小部会、平成 11 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ 自分なりのノートを取る技術、論理的な文章を書く技術を習得させるよう方向付ける(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ 他の人が報告するときにできるだけメモを取らずようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、124 頁)。

- ・ 学生の自主性を尊重しなるべく指名を避けるようにしたが、おおむね活発な討論が行われた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、16 頁)。
- ・ 各自の取り組みの良い点を積極的に誉めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)
- ・ 多くの学生は高校の時に生物実験をやっていないため、生き物に対する基本的事項の理解を欠いている。そこで先ず、生き物に慣れ親しませることが大切で、特に動物を扱う実験の場合は重要である(生物学小部会、平成 12 年度事例集、147－148 頁)。
- ・ フィールドワークを取り入れた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、141 頁)。
- ・ できるだけ具体的体験を通して学ぶ：たとえば自我同一性地位について話す場合、実際に一定の質問に答えさせることを通して自己診断してもらった(文系教養科目部会、平成 16 年度事例集、300 頁)。
- ・ 小テストを兼ねて、パートナーごとに身の回りの小道具を使って、「寸劇」ふうに演じてもらうことで、クラスの雰囲気活性化するように試みた(言語文化部会、平成 16 年度事例集、208 頁)。
- ・ 結晶構造のモデルをピンポン玉で作成し、学生に実際回して説明をした。好評だった(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ 工夫点として、基本的にフィールドワークや簡単な実験など、身体を動かしてデータを取るという心理学の方法をもとに授業を進めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、52 頁)。
- ・ セミナーの内容と関連する超伝導体の磁気浮上やテスターによる抵抗測定を交代で各自体験させた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、85 頁)。
- ・ KJ 法を使用した。1～2 回の討論の後、論点をまとめて、図式化し、全員が共通認識を持つようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、101－102 頁)。
- ・ 博物館の見学にいった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、144 頁)。
- ・ 学生の討論を促進するために、フィールドで体験を共有した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、157 頁)。
- ・ 学内外の専門家にアポをとし、取材するようアドバイスした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、83 頁)。
- ・ KJ 法の手法で論点を整理し、模造紙 2 枚に図解してクラスで示した。このやり方を使うと、クラス全員の意識が鮮明に浮かび上がる。これによってクラス全員が、自分以外の学生たちがどのような問題意識を持っているかを、明確に把握することが出来た(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、86 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高めるために、播種、育苗、田植え、コメの食味試験を行うことによって机上の学問と実際の現場を融合できるよう努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、118 頁)。
- ・ 若いアーティストたちの発表の場に出かけ、彼や彼女らの話を直接きくことのできるような機会をもうけるようにした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、84 頁)。
- ・ 異なった価値観をもつアーティストたちとの直接的なコミュニケーションを通じて理解するようにした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、84 頁)。
- ・ 毎回 10 分くらいで授業の感想を書かせると学生とのコミュニケーションもとれて効果

的(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。

- ・ 第一回目で水ロケットの紹介と授業の目的についてガイダンスした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、76 頁)。
- ・ 大学の外で何か経験させるといった一種の体験学習を行い、そこから問題を見つけさせるということが考えられる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、79 頁)。
- ・ 見学現場の紹介(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
- ・ 講義内容に即した岩石・鉱物、化石などの試料を授業中に回覧することは、言葉や図での説明を補うものとして効果的である(地球科学小部会、平成 12 年度事例集、150 頁)。
- ・ プレゼンテーションを行わせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、80 頁)。
- ・ レジメをレポートでまとめさせるとともに、パワーポイントを用いた発表を行った。今回は司会を教官と TA で行い、学生間でも発表に意見交換できる雰囲気を作った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。
- ・ 報告形式の発表を少なくし、グループ内で自主的に討論させ議論を深める形式をとる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ プレゼンテーションの方法をコピーして渡しておく(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ 学生に各自で調べた発表内容のレジメを作成させ、各学生に配布して発表させる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
- ・ 受講生が自分の視点を持って社会的事象を把握し、批評できる力を養うため、ほぼ毎回、テーマに沿った発表を行い、さらに他者の発表に対する意見を述べる、という方法をとった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、10 頁)。
- ・ グループ討議である程度の報告書を作成させ、中間発表でお互いに発表内容について感想を述べさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、36－37 頁)。
- ・ 各自に発表用資料のレジメを作らせ、それをもとに発表させた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、70－71 頁)。
- ・ パワーポイントでの発表は、いろいろ工夫して楽しんでいたようだ(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、83 頁)。
- ・ 自由に発表した者から話題提供をさせ、自由に発言させる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高めるために、パワーポイントによるプレゼンの提案と実践をした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、138 頁)。
- ・ 読書の方法、文章の書き方、プレゼンテーションの仕方について書籍を読んで、各自が個人的にとくに役立つ情報と一般的に有用な情報と個別に整理してリストするように課題を与えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、67 頁)。
- ・ 新聞、雑誌の動物実験に関する最新のニュースを適宜取り入れるようにし、持ち回りの学生によるプレゼンテーションにはプリント、OHP、液晶プロジェクター等を使用させ、動物実験の現場で実際に研究者が実験しているところを見学させた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、127 頁)。

4. 素早いフィードバックを与える

- ・ 学生はディベートの優劣について判定を行い、その他の点についてもフィードバックを返す、という手法をとりました。また、担当者以外の学生の積極的な参加を促すために、この他に、ディベートの内容に基づいて自分の意見をまとめるというレポート数回提出させました(全学教養科目部会、平成 17 年度事例集、81 頁)。
- ・ レポートも全て書かせて採点し、悪いものは返却して再提出させた。採点結果は、毎時間公表した。その結果、学生はかなり熱心に書いたようだ(化学小部会、平成 12 年度事例集 143 頁)。
- ・ 2 回に 1 回くらいの割合で、小レポートを出させ、蓄積したレポートを再構成して肉付けさせることにより最終レポートを完成させるようにしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ レポートを 5-6 回課している。内容によっては、5 段階あるいは 10 段階評価して 2 週間後にどう使われているか話すようにしている(化学小部会、平成 12 年度事例集、143 頁)。
- ・ レポート、中間試験については返却を行っている(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、255 頁)。
- ・ 授業後修正した文章を再提出させているが、文章の学習には効果的だと思っている(言語文化部会、平成 17 年度事例集、44 頁)。
- ・ 小テストに感想を書いて貰うことによって、教師へのフィードバックを目指した(全学教養科目部会、平成 16 年度事例集、335 頁)。
- ・ 出席カードに授業の感想を書いてもらって学生の関心を把握しようとした(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、247 頁)。
- ・ 出席表に質問や意見を書かせ、次の講義でそれに答えると学生の理解が深まる。教官の反省材料にもなる。双方向性が実現できる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 毎回の最後の 10 分は、感想や質問を書かせた。次回にこのプリントを全員に配布し、「〇〇君、君はこんなこと書いたけれど、もう一度この場で問題提起してみては？」と水を向けると、以外に上手く討論の端緒が引き出せることに気づいた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、95 頁)。
- ・ 質問表というのを各人に毎回授業終了時に提出させ、次の回に回答を記載し学生に配った(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、93 頁)。
- ・ ミニレポートで特徴的な意見や質問表を取り上げ共通認識を提示した(健康・スポーツ科学部会、平成 16 年度事例集、225 頁)。
- ・ 出席表に質問や意見を書かせ、次の講義でそれに答えると学生の理解も深まる。また、教官の反省材料にもなり、いわゆる双方向性が実現できる(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145-146 頁)。
- ・ 講義の要約、感想を書かせると学生とのコミュニケーション、次回の講義の参考のために大いにプラスになる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67-68 頁)。
- ・ 講義の終わりに質問用紙とそれに対する返答をすることで教師と学生間のコミュニケーションを図るよう努めた(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、310 頁)。

- ・ 毎時間 10 分位で 1 回分の講義の要約、感想を書かせると学生とのコミュニケーション、次回の講義の参考のために大いにプラスになる(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145－146 頁)。
- ・ 担当教官は、提出された課題に目を通して受講生がどれだけ授業の内容を消化しているか常に把握するように努めた(言語文化部会、平成 16 年度事例集、200 頁)。
- ・ 授業前に学生に予習してもらいたかったので、毎回次週に行う記事を配り、要約を書いてきてもらった。その要約には必ず教員の添削をつけて学生に翌週に返した(言語文化部会、平成 17 年度事例集、31 頁)。
- ・ 毎週、教科書の章末問題から選択して宿題として課し、翌週レポートとして提出してもらい、翌週の講義で、問題の解答を解説しながら復習している(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、65 頁)。
- ・ 毎回約 30 問以上の演習問題を事前に宿題として指定し授業開始時に提出させる。次回に全ての問題を採点・添削して返却し、間違えが多い問題数問を選び授業時間中に解説することを行った(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、66 頁)。
- ・ 講義の終わりに簡単な演習問題を課している。答えは回収し、後日採点して返却する(化学小部会、平成 12 年度事例集、143 頁)。
- ・ 課題の返却は、受講生のモチベーションの意思や向上に繋がった(言語文化部会、平成 16 年度事例集、200 頁)。
- ・ 本年度は、できるだけ宿題を多く課し、訂正・コメントを朱書した後、すべてを次回の講義時に返却した(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、263 頁)。
- ・ 改善点については、ヒントを与えて、次回までに自主的に調べる意欲を持たせるようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・ 最終回には、学生から提出された「評価レポート」、自己評価、授業の感想等を、学生の名前を伏せてまとめた形の冊子に配布し、セミナーの総括と検討会を行ったが、この方式は、例年、学生から好評を得ている(基礎セミナー部会、16 年度事例集、105 頁)。
- ・ 実際に教師宛にメールを出す宿題を与え、そのメール文を使って、どこをどう直せばいいのかななどをディスカッションしながら、指導するようにしている。はじめから答えを与えるのではなく、学習者自身の気づきを重視して、後日一人で書くときに自己修正ができるように留意している(言語文化部会、平成 17 年度事例集、44 頁)。
- ・ 授業のあと 2,3 日中に、簡単な感想・質問をメールで TA に送ることや、TA はそれをまとめて教官に送ること、教官は質問への答えや感想を入れて TA に送る、TA は学生にメールで返却する。次回にプリントして、教官と TA が感想や答を簡単に説明。学生に答えさせる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、44 頁)。
- ・ 学生の討論を促進するために、疑問点などはあらかじめ出してもらおうと共に、こちらから問題点を投げかけ、解決策を議論するよう努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、118 頁)。
- ・ 講義科目であるが、授業中に発問するとともに、質問の機会を保障した(文系教養科目部会、平成 16 年度事例集、298 頁)。
- ・ 最後の講義日を質問日にしたら、意外に多くの学生が質問および将来の進路相談に来た(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。

- ・最後の講義日を質問日にしたら、意外に多くの学生が質問および将来の進路相談にきた(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・採点中は TA に、教室を回ってもらい、個別の学生の質問に答えてもらう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、190 頁)。
- ・学生に発表させるときには、質疑応答の時間をなるべく多くとるようにし、教師からも多く質問して、他の学生からの質問が出やすい雰囲気を作ろうとした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、149 頁)。
- ・毎回、講義の終了前 10 分程度を利用して、講義内容に関する質問、講義についての要望などを用紙 1 枚に書いて提出させた(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、255 頁)。
- ・一定の緊張感をもたせるために時々授業終了後 15 分ほどを利用して授業の内容等について小レポートを書かせた(文系教養科目部会、平成 16 年度事例集、300 頁)。
- ・個別指導が不可欠であり、教官だけではとても手が回らないので、TA の採用が必要である(生物学小部会、平成 12 年度事例集、147－148 頁)。
- ・生命科学に関する基礎知識を把握するため、第一回の授業でアンケート型テストを行った(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、315 頁)。
- ・個別指導が不可欠(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・予習よりも復習に重点を置く(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161－162 頁)。
- ・中間報告を聞いて、進め方を助言する(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・スライドの作り方に工夫が見られた時には、ほめてあげると学生のモチベーションが高まったのではないかと思う(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、83 頁)。
- ・各自の取り組みの良い点を積極的に誉めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、160 頁)。
- ・最後に全員の個別読解作業結果をコピーして配布し、全員に担当部分を説明させ、講評を加えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、152 頁)。
- ・受講生の発表内容をその場で板書し、他者の批評を上書きすることで、受講生にわかりやすく記録が残るように工夫した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、10 頁)。
- ・実験後に各学生に実験の原理を理解したか聞いてみる(化学小部会、平成 11 年度事例集、166 頁)。
- ・授業アンケートの実施。これにより、学生の理解度・教官の熱意・設備・シラバスと実際の授業の対比などができる(地球科学小部会、平成 10 年度事例集、74 頁)。

5. 学習に要する時間の大切さを強調する

- ・レポートの分量は A4 用紙で 2 枚以下に抑えるように指導し、討論や議論を重視するようにした。そのため、調査段階での作業量はそれほど大きくなかったと思う(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、89 頁)。
- ・過度の自宅学習をさせない(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161－162 頁)。
- ・学生は初心者。実験は盛りだくさんにならないほうが良い(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・文献調査の方法を最初の 2 回のセミナーで教えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事

例集、160 頁)。

6. 学生に高い期待を伝える

- ・ 題材を一般マスコミ報道記事など身近なものや、教授の思想としての科学技術の発展の歴史観と将来展望なども適時配布し、科学者としての教授の人格をつねに感じさせる工夫を行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、28-29 頁)。
- ・ 「大学院生にはこんな風に理解するように言っている」という表現を使ったら学生は興味を示した(物理学小部会、平成 10 年度事例集、57 頁)。
- ・ 学生が興味を持ちそうなノーベル賞の裏話をときどきした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、85 頁)
- ・ OHP で授業内容の延長上にある最先端の研究をいくつか紹介した。これは好評であったと思う(生物学小部会、平成 12 年度事例集、137 頁)。
- ・ 最初の 10 分程度を現代科学の最先端事例についてのフルカラーOHP での紹介にあてた。遅刻してくる学生がある程度揃うのを待つという副次的意味もあった(化学小部会、平成 11 年度事例集、165 頁)。
- ・ 資料や OHP を使用しわかり易いようにした。最先端の研究内容を紹介した。これには学生は興味を示した(化学小部会、平成 10 年度事例集、61-63 頁)。
- ・ 発表したテーマについて現在何が研究の中心になっているかをアドバイスして興味を持たせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ 導入の 1-2 回に、OHP で授業内容の延長線上にある最先端の研究をいくつか紹介した。興味を持った学生もいたが、多数の学生は無反応であった(物理学小部会、平成 10 年度事例集、57 頁)。
- ・ 公開実験をしたり、測定器の実物を見せて研究の最前線との関連を説明した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、85 頁)。
- ・ 最新の研究状況を時々短時間講義して興味をひきつける(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 実際のアート作品を持ち込み、それについて討論した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、84 頁)。
- ・ 化学が今の生活や企業にどのように役に立っているかを解説した(化学小部会、平成 10 年度事例集、61-63 頁)。
- ・ 最近の学生は、受験勉強の弊害で、記憶に片寄り、自主的に考える力に欠けているとの社会的な批判が有るが、私はそんなことはないと信じていること、仮に受験勉強の弊害があっても、君たち名古屋大学の学生であれば、わずかな時間でそれを克服できるはずである。この 2 点を当初、何度か強調した。6・7 回目の授業で、そのことが確認できて大変感動している旨を伝えた。その後、授業への積極的な参加により雰囲気が大きく変わった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、101-102 頁)。
- ・ 最近の一週間に起こった化学的な出来事を解説する(化学小部会、平成 10 年度事例集、61-63 頁)。
- ・ 扱うテーマを自分たちの身近な生活と関連付けて説明し、社会生活をする上で化学が

重要で学ぶ価値があると評価し、できるだけ興味が沸いて教育効果が上がるように配慮している(化学小部会、平成 12 年度事例集、143 頁)。

- ・ 大テーマとして社会的にも大きな問題になっているホットな話題を選ぶ(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例週、81 頁)。
- ・ 授業中に、講義内容が、どのように役立つかを例示して、学習意欲を刺激することが必要である(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ 専門外の事項について講義をする場合、教科書的になり易いので、専門分野に関連付けた例題を上げながら話を進めると興味ある講義になる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ 専門分野に関連付けた例題を上げながら話を進めると興味ある講義になる(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145－146 頁)。
- ・ 「私の研究室に遊びに来なさい」と誘って、時間外に大学院生の実験を観察する機会を持たせてやれた。少数の受講者の眼は確かに輝いていた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、95 頁)。
- ・ TA は、自身の理論形成過程の新鮮な考え方を示して、学生に大きな刺激となった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、154 頁)。
- ・ 発言するたびにチェックした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、66 頁)。
- ・ 履修条件に、「死生観に高い関心を持ち、自分について語ることができる人が望ましい」と明記したため、学生のモチベーションは最初から高い印象であった(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、130 頁)。
- ・ 授業開始時に「授業方針と受講者への要望」と題する紙を配り、そのなかでメールやファックスによる質問を奨励した(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、241 頁)。
- ・ 基礎セミナーという授業の目的・趣旨を十分理解させる(基礎セミナー部会、平成 10 年度事例集、81 頁)。
- ・ 授業の目的を明示する(化学小部会、平成 11 年度事例集、166 頁)。
- ・ 学生自身による創造的作業の機会と位置づけることで、つねに講義の最終目標を念頭に置いてもらい授業が進められるよう配慮した(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、244 頁)。
- ・ 毎回のセミナーで学ぶことの意義を強調した。また、将来の進路についてレポートを出させた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、66 頁)。
- ・ 最初の講義担当者は、授業の趣旨と構成について、毎時間の授業担当者とそれぞれの内容も含めて、具体的に説明すべきである。これにより、学生は当該授業についての全体的なパースペクティブを持つことができ、授業へのインセンティブを高めることが可能(総合科目・開放科目部会、平成 10 年度事例集、19 頁)。
- ・ 実験の意義を明確に学生に伝え、理解させることが重要(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・ 学生の発言を促すために、討論への積極的な参加を成績評価の基準にすると伝え、発言をチェックした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、140 頁)。
- ・ 評価に反映することを説明し、毎回一回は発言するように求めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、90 頁)。

- ・ 学生の討論を促進するため、毎時間、最低 1 回の発言を出席の要件とした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、114 頁)。
- ・ 毎回一回は必ず発言することを原則とした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、8 頁)。
- ・ 発言の積極性を評価の対象とする(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、96 頁)。
- ・ ルールとして各回に全員が最低一回は発言することにした。積極的には発言しない学生からも興味深い論点が出されることもあった(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、25 頁)。
- ・ 毎回少なくとも一回は発言することを心がけるようつとめた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、70－71 頁)。
- ・ 授業中の私語、遅刻での入室学生には、その都度注意する(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ 私語を慎ませる方法：第一回目の講義でよく注意しておく。同級生の迷惑となることを強調するのが効果的。最初に講義についての注意などを配布資料にして配り、注意を徹底する(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145－146 頁)。
- ・ 毎回、一度は発言するようにとの指示をしている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 発表者が聞き手に対して指名して意見を求めることを勧めることで、討論が増えた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20－21 頁)。
- ・ ゼミ報告については、報告者に司会と進行役の機会を与えることとし、最初に TA のモデル報告を行った(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、18－19 頁)。
- ・ 意見が出にくいときには、司会者に、司会者が疑問を出して問いかけることや、発言者を指名したり、全員に意見を求めるように促したりした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、167 頁)。
- ・ 司会・進行係りは毎回交代して務めるようにした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、70－71 頁)。
- ・ 第一回目に模擬演技を行った(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、89 頁)。
- ・ 従来の自主研究実例の例示 等(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、82 頁)。
- ・ グループ分け、調査方法、情報収集方法、発表形式、レジュメ・レポートの作成など出来るだけ例を示すなどして説明する(基礎セミナー部会、平成 10 年度事例集、82 頁)。
- ・ 最初集会の発表に優れたものがあると、その後の発表や議論が活発になりやすい(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、91 頁)。
- ・ 最終的なレポートは私の講義ような HP に載せ、公開するので中途半端なものを提出することができない(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ 教官と受講生全員が加入する Mailing List を立ち上げ、宿題は教官のみならず、全受講生にも事前に配送されるようにした(言語文化部会、平成 16 年度事例集、202 頁)。
- ・ 教授が幅広い教養を身につけた科学者であることを自然に感じさせる工夫が必要(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、28－29 頁)。
- ・ 英語学習の楽しさを感じてもらうためにも映画のシナリオを速読練習に入れた(言語文化部会、平成 17 年度事例集、32 頁)。

- ・ TA と二人で何回も同じ発音を繰り返しながら、やがて受講生たちもその中に巻き込んでしまう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、213 頁)。
- ・ TA と教官とのモデル会話(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、205 頁)。
- ・ TA に発音と会話の指導を主にお願ひした(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、205 頁)。
- ・ 会話練習。TA 一問学生一答、学生の答えの発音を正しく復習させる(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、203 頁)。
- ・ TA に発音練習やモデル・リーディングあるいは韓国事情や韓国の風俗・文化の紹介などをやってもらった(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、211 頁)。
- ・ TA と教官のモデル会話は、格好の刺激として学生の興味をそそるであろう(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、187 頁)。
- ・ TA とのモデル会話(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、205 頁)。
- ・ TA 自らがテキストの理解に役立つとして同君が薦める参考書や辞書の紹介(言語文化科目部会、平成 12 年度事例集、184 頁)。
- ・ 学生に毎回かならず 2 回は発言するように努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、147 頁)。

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

- ・ 学生の関心を高めるために、関連書籍、文献、ビデオ教材等になるべく多く使い、予備的な知識になるべく多く提供しようと努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、149 頁)。
- ・ 方法としては、できるだけ写真を多く見せるようにした。OHP を用いたり、黒板に板書した。OHP だけでは学生が興味を示さず寝てしまう(総合科目・開放科目部会、平成 11 年度事例集、193 頁)。
- ・ 講義ではテキストを中心に進めていたが、理解を助けるために、できるだけ図解すること、興味を引くような具体的な例を示しながら説明した(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ マイクを用いて、一度に多くを説明するのではなく、必要に応じて何回かに分けて説明する(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・ 地球上の代表的イベントの紹介で実物や画像データを多用し、受講生の関心を集めるようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、114 頁)。
- ・ テキストは使わずプリントを使う先生が多かったが、ビデオなど視聴覚教材と併用して教育効果をあげていた先生もいた(総合科目・開放科目部会、平成 11 年度事例集、187 頁)。
- ・ テキストとあわせて、AV 機器を使うのが効果的(化学小部会、平成 10 年度事例集、61－63 頁)。
- ・ インターネットやデータベースなど情報機器を自由に使わせる(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、81 頁)。
- ・ ビデオの使用とレジュメの配布(文系教養科目部会、平成 16 年度事例集、247 頁)。

- ・ ビデオ・カラーOHP など、充実しつつある表示装置をもっと活用することで、学生の興味を引き出すことが出来ると考えられる(地球科学小部会、平成 10 年度事例集、74 頁)。
- ・ 全保健学科の学生が対象なので、ノートの補助となるようにプリントを配布しスライドでの授業を避けた(理系教養科目部会、平成 16 年度事例集、280 頁)。
- ・ 各自にテーマを選ばせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、144 頁)。
- ・ 学生にサブテーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、135 頁)。
- ・ 調査内容を焦点化させるためのサブテーマを決めさせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、133 頁)。
- ・ 受講生ごとに調査テーマを設定させて、自主研究を促進するようにした(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、114 頁)。
- ・ サブテーマの設定は、学生の興味関心アイディアを出してもらってから、それを整理する形で設定した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、157 頁)。
- ・ 自分で探してきた本についてレポートして良いとしたので積極的に新しい話題を提供する学生もいた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、23 頁)。
- ・ 学生の得意な分野、興味のある分野のテーマを選ばせ、自主的な勉学に基づく課題の理解と習得を心がけた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、69 頁)。
- ・ 学生各自が選んだテーマに従って発表・討論を行わせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、94 頁)。
- ・ 学生が調査・発表する「テーマ」を自分自身が最も知りたいと思っているものを選ばせた(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ サブテーマを学生に選ばせた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、165 頁)。
- ・ 各自、興味を持っている物質について 10～15 分発表させている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ 学生の自主性を尊重するようできる限り学生の感じていること、知っていることの話させた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、30－31 頁)。
- ・ 学生のモチベーションを高めるために、さまざまな種類の文献資料を提供し、なるべく大勢の学生から意見・感想を求めるように授業を構成した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、143 頁)。
- ・ 多様な学生の興味に応じるよう、多角的な問題設定をした(文系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、236 頁)。
- ・ 主張がいくつもあるような題材を選ぶ必要がある(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、163 頁)。
- ・ 指定図書を多様化した分野にすることで何れかに関心を持って読ませるようにした(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、90 頁)。
- ・ 個別指導が不可欠(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・ 理解力の差がある場合、クラス編成をしそれぞれに見合った講義を行う(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ 理解力の差が大きいので、クラス編成をしないといい(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。

- ・ 同質の学生の集まりになると、不活発になる可能性が高く、できるだけ異質の学生が集まるようにグループ分けを考慮している(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、72 頁)。
- ・ 教科書が難しいとの声があり、後半はプリントで補った。好評であったと思う(物理学小部会、平成 10 年度事例集、57 頁)。
- ・ 各授業ごとに英文 100 語のまとめと、日本語でも英語でもいい発表に関する感想をメールで出させた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、20-21 頁)。
- ・ 理解の遅れている学生のための補講を TA が行うシステムを考えるのも一策かもしれない(生物学小部会、平成 12 年度事例集、145-146 頁)。
- ・ 日本人学生の TA には、留学経験や国の事情や文化を折りに触れてビデオや音楽などを用いて紹介してもらう(言語科目部会、平成 12 年度事例集、205 頁)。
- ・ TA とともに個々の学生の質問に対応し、個々の学生のスキルの違いを埋めるよう努力した(理系教養科目部会、平成 12 年度事例集、303 頁)。

8. その他

- ・ イラク戦争に関するもの、SARS に関するもの、遺伝子組み換えに関するもの、サッカーに関するもの等、いろいろな分野の記事を取り上げた(言語文化部会、平成 17 年度事例集、31 頁)。
- ・ 地球環境問題の実例を紹介し、その理論的根拠を説明する(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、80 頁)。
- ・ 今日の問題を提示するのが良いと思われる(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、80 頁)。
- ・ テーマにひろく関係する具体的な事例を共通テキストから取り上げたものについての正確な紹介と何が問題化を報告するレポートにもとづく討議を中心に運営した(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、48 頁)。
- ・ 特定の教科書は指定しない(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、94 頁)。
- ・ 共通テキストを用意し、互いに共通の話題がもてるように努めた(基礎セミナー部会、平成 16 年度事例集、146 頁)。
- ・ 学生が調査をサボタージュすると、次の報告をする学生がとまどう。このようにして、それぞれの報告が、他の報告と関連を持つような小テーマの選択になっている(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、86 頁)。
- ・ 授業実施前に十分な、かつ周到な事前の打ち合わせが必要である。これにより開講の目的と教育目標を担当者が共通の認識として持つことが大事である。学生のアチーブメントについての望まれる理念型を想定してみる(総合科目・開放科目部会、平成 10 年度事例集、19 頁)。
- ・ 授業担当者は、自らの授業が全体の流れの中で、どのような位置にあり、そして自らの講義に託された課題がいかなるものかを明確に自覚することが肝要。こうすることで、先行担当者の講義と自らの講義との間のあるべき有益な齟齬を回避することができ、教育効果を向上させることができる(総合科目・開放科目部会、平成 10 年度事例

集、19 頁)。

- ・ シラバスにそって講義をすると学生は大体ついてくる(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ シラバスにそって講義をすると学生は大体ついてくる(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)
- ・ 最終の講義担当者は、講義全体を総括し「まとめ」を行う必要がある。これにより、受講者は自らの達成度を検証できる。学生自身のうちに問題の深化を求める意識を涵養することにも繋がる(総合科目・開放科目部会、平成 10 年度事例集、19 頁)。
- ・ 講義ノート WEB 上で公開している。学生にはかなり好評である(理系基礎科目部会、平成 16 年度事例集、65 頁)。
- ・ OHP やパワーポイントを用いるとノートを取ることを放棄する学生が多いので、化学基礎では学生にノートを取らせることを目指してこれらビジュアル機材は一切使用せず、全て板書で授業を進めた(理系基礎科目部会、平成 17 年度事例集、66 頁)。
- ・ ビデオやカラーOHP を使うと学生の興味を引き出すことが出来ると考えられる(地球科学小部会、平成 12 年度事例集、150 頁)。
- ・ ビデオ・カラーOHP など、充実ある表示装置をもっと活用することで、学生の興味を引き出すことが出来ると考えられる(地球科学小部会、平成 11 年度事例集、172－173 頁)。
- ・ プリントを配布して説明するのが好評のようだ(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ プリントを配布して説明するのが好評のようである(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ 具体的な作業はスライド、プリント等で示す。さらにわからないことがあれば、その都度個人的に指導する(生物学小部会、平成 10 年度事例集、60－70 頁)。
- ・ 資料はプリントしてわかり易く作るようにし指導した(基礎セミナー部会、平成 12 年度事例集、75 頁)。
- ・ スライドを見せる場合は、最初に見方を説明しないと、学生は暗闇の中でノートを取ろうとして苦労する(生物学小部会、平成 10 年度事例集、67－68 頁)。
- ・ スライドを使う場合は最初に見方を説明したほうがよい(生物学小部会、平成 11 年度事例集、167－168 頁)。
- ・ 受講生が多いと板書では後ろの学生には見えにくいので、あらかじめパソコンに WWW 形式で絵やタイトル化した文字を入れておき、それをスクリーンに映して講義をしている(化学小部会、平成 11 年度事例集、165 頁)。
- ・ 担当教官相互による授業内容についての情報交換(基本主題科目部会、平成 10 年度事例集、3 頁)。
- ・ 何よりも教師自身がモチベーションを持つ必要がある(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161－162 頁)。
- ・ 単位取得にまつわる不安は除去してやるほうがよい(言語文化科目部会、平成 10 年度事例集、161－162 頁)。
- ・ 文やテキストの意味にあまりこだわらないように指示する(言語文化科目部会、平成 10

年度事例集、161－162 頁)。

- ・ 学生は100%理解して100%答える必要はない(言語文化科目部会、平成10年度事例集、161－162 頁)。
- ・ 授業中は学生の頭を日本語から解放させる方がいい(言語文化科目部会、平成10年度事例集、161－162 頁)。
- ・ 学生へのネットやパワーポイント使用の助言と指導(基礎セミナー部会、平成16年度事例集、20－21 頁)。
- ・ 意見欄の位置を受講者ごとに決めておくと、次第に各自の個性が各自に分かる「意外な効果」が生まれた(基礎セミナー部会、平成12年度事例集、95 頁)。
- ・ TA は出欠管理、演習用紙の準備などで役立っている (化学小部会、平成12年度事例集、143 頁)。
- ・ TA に試験監督、採点などを手伝ってもらった (化学小部会、平成12年度事例集、143 頁)。
- ・ TA にレポートの問題の原案作成を依頼した(化学小部会、平成12年度事例集、143 頁)。
- ・ TA とテキストの文法や表現、内容まで細部にわたって確かめるようにしている(言語文化科目部会、平成12年度事例集、184 頁)。
- ・ ネイティブの TA によるヒアリングテープ作成(言語科目部会、平成12年度事例集、203 頁)。
- ・ TA の活用によって、教材の準備、議論の誘発、復習教師、レポート作成補助、質問への回答など、教官と学生の間に入ってくれる人が、いれば教官の負担は軽減される (総合科目・開放科目部会、平成11年度事例集、187 頁)。
- ・ TA に解答の要点を説明させることで、有機化学に対する近親感の向上を図るとともに、学生へのより刺激となった(理系基礎科目部会、平成16年度事例集、274 頁)。
- ・ 毎回授業のはじめに実施するテストの用紙を TA に授業の前に印刷してもらう(言語文化科目部会、平成12年度事例集、190 頁)。
- ・ 教官が TA に期待することを TA 自身によく理解させる(言語文化科目部会、平成12年度事例集、195 頁)。
- ・ 英作文の間違いの「ワンポイントレッスン」として、TA に5分くらいで解説をしてもらっている(言語文化科目部会、平成12年度事例集、190 頁)。
- ・ 化学基礎 I (理学部)では、自分(教員)自身が興味を持てない(重要と思わない)部分も教えることが強いられる。いくら準備をしても、その箇所になると力が抜け、自分でも「つまらないことをしゃべっている」という意識が芽生える。学生にもそのところが通じるらしく、半分寝ぼけ眼になる。そのようなときには、関連した話題(アメリカ化学会の Chemistry and Engineering の記事など)を取り上げ、色々な角度から学生に意見を出させると少しばかり盛り上がる。日頃から、その手の記事が目にとまるとコピーして整理するようにしている(理系基礎科目部会、平成17年度事例集、64 頁)。

資料 2 名古屋大学の学生から後輩への学習アドバイス

近田 政博

1. 調査対象

授業名：平成16年度全学教養科目「未来の大学像をつくる一名大と名大生について知ろう」

担当教員：近田政博（高等教育研究センター助教授）&小川豊昭（学生総合センター教授）、杉村和美（学生総合センター助教授）、船津静代（学生相談総合センター助手）

受講者数：63人（実質的な受講者は46人）

実質的受講者の内訳：法8人、経済8人、情文1人、理2人、工11人、農16人

受講対象：学部2年生、全学部対象

開講時期：後期、月曜2限

教室：名古屋大学全学教育棟35番教室

2. 調査方法

成績評価方法の一つとして、受講生に「後輩に伝えたい勉強の鉄則5か条」という達成課題を課し、授業中に書いてもらった。この調査は「7つの提案」を学生が意識した上で書いたものではない。

3. 編集方法

本資料は下記の①～②の段階をまとめたものである。

①得られたアドバイスを7つの提案に従って分類した

②それぞれの提案において、類似したアドバイスをグループ化した

③グループ化したアドバイスを精査し、名古屋大学の学生ニーズを最も良く反映していると思われるアドバイスを「7つの提案」の正式なアドバイスとして採択した。

4. 特徴

この後輩への学習アドバイスには、次のような特徴がみられた。

- ・ 全般的には、「能動的に学ぶ」といった学習の心構えに関するアドバイスが多かった。授業時間中に回答させたため時間が限られており、「能動的に学ぶ」ためにはどうしたらよいかという具体的な方法論に踏み込んだアドバイスは少なかった。
- ・ 全体では、「提案3 主体的に学習を進める」についての意見が最も多かった。その中

でも特に授業を受ける際に集中すること、批判的に考える態度を養うことなどが指摘されている。逆に言えば、自分自身がこれらの点について苦労してきたという実体験の裏返しかもしれない。

- ・ 反対に、「提案4 学習の進み具合をふりかえる」「提案7 異なる考え方や背景を尊重する」についてはアドバイスが少なかった。「提案3 主体的に学習を進める」に分類された予習・復習の重要性は、実質的には提案4にもあてはまるといえるだろう。重要なことは、高度な学問内容を学ぶ大学教育において、予習・復習の習慣が必ずしも定着していないということであろう。また、提案7が少なかった主な理由としては、学士課程低年次（1～2年生）においては、外国人留学生や社会人学生など多様な学習・生活履歴をもった学生に接する機会が限られているため、異なる考え方や経験に対して十分にイメージできないことが考えられる。
- ・ 教師からのアドバイスとしては想定しにくい、学生独特のアドバイスとして注目されるものがいくつかみられた。それらを列記すると次のようになる（原文そのまま）。

- ・ やる気のない時には授業をさぼってケジメをつける
- ・ 講義に過剰な期待をしない方が、逆に授業をおもしろく感じることもある
- ・ 大半は役に立たないから講義の意義を考えない
- ・ 単位さえ取ればいい科目と、良い評価をとりたい科目と、意識を分けて履修する
- ・ 講義中でも眠たいときは眠り、その授業は友達に頼る
- ・ 授業中、眠たくなったら寝る
- ・ 優先科目に合わせて、自分の時間や能力を（他の科目に）配分する
- ・ きちんと睡眠をとる

これらのアドバイスをした学生は必ずしも不真面目な学生ばかりではない。学生の立場に立ってみると、すべての授業に対して全力で取り組むことは現実には困難である。限られた時間とエネルギーの中でどこに重点を絞るのかということが彼らの大きな関心事であることがみてとれる。もとより授業中の居眠りを教師が認めてはいけませんが、学生の立場からすれば、有意義でないと感じる授業で居眠りしておくことは、重要な授業に集中するために必要なコツである、という考え方もあり得るかもしれない。

ちなみに、アメリカの大学において優秀学生が後輩のために編集した学習・生活の秘訣集をみても、同様に「各学期ごとにサボる授業をつくる」「ギブアップすることも学ぶ」「睡眠はきちんと取る」「健康的な食事をする」など、学生の立場から現実に即したアドバイスが挙げられている。

このように学生から後輩へのアドバイスは、全体的には単純な Do it 型で、学習の方法論についての知見は必ずしも深くない。しかし、学生の実状に即したコツが散見された点

が、教える側に立った教員からのアドバイスとは異なる点であるといえよう。

参考文献

- 名古屋大学高等教育研究センター（2005）『初年次オリエンテーションを支援するスタディ
ティップスの開発と活用に関する事業』平成 16 年度学生支援特別経費成果報告書.
Newport, C. (2005) “How to Win at College: Surprising Secrets for Success from the Country’s
Top Students”, Broadwaysbooks.

1. 教員と接する機会を増やす

質問する

- ・ わからないことがあったら、先生に質問する。
- ・ 質問をする。
- ・ 先生に質問する。
- ・ わからないことがあったら先生や友達に質問する。
- ・ わからないことは先生に質問する。
- ・ わからないことは先生や友達に相談しながら、レポートは自力でやる。
- ・ わからないことは先生や友達に聞く。
- ・ 授業には必ず出て要点をノートに取り、わからないことは質問して、復習をする。

仲良くなる

- ・ 先生と仲良くなる。
- ・ 先生と仲良くなる。
- ・ 教員と交流をもつ。
- ・ 先生やTAと仲良くなる。

相談する

- ・ 教官に何でも相談する。
- ・ 気になる分野があればその専門の先生に相談してみる。

出会う

- ・ 尊敬できる教授に出会う。

2. 他の学生と協力して学習する

議論する

- ・ 友達と議論する。
- ・ わからないことは友達と議論する。
- ・ 友達と議論したり勉強したりする。
- ・ わからないことは友達と議論する。
- ・ 友達と議論する。
- ・ 友人や先輩と議論する。
- ・ 他人と議論する。
- ・ 考えの違う友人と議論する。
- ・ わからないことは友達と議論する。
- ・ 授業で学んだことを友人と議論したりして、自分の生活にフィードバックして活用する。

一緒に勉強する

- ・ 一緒に勉強できる友達を見つける。
- ・ 授業内容を友達に説明できるようになる。
- ・ 一緒に勉強する仲間をもつ。
- ・ 友達と勉強する。

質問する

- ・ わからないことは友達に聞く。
- ・ わからないことがあれば友達に聞く。
- ・ わからないことは友達や先生に聞いたり、自分で調べてみたりする。

協力する

- ・ 友人と助け合う。
- ・ 仲間と協力し合う。
- ・ 友達と共に伸びる。

相談する

- ・ 先輩、先生から大学の情報を入手する。
- ・ 年上のゼミ生や院生にいろいろ相談する。

その他

- ・ サークルに入る。
- ・ ライバルを見つける。
- ・ 友人を作る。
- ・ 勉強ばかりでなく、恋人や友人との時間をもつ。
- ・ 十分な睡眠を取り、友達とクラブ活動をし、良い人間関係をつくる。
- ・ 仲間をもつ。
- ・ 気の合う友人をもつ。

3. 主体的に学習を進める

授業を受ける際の留意点

- ・ 授業に積極的に取り組む。
- ・ 授業中、先生の話をもじめに聞く。
- ・ 積極的に授業を受ける。
- ・ 集中して講義を聞く。
- ・ 重要点に注意しながら授業を聞く。
- ・ 授業はなるべく前の席で受ける。
- ・ 興味のない科目でも、能動的に授業を受けるようにする。

- ・ 疑問をもって授業を受けると前向きになれる。
- ・ 難しい授業に対しては、逆にやりがいがあると思って取り組む。
- ・ 講義をよく聞く。
- ・ 板書をただ写すだけでなく理解しようとする。
- ・ ゼミに積極的に参加する。
- ・ 興味がない授業は、勉強という枠に縛られないで取り組む。
- ・ クラスメイト達を連れて、教室の前の席に座る。
- ・ 解剖実習を受ける。小さな生命の大切さが学べる。
- ・ 自分の意見を出す。
- ・ 授業の内容をとりあえず理解してみる。
- ・ やる気のない時には授業をさぼってケジメをつける。
- ・ 講義に過剰な期待をしない方が、逆に授業を面白く感じることもある。
- ・ 発言者の意見を鵜呑みにしない。拒絶もしない。
- ・ 大半は役に立たないから講義の意義を考えない。
- ・ 先生の言うことを鵜呑みにしない。

学習態度・学習姿勢

- ・ 自分から進んで勉強に取り組む。
- ・ 能動的に勉強する。
- ・ 自分から進んで勉強に取り組む。
- ・ 能動的に勉強する。
- ・ 疑問・興味をもって勉強する。
- ・ 人に聞く前に、まず自分で考える。
- ・ 受動的ではなく能動的な態度をとる。
- ・ 勉強する時は自分で考えることが大切。
- ・ 自分から進んで勉強する。
- ・ 批判的態度を養う。
- ・ どんどん疑問をもつ。
- ・ 疑問点は早く解決する。
- ・ わからないことは解決する。
- ・ とにかく自分で解答を一度出してみる。
- ・ 何事も鵜呑みにしないで、疑問をもつ。
- ・ わからないところを明確にする。
- ・ 疑問点を整理する。
- ・ やる気がでない時には何もしない。
- ・ 新しい知識について、それを暗記するのではなく、なぜ、どうして、ということを常に考える。
- ・ 多くの情報に触れる。

授業時間外の学習方法

- ・ 復習をする。

- ・ 復習する。
- ・ 予習する。
- ・ 復習する。
- ・ すべて教えてもらえると思わず、基礎は自分で学習する。
- ・ 予習して疑問点を洗い出す。
- ・ 学びたい科目は、授業以外でもその分野に触れる機会をもつ。
- ・ 授業を受ける前に、予習をして疑問点をもっておく。
- ・ 授業内容を前日にざっと目を通しておく。
- ・ テスト勉強をしっかりとって、単位を取る。
- ・ ノートをまとめる。
- ・ 授業ではルーズリーフを使用し、後でノートにまとめ直す。
- ・ ノート、プリントを整理する。
- ・ テスト前にはノートをまとめ直して、自分で体系的に理解する。
- ・ 自分が発言する時は、文献などで裏づけをとる。
- ・ わからないことは人に頼らず、本で調べる。
- ・ 授業前にシラバスは徹底的に読む。
- ・ ささいなことでもとにかく書いて、書いて書いて書きまくる。
- ・ 困った時の解決手段(インターネットや本など)を用意しておく。

よく考えて授業を選ぶ

- ・ 単位にならなくても、興味のある科目は受ける。
- ・ 専門以外の科目は単位さえ取ればいいので、興味のある科目を頑張る。
- ・ 単位のためでなく、自分の興味のある授業を選ぶ。
- ・ 講義に関するできる限りの情報を得、検討して選択する。
- ・ 単位さえ取ればいい科目と、良い評価を取りたい科目と、意識を分けて履修する。
- ・ 単位の取りやすい授業ではなく、興味をもった授業を選択する。
- ・ 授業を選ぶ時には、よく吟味して興味あるものを選ぶ。
- ・ 好きな先生の授業を取る。
- ・ さまざまな分野の授業を受けて、自分が興味のもてる内容を探す。
- ・ 共通科目はさまざまな知識が得られるので、つまらない授業でも会話のネタが探せる。

ノートのとり方を工夫する

- ・ ノートに要点を書く。
- ・ 要点のはっきりした、わかりやすいノート作りをする。
- ・ キーワードや要点をメモしたノートをとる。
- ・ 落書きしながらノートをとる。その方が覚えていたりすることもある。
- ・ ノートの取り方を工夫する。
- ・ 要点をまとめてノートをとる。
- ・ ノートをしっかりとる。
- ・ ノートは因果関係を含めて細かく書く。

興味をもてることを探す

- ・ 自分の興味あることに対して意義を感じる。(高校の時から興味をもっていたことなど)
- ・ 自分で興味のあることについてはいろいろ調べてみる。
- ・ 時間に余裕があれば、興味のあることはいろいろやってみる。
- ・ 興味のあることを見つける。
- ・ 自分の楽しみを見つけ、勉強と両立させる。
- ・ 情報の中から自分の興味のあることを探す。

読書する

- ・ 読書をする。
- ・ 本を読む。
- ・ 読書をする。
- ・ 本を読む。(大学の授業でも自習時間を導入してほしい)
- ・ 本を読む。

レポート作成に関して

- ・ 他人のレポートを写さない。
- ・ レポート作成はパソコンを使って調べ、統計などはグラフ化する。
- ・ レポート作成はパソコンを積極的に利用する。

その他

- ・ 自分の行動に責任をもつ。

4. 学習の進み具合をふりかえる

取り組んだ課題を振り返る

- ・ 取り組んだ課題を、他の分野にフィードバックする。
- ・ 授業や課題をやり終えた後に、自分が何を得たのか振り返ってみる。

勉強したことを自分の言葉で説明できるようにする

- ・ 勉強したことは自分の言葉で説明できるようにする。

授業内容を授業外にフィードバックする

- ・ 授業内容は単に暗記するだけでなく、授業外にもフィードバックして理解を深める。

5. 学習に要する時間を大切にする

時間の管理

- ・ タイムスケジュールをたてて勉強する。
- ・ 課題や目標のリストを作る。
- ・ スケジュールをたてる。
- ・ 学習スケジュール表を作って、時間を管理する。
- ・ 息抜きの時間を作る。
- ・ 通学などの時間を有効に使う。
- ・ 時間を決めて集中してやる。

授業に出る

- ・ 授業に出る。
- ・ まず授業に出る。
- ・ 必ず授業に出る。
- ・ とりあえず授業には出る。
- ・ 大まかにでも授業内容にはあらかじめ目を通しておく。
- ・ 講義中でも眠たいときは眠り、その授業は友達に頼る。
- ・ 授業中、眠くなったら寝る。

学習の優先順位をつける

- ・ 優先科目に合わせて、自分の時間や能力を(他の科目に)配分する。
- ・ 自分にとっての優先度(優先科目)を決める。
- ・ 優先順位をつける。

生活改善

- ・ きちんと睡眠をとる。
- ・ 規則正しい生活をする。

その他

- ・ 自己評価する。

6. 意欲的な目標に挑戦する

将来目標を立てる

- ・ 何か目標をもって学習する。
- ・ 将来の目標を決めて、そのための勉強をする。
- ・ 何か目標をもつ。
- ・ 目的意識をもつ。
- ・ 常に将来の自分をイメージし続ける。
- ・ 自分がなぜこの学部を選んだのかを明確にする。
- ・ 何を学びたくてこの大学を選らんだのか明確にする。

- ・モチベーションを高める。
- ・将来の目標をさがす。
- ・授業の意義を考える。
- ・なぜこの科目が必要なのか考える。
- ・興味をもった分野を活かせる仕事をさがす。
- ・一日ごとの目標をもつ。
- ・目標に向かって勉強し、本を読み、講義をとる。
- ・将来の目的を決めて、授業を受ける動機づけをする。
- ・興味のない分野も探究心をもって受けるようにする。
- ・将来の目標を定めて、モチベーションを高める。
- ・今やっていることを有益にする方法を見つける。
- ・目標をたてる。
- ・将来の目標をもつ。
- ・目標を決める。
- ・自分が真に学びたいことを見つける。
- ・目標を設定する。
- ・目的を常に明確にする。
- ・自分の将来と、自分の今やっている勉強との関わりを考える。
- ・自分の将来の目標に合った授業をとる。

学習資源を活用する

- ・図書館で勉強する。
- ・インターネットや文献で情報の幅を広げる。
- ・視聴覚教材(ビデオ、インターネット、テレビなど)を利用する。
- ・インターネット・図書館などを活用する。
- ・図書館を利用する。
- ・森林をやりたい人は大学周辺の環境を活用する。
- ・図書館を利用する。
- ・専門書を活用する。
- ・英語を勉強する。
- ・授業外においてもいろいろなことを学ぶ。
- ・専門学校に通う。

自分に自信を持つ

- ・失敗を恐れない。
- ・間違いを恐れず、自分に自信をもつ。
- ・失敗を恐れない。
- ・自分に自信をもつ。
- ・自分で決めたことは実行する。
- ・自分にとって重要だと思うことは、絶対やめない。

- ・ 自分に精神的圧力を加える方法を見つける。

その他

- ・ 健康を大切にする。

7. 異なる考え方や背景を尊重する

専門分野に縛られない

- ・ 専門分野に縛られない。

発言者が何を訴えたいのかを理解する

- ・ 発言者が(講師でも学生でも)、何を訴えたいのかを理解する。

資料3 名古屋大学の教員から新入生への学習アドバイス

近田 政博

1. 調査対象

平成16年度の全学教育科目担当教員

調査対象者 758 人中、回答者 76 人（回答率 10.0%）

2. 調査方法

依頼状の送付は電子メールで行った。メールアドレス非公開の教員に対しては学内便で発送した（2005 年 1 月）。

依頼状の差出名義は戸田山和久高等教育研究センター長、実施責任者は近田政博同助教授

回答は下記の URL からウェブ上で返信してもらう方法をとった。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/enquete/>

3. 調査内容

調査名：「名大新入生への学びのアドバイス」アンケートのお願い

調査項目

- A. 大学で学習するための習慣をどうやって身につけるか
- B. 高校とは異なる大学の勉強方法をどうやって身につけるか
- C. どうやったら自分自身の目標設定をすることができるか
- D. 大学での学習生活を進めていく上で、おすすめの本を紹介してください

4. 編集方法

本資料は下記の①～②の段階をまとめたものである。

- ① A～Cにおいて得られたアドバイスを7つの提案に従って分類した
- ② それぞれの提案において、類似したアドバイスをグループ化した
- ③ グループ化したアドバイスを精査し、名古屋大学の学生ニーズを最も良く反映していると思われるアドバイスを「7つの提案」の正式なアドバイスとして採択した。

5. 特徴

この後輩への学習アドバイスには、次のような特徴がみられた。

- ・ 全体的に最も多かったのは、「提案3 主体的に学習を進める」に関するアドバイスであった。その内訳は、「読書の方法を工夫する」「積極的な学習態度をとる」「授業時間外の学習を積極的に行う」「授業を能動的に受ける」「クリティカル・シンキングを行

う」などであった。これは「調査項目B．高校とは異なる大学の勉強方法をどうやって身につけるか」において、主体的、積極的、能動的な学習態度を取ることが大学での学習においていかに重要、不可欠であるかを示しているといえよう。

- ・ 「提案6 意欲的な目標に挑戦する」では、「将来目標を立てる」ことに関するアドバイスが多くみられた。人生の目標や夢を見つけることが学習意欲を促進する最良の方法であるとする論調が多かった。
- ・ 反対に、「提案4 学習の進み具合をふりかえる」「提案7 異なる考え方や背景を尊重する」についてのアドバイスは非常に少なかった。本調査はこれらの提案自体についての直接的なアドバイスを教員に求めたものではないので、上記のA～Cについてのアドバイスを集計・分類した結果にすぎない。それにもかかわらず、「資料 名大生から後輩への学習アドバイス」と類似した結果が得られたことは注目されよう。7提案のうち提案4と提案7についての意見がきわめて少数であった理由は次のように推測される。
 - ・ 「提案3 主体的に学習を進める」に関するアドバイスのうち、提案4に近似するものがすくなくない。（たとえば、「毎日机に向かい、勉強する習慣をつける。」など）
 - ・ 全体的に、復習よりも予習の重要性を指摘する教員が多いので、「ふりかえり」の重要性を指摘するアドバイスが少なくなっている。
 - ・ 名大の学部新生には外国人留学生や社会人学生が少ないので、「提案7．異なる考え方や背景を尊重する」考え方が学習習慣や勉強方法、目標設定に直接的には結びつきにくい。
- ・ このほか、教員からのアドバイスとして特に目立ったのは、生活改善に関するアドバイスである。その大部分は「提案5 学習に要する時間を大切にする」に掲載されている。具体的には、早寝早起き、朝食をきちんと食べる、運動の習慣をつける、睡眠時間を確保するなど、規則正しい生活習慣を身につけることが大学での学習の基本であるとする意見が多くみられた。
- ・ 上記のような積極的なアドバイスに混じって、焦って目標を探す必要はない、自分のやりたいことをじっくり構えて探せばよいとする意見もいくつかみられた。こうした意見には、教師自身の大学時代の経験が少なからず投影されているようである。また少数ではあるが、名古屋大学の教師たるもの、学習の習慣づけに関するアドバイスなど必要なのだろうか、と疑問を投げかける意見もあった。

全体的には、教師自身の大学時代の経験に照らし合わせながら、バラエティに富んだ具体的なアドバイスが提供されている。教師の側に立った「べき論」も多く散見されたが、

これは教師から名大生への期待値として受け止めればよいだろう。

参考文献

名古屋大学高等教育研究センター（2005）『初年次オリエンテーションを支援するスタディタイプの開発と活用に関する事業』平成 16 年度学生支援特別経費成果報告書.

1. 教員と接する機会を増やす

質問する

- ・ 疑問なところは講師の先生に質問して、理解とコミュニケーションをはかる。
- ・ 授業に出席し、授業後などに質問を教員に問いかけ、個人的に教員と仲良くなる。
- ・ 教員に臆することなく質問する。何を聞いても恥じることはないし、その権利があると知るべき。
- ・ 授業の後、分からない箇所は、先生の所に質問に行ってください。どこが分からないか、自分で明確化することは重要な作業です。質問を受けて嫌がる先生はいないと思います。
- ・ とにかく一人で考えていないで教員に質問する。
- ・ 分からない時は教員に質問してみよう。分からない時は、自分でも何が分からないのか分からないことがしばしばある。初めは「何が分からないのか分からない」と素直に教員に言っても良い。そのうちに自分の思考を論理的に追い詰めて何が分からないかを見つける努力をしよう。
- ・ 分からないところは授業で積極的に質問する。翻訳本がよくわからないという場合、翻訳に問題がある場合も多いので教員に聞く。
- ・ 毎講義で質問することを自分に課す。質問しなければ、という姿勢が講義の聞き方を変える。

相談する

- ・ 一度は教員と直接話す。基礎セミナーはいい機会だろう。
- ・ 基礎セミナーなどの機会に、教員にその教員が何を専門にやっているのかを聞いてみる。
- ・ 個々の先生がどんなことに興味を持ち、それをどう進めているのか、今後どのような目標や夢をもって、現在研究などを行っているのか直接話を聞いてみるとともに、疑問に思ったことを忌憚なく聞いてみる。
- ・ 先輩や教師に自分の問題意識を伝え、アドバイスしてもらおう。
- ・ 気の合いそうな同輩、先輩、教員と話をする。私の場合、授業後の先生に時間を作っていたいて、月一回、友人数名と共に喫茶店で四方山話をしていました。
- ・ 大学院を選ぶ場合は実際教員に会って相談して下さい。最後には二者択一の選択になりますが、その場合、短所長所を紙に書き出した上で決めて下さい。

訪ねる

- ・ 指導教官、授業の講師にたずねて興味のあるところはさらに理解を深める。
- ・ 同じ興味を持つ友人と一緒に先生の研究室へ質問に行く。結構、喜ばれる。ただし、メールなどでちゃんとアポをとっていくべし。
- ・ 積極的に教員を訪問してみよう。自分で行動を起こさないと、何も始まりません。教員に話しかけることで、教員から情報を引き出す。
- ・ 入学後できるだけ早いうちに、自分が所属する学科(もちろん他も可)の教員「全員」の研究室を訪問して話を聞く。興味あるなし、好き嫌いにかかわらず、だ。将来いやでも他人とコミュニケーションを取らざるを得ない時や人間関係構築の訓練となる。もちろん研究室選別に役立つことは言うまでもなし。教員側もスタンプラリーなど、学生がゲーム感覚で参加できるように環境を整えたらどうか。

その他

- ・ 色々な人とふれあうことが最も大切だと思います。自分から進んで先生や先輩と交流を持つように努力しましょう。少なくとも私はあなたが訪ねてくれるのを待っています。
- ・ 結局は、どんな「恩師」に出会うかにつきると思う。「恩師」とわかるのは数十年後ということもあるので(その可能性の方が大)、最初はいろんな授業(専門とは無関係で単位を必要としない科目)にでて、いろいろなものがあることを知るのが重要。

2. 他の学生と協力して学習する

交際範囲・活動範囲を広げる

- ・ 他人から誘われたり、声を掛けられたりしたときや、やろうかどうしようか迷った時は「イエス」という方向で考えてみる。新しいことに、少し背伸びして、やってみる。
- ・ 親と話す。親戚の年寄りと話す。
- ・ 学内、学外のいろいろな催し物(セミナーや公開講座や講演会)に参加して、おもしろいことをやっている人にたくさん会う。
- ・ 学会には学生会員の制度があり、学生対象の見学旅行など楽しいイベントが企画されています。それに参加してみたらどうでしょうか。
- ・ 何でも誘われたら乗ってみることで、体験を広げてみる。
- ・ 将来についての大人の視点からアドバイスしてくれる人(恩師、先輩など)を見つける。
- ・ あこがれの先輩、先生をもつ。
- ・ 迷った時やどうしてよいか分からない時は、戸外に出て人をながめてみる。人の中に何もなくても良いから自分の身を置いて考えてみると、自分の抱えている問題が小さく感ずることがあり、自分を客観的に眺めるのに有益なことがある。迷ったら人の集る所に行って考える。
- ・ さまざまなイベントやボランティア、講演会などに参加し、視野を広げてみる。
- ・ あれっとな今までと違った印象を受けたり、美しい、格好いい、と感じる分野や人について、なぜそうなのか調べてみる。それらについての本を読むのも良いし、思い切って話し掛けてみるのもよい。学問、スポーツ、趣味、など自分の好きな人を見つけるようにする。
- ・ 人と話し、本を読み、多くのことを様々な立場に立って考える。
- ・ 資格試験にチャレンジする。
- ・ やっぱある程度やってみなければわからないところがあるので、いろいろな学問について少しずつまずは手を出してみる。学問だけでなく、趣味もそう。例えば、POPSばかりでクラシックをまじめに聴いたこともなければ、聴いてみる。いろいろな刺激に出会わなければ目標も定めようがないものね。外国に行ってみるのもいいねえ。
- ・ 大学は専門学校ではありません。そこで修得したものがそのまま就職に役立つわけではありませんが、自分の将来の可能性を広げるものです。苦手なものも得意なものもそういったことの中で必要だと思うことが大切です。その上でどんな能力・知識を持った人間になりたいのかという目標・動機は、素晴らしい人や仕事・研究などになるべく多く接して得てください。特に大切なのはどれだけつらい仕事なのか、安い給料なのか、などということではなく、自分を納得させることができる質を持った仕事・人間であるかということを見てください。

- ・ 電車やバスなどの通学時間に会う外国人に、挨拶や天気の話でいいので、英語で積極的に話しかけるようにする。
- ・ 専門性の高い公開セミナーなどを聞きに行ってみる。
- ・ 私自身で「獣医師」になるために獣医学科を選び入学しましたが、1 年生の時はまだ「獣医師」とは何をする仕事なのか理解していませんでした。そこで、大学の夏休みなどを利用し、現場で働く「獣医師」にお願いして診療現場を見せていただいたり、酪農家での住み込み実習を体験しました。結果として臨床獣医師の職は選びませんでした。獣医師の様々な仕事内容について学ぶことができ、大学の講義、実験がなぜ必要なのかも理解できました。また、世の中で起こっている事象について興味を持つことと(国内外の旅も含む)、アルバイトをするなど大学の外に出て社会体験をすることが重要なのではないかと思います。
- ・ 好きな分野があればそれに集中して下さい。なければ、将来やってみたい職業をいくつか選びアルバイトなりインターンシップなりで実際に経験してみてください。
- ・ 大学が用意する授業やインターンシップだけに頼ることなく、社会の諸問題と直接向き合う機会をもつ。
- ・ コミュニケーションがどうもうまくできない人。先生でも、友人でもよい。人を一日 1 度は笑わせることを考える。
- ・ 他人と話す中で優れた機能を持つ人脈を形成する(自分から動かねばならない)。
- ・ 立派な人ばかりの中で過ごすのはしんどいことである。怠け者の中ばかりで過ごしてはラチがあかない。いろいろなグループと気楽にしかしそれなりに批判的に付き合うのがよい。
- ・ 友達を沢山つくる。
- ・ 英語のメル友をたくさん作って、短くていいので、毎日少なくとも1通以上の英語メールを書くようにする。
- ・ 課題別に物知りを探す努力をする。つまり、課題によって得意な人をみつける。(メタ認知という)そうして人脈を作る(積極的に他人と話してみることから始まる)。

議論する、勉強会を開く

- ・ 何か本を決めて、仲間と輪講をします。聞く側に回ったときには、例えば「何でこんなことを考えるの?」といったいじわるな質問をします。みなさんが高校時代に教育実習生をいじめたのと同じ種類の質問です(ただし、真面目に質問します)。発表する側に回ったときには、当然質問されます。このような輪講を1年続ければ、大学で勉強するのにふさわしい学習習慣、方法が自然に身につくはずで。
- ・ 友達と専門書の輪読・勉強会をする。
- ・ 授業内容や社会の諸問題について友人と話す機会をもつ。
- ・ 同じ授業を受ける友達をつくり、一緒に授業に出席する。
- ・ サークルや学部で、同じ講義に出る友人を見つけてみてはどうでしょう? ノートを任せる友人ではなく、一緒に講義に出て、講義の後で分からないところや面白かったところを話し合ったりできる友人です。互いに刺激しあえればいいと思います。数学などでは自主ゼミなどの勉強会をして教え合う。
- ・ 大学の一室を借りて、関心を共有する人との勉強会を始める。その前に、関心を共有できる人を見つけて、その人の話を聴くようにする。その前に、自分の関心を、簡単でいいから他人

にわかるように表明できるよう努力する。

- ・ 勉強を教え、聞きあえる友達を作りましょう。他人に教えることは自分の理解を必ず深めます。
- ・ 勉強仲間をつくり、読書会などをする。
- ・ 興味を持った事柄についてのしっかりした教科書などを、仲間を作り、輪読する。論理的に議論しながら内容を理解してゆく。
- ・ まわりの学生とよく議論する。先生に質問に行くのもいい。
- ・ 気の合った友達を作り、勉強においても助け合う。
- ・ 真剣に考える前に、考えることをあきらめる学生が非常に多く見られます。自分で考える、または友人や教員と議論を進めることによって、理解することの喜びを味わってみよう。
- ・ 数学などでは自主ゼミなどの勉強会をして教え合う。
- ・ これまでのように、「正解」の存在を前提とした受身の学習態度では、何とか卒業できても実力はつかない。自主的に、気の合った数人の仲間と、定評のある専門書に取り組むことを薦める。その時点で理解できなくとも、必ず得るものがある。また、大学では、わざわざ基礎から遠回りして教える。能率が悪いように感じられるかも知れないが、基礎体力を養うことに相当する。学術研究にしる、製品開発にしる、従来の方法で解決できない難問に将来当たったとき、深く考えることが武器になる。目標を高く持って、しっかり力をつけて欲しい。
- ・ 何についても、議論が出来る友人を見つける。そうすれば、自主的に勉強したくなる。

先輩に教えてもらう

- ・ 学習法は先輩のやり方を伝授してもらうのが一番いい方法です。学習方法は教員からは身に付きません。もっと身近な人をコピーしましょう。また、独り善がりの方法には限界があります。先輩にどんどん尋ねましょう。
- ・ 研究室に所属するのは4年生からですが、もっと早くから研究室に出入りして、特に先輩と友達になると勉強や生活、将来のことなどあらゆる点で参考になると思います。
- ・ 課外活動として運動部等に所属する。そこでは、先輩学生から大学生活の助言が聞けるだけでなく、卒業生からこれからの人生の生き方について多くの有益な助言が得られる。
- ・ 尊敬できる先輩を見つけること。
- ・ 先輩、クラブの友人などの情報を活用する。興味をもった研究室を訪ねる。

友だちに教えてもらう

- ・ 友人の素晴らしい所を学ぶ。
- ・ 友達をつくり、生活全般について、色々な事を話し合う。
- ・ 色々なことを話し合える同性の友人がいることが、一番重要です。大変ですが、講義等と一緒にになったら、話しかけて見ることを勧めます。夜型か朝型か気にする必要は、まったくありません。自分の好きなように生活してください。そのことで悩むより、どんな形でも自分が活動できる体勢で、進んでください。部活やバイトに没頭して4年間終わる学生もいます。
- ・ 友達と色々な形で話をしていると、何かが見えてくることがあります。色々話してみましょう。
- ・ 友人と将来のこと(卒業後のこと)を語り合ってみる。中には、明確なビジョンをもった人もいて、刺激を受けられるだろう。

3. 主体的に学習を進める

読書の方法を工夫する

- ・ 本を読んで、読書評をつけるのが一番。
- ・ 本を読んで、友人とその内容について語り合う。
- ・ 自分の専門に関する一般啓蒙書を読んで、専門に関する興味を持続すること。
- ・ 参考文献が紹介されている講義では、積極的に参考文献も読むことをお勧めします。講義では話きれない、より深い内容に触れてもらえると思います。
- ・ 興味を持った講義に関連する本、文献を読む。
- ・ 授業で興味を持った事柄について、とにかく本を読みましょう。月に2冊程度を目標に。
- ・ 様々な本を大量に読む→さまざまな心理や処理法を人間がとることを理解する
- ・ 知的生活の方法に関する本を読む。例：梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書
- ・ 興味のある分野の書物を、集中的にかためて読む。
- ・ どの分野についても、専門書を読む。(難しい本にチャレンジする。)
- ・ 生協で推薦される書籍をまずは読んでみる。
- ・ 中谷宇吉郎、ファラデーなどの科学啓蒙書や、名前しか知らなかった様々な分野の古典などを読んでみる。
- ・ 知りたいことがあったら複数の本を見つけてみよう。
- ・ 教えてもらおうとは思わずに、自分で理解できるまで本を読む。
- ・ 講義で紹介された本を購入する。それで分からない時は自分の理解できるレベルの本を探し、当たり外れは覚悟して本を買う。1 年間に 10 冊以上の勉強以外の教養書などの本を読む。読まない人は 2~3 冊未満。読む人は 10 冊以上と分かれています。簡単な、読書記録をつける。
- ・ 新聞や雑誌などの記事に、講義とかかわりのある内容やキーワードを探し、社会的な側面からの知識を増やすことを習慣づける。
- ・ 本を読みっぱなしではなく、自分でノートにまとめ、数理的な専門書なら、途中の式の計算導出をきちんとやりながら読む。文系の書物でも、要点をまとめ整理するなどして、自分で体系付けていく。
- ・ ともかく本を読む。
- ・ 自分の生活の時間帯のどこでもいいので、大学で本を読む。場所は図書館でもいいし、生協でもよい。実際には近隣の喫茶店など、飲み物を飲んで時間をつぶせる場所があればいいのだが、名大には残念ながらそういう環境がない。インターネット喫茶はダメ。
- ・ どんな時間でも本を読む習慣をつけてください。本を読むのは、学生時代にしかできません。就職したら、ほとんど本を読む時間は無いと思ってください。
- ・ 本を多く読むこと。童話でも時代小説でも、どんな本でもよいから、楽しみながら読むこと。また同時に自分が勉強しようと思う分野の本も、内容が分からなくても読もうと努力してみてください。
- ・ 少しの時間でも使うように、本をいつも持ち歩く。本には金を惜しまないで購入する。本には著者の人生が詰まっている。
- ・ 乱読でよいから興味がありそうな本をたくさん読んでみる。自分もこんな人ようになってみた

いとか同じ様なことをしてみたいとかが見つかるかもしれません。

- ・ ハウツー本ではなく文学書をたくさん読む。内容を無条件で受け入れるのではなく、現時点の自分のレベルではどう思うかをノートに書いておく。再度読み直したときの感想と比較すると、自分の成長・進歩を実感できる。
- ・ いろんな本を読み漁る。著名な専門書をとにかく買う。最初は飾ってあっても良い。ちょっと見るだけでも良い。ときどき見るだけでも意味がある。
- ・ 興味を引かれたものについては、その分野のいろんな本を概略でも良いから、たくさん読む。重要だと思った本、自分にあった本・読み進められそうな本を探す。
- ・ 自分にあった本・読み進められそうな本が見つかったら、その本については最後まで徹底的に読み倒す。
- ・ 専門分野の一般書をたくさん読む。新書本など。
- ・ 自分の興味のあることや、趣味と関連しそうな学問分野の本を読んだり、教員をたずねてみる。
- ・ How-to ものの本は絶対に読まないこと。個々の人間の環境は、全て別々です。このような本は、できるだけ一般的な状況を想定しています。あなたは、他の人と同じでしょうか？他人の書いた他人の問題とそれに対する他人のための対処法を、自分に置き換えて有効だと信じるのは極めて危険です。これは、医学の知識が無いものが、適当なマニュアルを見て手術をするのと同じです。他方、人間には一定の範囲であれば、治癒力、免疫力が備わっています。もう少し、自分の能力を信じて、自分自身で考えて答えを見つけてください。
- ・ 専門にとらわれず、まず本をたくさん読んでみる。本を読み始めたら、面白いかどうか、難しいかどうかにかかわらず、とにかく最後まで読んでみる。そのうちに、乱読して幅広く読む本と、内容を吟味しながら徹底的に読む本を判断できるようになると思う。
- ・ 確かに、大学は与えられたテーマで、学習するところではありません。先生が講義で、ああでもない、こうでもないと言っていると、腹が立つ人もいるでしょう。正解が1つしかないと思ってきた人にとっては、特にそうではないでしょうか。いろんな人のいろんな見方があって、その上で、自分はどうか考えるかが、大事です。自分の感性や直観を大事にして、それにふさわしい本を、本屋に行って、さがしてみてください。

積極的な学習姿勢をとる

- ・ 受動的でなく、能動的に行うこと。受け身では駄目。
- ・ 受け身的な学習ではなく、講義内容をヒントに自分で「真理を探究」する方法を見つける。
- ・ とにかくいろいろとトライアルするとよい。良さそうであれば続けること。うまくいかないようであれば再度考えてトライアルせよ。失敗を繰り返している中で自分なりのやり方が見つかる。
- ・ 自主的に様々なことに取り組む姿勢をもつようにこころがける。
- ・ 小生の経験からは、教員の言っていることは、その場ではまず理解できないことが多いと思います。ここからが、大学レベルの学問のおもしろさがあるわけで、その後は理解できるまで徹底的に自分で本を読んで考えるわけです。小生の経験では、同じ問題を1週間考えることができたのは、大学生の時だけです。大学院では遅いと思います。
- ・ 論文の結論を覚えるのではなく、その前提や導出の過程に目を向けるように努める。

- ・ 万遍なく勉強しなくてもよい。好きなことだけ熱心に勉強すればよい。
- ・ 色んな人が色んな考え方をもっていることを知るのが、大学での勉強ですから、ただ1つの正解がないからといって、いらいらせずに、どれだけたくさんの正解があるかを楽しんでください。Anything goes という科学方法論もあります。
- ・ 様々な事柄を細かい点にとらわれず、まずは大雑把にとらえたらどうなるか考える癖をつける。
- ・ 大学の勉強は、知識だけを身につけるのではなく、学問を理解することがメインであることを自覚する。試験をパスするだけの単なる知識の詰め込みだけでは、研究を進めることができない。理解するためには、根本にある原理を十分理解することから始まり、そのためには、その周辺の全ての学問が必要となる。例えば、化学でも物理も数学も必要なのです。
- ・ 数学は定義がすべての始まりである。定義を理解していなければ何も出来ないことを知る。
- ・ 単位をとったり、試験で良い点数をとったりではなく、自分で理解できるまで考えること。そうでなければ役に立たない。
- ・ 一科目の中での勉強に留めず、実は複数の科目間で関連する内容があることに注意する。
- ・ 大学は勉強するところではない！と言い切ったところから、大学での本当の勉強が始まる。例えばある工学部の先生の話。最近の学生は頭がよくなっちゃって、全然、おもしろくないし、バカかと思うときがある。なぜか。だって、実験やらせれば、ものすごく一生懸命やって、何日も徹夜してやるんだけど、お前らアホかといいたくなるね。一生懸命やる理由がふるってるんだから。教科書と同じ値にならない。そんなもん、なるわけないだろ、概算値なんだから。自分の実験のやり方が正しいと自信があるなら、教科書が間違っているというくらいの自己主張をしてみろ！といいたくなるね。これが大学の勉強。でも、単に無知な自己主張は頑固なだけだからね。
- ・ 高校時代の成功と失敗を忘れること。
- ・ 基礎知識なくして新しい創造はない。強いて学力を身につける努力をせぬ者は人生の脇役にまわる。
- ・ 講義はきっかけに過ぎない。勉強は自分で組み立てていくのが基本と心得よ。
- ・ 全部理解して暗記するのではなく、その都度、講義で感動できる点を見出して、記憶にとどめておくようにする。

授業時間外の学習を積極的に行う

- ・ ちょっとがんばって「予習」を試してみる。周辺のことなどインターネットで結構調べられるから、ちょっと質問などしてみる。教員が知らないようなことを聞いて困らせるような質問がベスト。
- ・ どうも勉強が分からない人。毎日少しずつ演習をやる。本当に分からないことは人に聞く。
- ・ シラバスを読んで最低限、指定教科書をざっと見ておく。
- ・ 授業の予習・復習をきちんとやる。
- ・ とにかく、興味のある科目につき、積極的に自分自身で勉強すること。
- ・ 宿題に関わってくることについての情報整理は、授業の間にできるだけのことを処理するように心がけましょう。「あとでなんとかしよう」と思わないことです。授業の際には理解したこと、了解したことは、指数関数的に時間を追って忘れてしまいます。授業の際、直後、その日のうちに、取り掛かりまでの整理・作業をしてしまうことです。一旦導入までやっしまえるかどうか

大切です。

- ・ 習慣をつけることが大切だから、毎日 30 分でも机に向かう。
- ・ 毎日机に向かい、勉強する習慣をつける。新聞や本をよく読む。
- ・ 本を読みっぱなしではなく、自分でノートにまとめ、数理的な専門書なら、途中の式の計算導出をきちんとやりながら読む。文系の書物でも、要点をまとめ整理するなどして、自分で体系付けていく。
- ・ もしテキストがある場合は、できれば予習して、疑問点をノート(あるいはルーズリーフや情報カード)にメモしておく。講義に出たときに別のノート(私の場合はルーズリーフを使っていた)に教員のいった重要な事柄をメモし、即座に疑問が浮かんだときには自分のコメントを書いておく。講義中に、それについて質問できればして、できない場合は、その疑問点についてインターネットなどを活用して調べる。ノートには矢印を使いながらリンクをつけて事柄の関連を見えるようにする。ノートの内部やインターネットにおけるリンクをいろいろたどってみることで学問がどんな感じで結びついているのかのイメージをつくる。自分がやっていることが少しでも見えていないと、不安だし、やる気も起きないものね。
- ・ 教科書をきちんと読むこと。手を動かして勉強すること。
- ・ 自分で教科書を読み下す必要が出てきますが、頭から本の内容を完全に理解しようとすると挫折します。ですので、ある程度斜め読みからはじめて、反復して教科書全体を読むと良いのではないのでしょうか？
- ・ 数学の場合、教科書が指定されていれば、必ずそれを通読してみる。ただし、ただ目で文字を追うのではなく、必ず要点のメモ取りながら読む。また、書かれていることを鵜呑みにしないで、なぜそうなるかを常に意識しながら読む。紙面の関係で省略されている部分を自分で補ってみる。計算や証明などの導出が書かれている場合は、自分で実際に手を動かして導出してみる。数学は意外と体で覚える部分がある。
- ・ 重要教科の問題集を購入して、自分で学習する。
- ・ 新しい語学は、夏休み中に一人で文法を終えてしまうこと。そうすれば、夏休み後の授業が楽になるし、楽しくなります。

授業を能動的に受ける

- ・ 授業を集中して聴くことが一番効率の良い勉強法なので、授業をサボらないで、できるだけ前で聴く。
- ・ 講義に出席して、とにかくノートをとる。質問を恥ずかしがらない。
- ・ 間違ってもいいから、とにかく意識的に発言する癖をつけよう。これが 4 年間で身につけば、卒業時には絶対トクした気分になるはず。
- ・ 授業に自分で出るようにする。特に1限の授業に出るようにすると、自然と朝型になります。
- ・ わからないことは講義中でも遠慮なく質問しましょう。前に座ったほうが聞きやすいです。
- ・ 授業中のノート取りはメモをとる程度に限定し、授業内で完全に理解することを心がける。
- ・ 大学の先生の講義は高校と異なり、基本的に不親切です。逆に教員は学生が何がわかっていないかを把握していません。理系での話かもしれませんが、大学での学習の難しさは、まず自分が理解できていないこと・誤解していることが何なのかを自らがわからないとその先に進めないということです。自分がわからないということを隠さないことです。教員やクラスメートに

それを明らかにできるかどうか大切です。それができない人は、自分の考え方や講義や教科書の説明との矛盾を早く見つけるトレーニングをすることが大切です。

- ・ 必ず授業に出席し、勉学を通じて友人を作る機会を探す。
- ・ 大学に入って、自分が将来やりたいことが分からないのは、ごく普通のことだと思います。この不安を解決するために、まず、講義をしっかりこなすことから始めるのは有効な方法だと思います。講義では何を問題として、何が分かったのかを、他のテーマとのつながりも視野に入れながら自分の言葉で再構成します。これには、相当の辛抱強さが要求されます。これが十分にできる人は、大人（たとえば教員）でも滅多にいないと思います。しかし、こうしたトレーニングをある程度続けると、自分が何をやりたいのかが自然に見えるだけの人格の強さは身につきます。
- ・ 高校の数学の教科書は読めばすぐわかったのに、大学の教科書は読んでもわからない！？という人に！！→読んだだけでわかる人はよほど優れた人です。ちなみに私は、鉛筆を持って式を追ったり計算をしないと頭の中に具体的イメージができません。講義の途中で教員が演習問題を出しても、ノートも筆記用具も使わない人はいつまでたっても理解への突破口はないと思います。講義を聴いてもわからないから期末試験前にやろうとあきらめる癖がつくと危険信号です。皆さん、それはわかっているんでしょうけどね！？
- ・ 自分で課題を見つけられず、どうしても与えられた試験がないとヤル気がおきないという人は、いつそのこと色々な資格試験に挑戦してみたら。将来役に立つものもあるかもしれない。福祉住環境コーディネーターとか放射線取扱主任者とか。

クリティカル・シンキングを行う

- ・ 先生を信用しないこと。自分で学ぶこと。
- ・ 様々なことに対する批判精神のようなものを養う。
- ・ 教員の言うこと、本に書かれていることを疑う癖をつける。（実際、間違いも多い。）
- ・ 自分自身の信念や常識と思っていることを含めて、すべての事柄は疑いうる。
- ・ 教員の言っていることに常に批判的な精神を持って、授業の内容のあらさがしをする。
- ・ 常に疑問をもつ→持ったら、自問自答してみる。
- ・ 疑問詞をHowからWhyに変える。如何に単位を取るか、良い成績を取るかではなく、幼少期に帰って、どうして、どうして、という目で社会なり自然を見る。
- ・ 自分自身で理解できない事柄については、「安易な妥協」や「非論理的な説明で納得した振り」をしてやり過ぎないようにしましょう。妥協は思考の停止を意味します。
- ・ まず「なぜ」の質問からはいる。でも「なぜ」はそこで止まってしまうので、同じ質問を「どうやって」にかえてみる。Why から How へ！
- ・ 「何が問題なのかが分からない」のは、自分だけではありません。最初は皆同じです。自分の解きたい問題を見つけることが、大学での勉強です。そのために本を読んだり、友達と話したりすることが大切です。「論理の説明」といっても、「こうだからこう」という理由を述べるだけです。自分独自のものの見方が必要です。先生や友達、先輩がどんな風に、理屈をつけているか、自分なりに関心をもてば、いいと思います。人間の論理は、けちなものです。特に、人文科学、社会科学では、どんな偉い先生でも、ほとんど論理は破綻しています。「あら捜し」してみるのも面白いかもしれません。あるいは、逆にある研究者の意見が全部正しいと信じて、自

分で理由付けをしてみるのも、1つでしょう。

インターネットの活用

- ・ インターネットで分からない用語を調べる。世間には世話好きで、親切な人が多いことを知ることができる。ただし、書いてあることの真偽は不明であることをいつも念頭におく。参考文献で確認する。
- ・ インターネットを活用する。
- ・ パソコンに親しみ、勉強したことをどんどん打ち込んでおく。
- ・ 自分自身の意見(教員や友人の意見とは異なるオリジナルな意見)を自分自身の言葉で披瀝できるように日頃から心がける。披瀝は話し言葉だけでなく書き言葉でもできなければならない。自分の関心のある問題について、メーリングリスト、電子掲示板、ブログを開設し、自分が中心となって責任をもって運営することを勧めたい。
- ・ インターネット上の blog サイトに「大学生活日記」を毎日つけ、自分が学んだことを何でも書くようにする。例:<http://sugiura5.gsid.nagoya-u.ac.jp/mt/sakaue/>
- ・ 講義内容と一致した教科書があるとは限らないので、図書館で関連する本を探してみたり、インターネットで検索してみる。どこにどのような情報があるのかを知ることが重要です。
- ・ 授業等で興味を覚えた話に関する「本」を図書館で探してみる。さらにインターネットでも探してみる。さらに詳しく教員に尋ねてみる。
- ・ 自分の得意分野あるいは関心ある分野についてインターネットで情報検索する。この情報検索とは、非常に広い範囲になる。大学、企業、本、などなどです。

得意分野を見つける

- ・ おもしろそうと思ったことに取り組んでみる(先達をみつけて相談するのも重要)。
- ・ 得意な分野は、それがどんなことでも「とことん」伸ばす(芸は身を助ける)。
- ・ 自分の得意分野をまず徹底的に伸ばすことを考えよう。そこで自信を持てるものを持つことが、その先の目標を定めるきっかけを作るでしょう。
- ・ 自分の興味を惹くものを見つける。
- ・ おもしろそうなテーマを探す。
- ・ アンテナを広く広げておもしろそうだと思うことを増やす。
- ・ 高校時代に習った科目も実はさらに細分化されていて、それぞれが深く研究されており、教養書もたくさん出版されています(例えば、理科－物理－力学(電磁気学、量子力学、統計力学など))。大学に入って先輩から教えてもらった分野、こんな分野もあるのかと興味を持った分野、高校時代から興味を持っていた科目などについて、本屋で気に入ったもの、または先輩や先生から教えてもらった本で興味を深めてみませんか。一人でも友達と一緒にでも、まずは、気楽に始めればよいでしょう。
- ・ 目先の効率にとらわれず、大学で与えられた課題や自分が好きでやろうとしたことにはとにかく全力投球しよう。たとえ、そのときは上手いかなかったにしても、長い目で見れば絶対に後の人生に生きてくるはず。いきなり大きな目標を達成しようとするよりも、さまざまなことを試行錯誤しながらやって多くの経験をつんでおいた方が最終的には自分の希望がかなうはずです。短絡的にならないことが重要でしょう。

興味のもてる科目を選ぶ

- ・ 自分自身がもっとも興味のある教科を集中して学ぶ。集中力を身につける。全体を学習する必要はないと思います。
- ・ 何か全科目の中で最も関心のある 1～2 科目を選択する。その科目の教科書や問題集をとことん読み、学習し、自信をもつ。そうすることによって能動的学習を身につける。
- ・ 総合大学なんだから、専門外の授業を取ると楽しい。大学らしい。
- ・ 自分で興味のもてる講義をとる。
- ・ 専門とは関係のない授業をのぞいてみる。単位が自分にとって必要でない異分野の授業に数回でもでてみると視野が広がる。
- ・ 焦らずに、いろんな講義に幅広く出てみる。単位取得が認められる範囲で他学部の講義を取ることもお勧めします。最初から自分の方向を決め付けるよりも、いろんなことに興味を持ってみるの方が良いこともあると思います。その過程で自分にピンと来るものが見つかるだろうし、それ以外の学んだことも決して無駄にはなりません。
- ・ 興味のある科目を見つけること。尊敬できる教員を見つけること。

自分の居場所を見つける

- ・ 自分の「定席」を見つけて下さい。空き時間は必ずそこに立ち寄って勉強すると良いですよ。
- ・ 大学に自分の居場所を作ろう。図書館、学部図書室、ラウンジコーナー、喫茶室、生協食堂などどこでもいい。そして、図書館なら「いつものイス」を決めてしまおう。他の人が使用しているときがあれば、その日はその周辺でがまんすればいい。とにかく、そこで一人になるのもよし、友だちとなにかやるのもよし、自分にとって居心地のいい場所を見つけるといいと思う。
- ・ 教室と食堂以外に、大学の中で自分の居場所を見つけることができたのがよかったですね。○×事務室と称する部屋で他学科の学生としゃべったり、小さな学科図書室で勉強したり。授業を聴いて帰るだけの高校時代とは自ずと違う生活になっていった気がします。

新聞やテレビを活用する

- ・ 毎朝、日経新聞を読んで、分からないことや興味を持ったことを(専門書を読むなどして)調べる。あるいは人に尋ねる。
- ・ 毎日、新聞を読み、世の中の動きと自分の研究分野との関連について考えれば、勉強意欲が湧く可能性が高い。
- ・ 文学部では語学が大切です。学校の語学の授業以外に、NHK のラジオ、テレビの講座を活用してください。その時間帯に合わせれば、生活が規則的になります。

4. 学習の進み具合をふりかえる

- ・ 学習したということが目に見えるような工夫をする。例えば、本を読んだ後に、その本で興味深かった箇所などを抜き書きしたりしてカード化したりすると、そのカードが増えていくのは、結構楽しいもの。こうして、自分のやったことの成果のようなものを目の当たりにすると、励み

になります。読んでも忘れちゃうと結構虚しいものね。つまり、学習成果が見えるようにすることが習慣を作るんじゃないかな。

- ・ 興味を持った事柄につき、自分の納得いくまで深く理解する習慣をつけるよう努力する。理解できない事柄については、教科書、関連する書物やホームページなどを徹底的に調べる。
- ・ 一日に 10 分間その日を振り返る時間を作る。

5. 学習に要する時間を大切にする

生活改善

- ・ 今までとかく両親や先生に依存しがちであった自分から脱却し、将来一人で生活できるようこの時期を有効に使うようにする。そのためには毎日の生活を自己管理し、規則正しく生活する。特に今の学生に顕著なのは、睡眠不足である。
- ・ 朝はちゃんと(多少遅くても)起きて講義、終わったら部活動、夜は趣味、しかし夜更かししない決めてだらだらと過ごさない。
- ・ 朝のうちに新聞を読む。そして 5 分間考える。
- ・ 毎日、体を動かす習慣をつける。ストレッチでも散歩でもジョギングでもよい。
- ・ 朝起きられない人は多いと思います。私もそうでしたし、苦労しました。一人暮らしの人は、友達と協定を結ぶのがよいでしょう。相手が自宅生であると、なおよいでしょう。
- ・ 学習に限らず、メリハリのきいた生活をする。学習のための時間を設定すること。必要なら、場所も設定すること。
- ・ 早寝早起き。これが基本です。そのためテレビを下宿から無くし、もし静か過ぎるなら、ラジオに切り替えましょう。
- ・ 朝食をきちんと取れ。
- ・ 朝ご飯を食べる。
- ・ 小さなことでよいから、楽しいことをいくつか見つけておく。早寝早起きを心掛ける。日曜日もしリズムを崩さない。リズムを崩したらくよくよしないで、楽しいことを行って気楽に立て直す。
- ・ 体も鍛えること。
- ・ 毎日決まった時間に起床する。
- ・ なんとなく元気の出ない人。栄養が悪い場合がある。ビタミン C をできるだけ取るようにする。
- ・ アルバイトを最低限にする。
- ・ タバコをすわない。
- ・ 地元出身でも親元から離れて下宿するようにする。1年生の最初から下宿するのが望ましい。
- ・ 部活やお稽古、その他趣味を持ち、これを継続する。継続は力なり。健康にもよい。また場合により、芸は身を助ける。
- ・ 睡眠時間を優先的に確保する。目覚ましで嫌々起きた挙げ句、授業中に机に突っ伏して寝る…などということがないようにする。睡眠は布団の中の方がずっと気持ちよいことに気付くべき。
- ・ アルバイトは週15時間以内にとどめてください。私の実感からもそう言えますし、昔いたアメリカの大学ではそのようなガイドラインがありました。

- ・ 将来どうしても同時にいくつかのことをやらねばならず時間がないという状況は必ず発生する。そのような訓練のためにも、体育会・文化サークルに入部して活動することを勧める。わざと時間がない状況に追い込んだ方が勉強も集中して良い成績や物事の進め方のノウハウを得られることが多い。また部活を通してタテヨコの人間関係や体力、実践的なマネジメント能力が身につけられる。名大では水泳部がお勧めだ。温水プールで1年中泳げ、卒業後もOBの大きな顔をして無料でいつでも泳げる。
- ・ 丈夫な手帳を用意しておき、予定を記入して常にそれをチェックしながら行動する。
- ・ 1日、週、月でどのようなスケジュールで仕事をこなすか(学習するか)計画を立てる。
- ・ 自分自身の生涯設計、キャンパスライフプランを立て、時間に流されないようにする。
- ・ 勉強したことが自分に見える工夫をする。一例として、24 スケジュール表に何時から何時まで勉強をしたかの時間を色鉛筆で塗りつぶす。大学と自宅を色分けする。
- ・ 多少金額が張っても気に入った文具類を身の回りに整える。清潔な身なりをする。人の前に出るときは元気な顔で出られるように、鏡を部屋に置き、外出の際は自分の姿、顔色を眺める。疲れた顔をしているときは十分休養する。

学習時間の管理

- ・ 午前でも午後でも、たとえ短くても構わないので、自分が一番集中力の高まる時間帯がいつなのかを把握する。そして、それがわかったら、毎日その時間帯を、本を読んだり、書き物をしたりといった具体的な学習活動にあてる。ただし、食事の時間、お風呂の時間、睡眠時間にはくい込まないように。これはこれでとても大事ですから。
- ・ 履修する科目数を最小限にし、空き時間をできるだけ作り、自習する。
- ・ 講義で出されたレポート課題に真剣に取り組み、プラスαの内容まで調べて理解する。
- ・ 勉強時間帯を決めておく。
- ・ 語学の勉強などを、毎朝決まった時間にやる。
- ・ さまざまな急な用事の入らない早朝に学習時間を確保する習慣をつける。
- ・ 1年生と2年生の間には、あまりしゃにむに勉強せず、できるだけ無駄な時間をすごすようにして、受験勉強の継続を断ち切る。(これは冗談ではありません。)
- ・ 生活、時間の使い方にメリハリをつける。つまり、勉強時間中は極力集中する。勉強以外についても、どうしてもやりたいことは時間を見つけて全部やる。
- ・ 部活が忙しくて勉強する時間がないのなら部活を止めて下さい。夜型は強制的に直すしかありません。他に方法がありません。(夜型を貫いて一生生きていける職業は限られています。)

授業に出る

- ・ どれかひとつだけでもいいので、100%出席する講義を作ること。
- ・ 大学では遅刻したりサボったりしても誰も注意してくれないので、授業には必ず遅れないように出席する。一度サボりだすと癖になる。
- ・ 授業をサボるのは絶対にやめましょう。聞き逃した1時間の講義を自分で学習するのは10倍の労力が要ります。事実上不可能。
- ・ 小生の経験からは、講義に出席して講義を聞いてみることにつぎと存じます。講義はおそらくつまらないと思いますが、その内容を理解しようと努力することからすべてが始まると思いま

す。

- ・ 高校では枠の中で授業がされていたが、大学にはそれがない。講義に出ること。そしてとにかく何でも質問する。

日記をつける

- ・ 日記をつけると同時に、毎日気になることを書いて、消し込みをする。
- ・ 日記をつける。

6. 意欲的な目標に挑戦する

将来の目標を立てる

- ・ 大きな人生の目標をたてること。
- ・ 成長しない人がいないように、変化しない目標もないのですから、些細なことでも興味を持ったら、そのことを当座の目標にしてみましょう。
- ・ 入学時の動機が明確かどうかにかかわらず、もう一度、自分の人生の目標を再確認する。できるだけ高い志を持つこと。そうすると、おのずとやるべきことが明確になる。
- ・ 漠然とでもよいので、夢を見つけること。新聞をよく読むこと。
- ・ 自分が将来何になりたいのか、何をやりたいのかよく考える。
- ・ 難しいが、人生、どう生きたいかを考える。
- ・ 自分の持ち味や長所・短所を考えつつ、やりたいことを見つけ、これを進めることを考え、行う。
- ・ 他人に笑われてもかまわないので、夢を追ってみると良いのではないのでしょうか？すぐに実現不可能なものほど、自然と目標になってくれるのでは。
- ・ 出来るだけ早く「自分は将来何を社会でしたいのか」というような目的意識をもつことである。自分が好きな分野は自然に学ぶことができ、その能力も育まれるからである。
- ・ 卒業後、あるいは10年後の自分について紙に書いてみる。
- ・ 自分の関心のある分野がどういうものか、将来性などを自分でリサーチする。
- ・ 将来の目標を設計し、大学での学習がそれにどのように貢献するのかを具体化し、それに生活の重みをおくようにする。
- ・ 自分が学習(勉強)で身を立てるのか、他のことで身を立てるのか決める。
- ・ 将来についての目標を持ちながら、現在やることを計画的に行う。
- ・ 結局は自分が将来何をやりたいのか目標設定が大切で、それが定まればどのような勉強が大切か自ずから明らかになる。
- ・ 目標を明らかにする。あまり大きな目標をたてずに達成可能な目標をたて、確実に実行する。
- ・ 日本では大学で学ぶということで多くの費用(学費・生活費など)を支払っているはずですが。また、4年間という貴重な時間も費やすことになると思います。個人的にはこれはある意味で自分自身に対する投資だと思いますので、このことを学生自身が良く考えて大学生活をと思えば、何かしらの目標設定ができると思います。勉学でもクラブ活動でも何でも良いと思います。大学ならではの学べることを見つけだし、それを身につけて社会に羽ばたいて頂きたいと思い

ます。

- ・ 私は公務員試験(技術系・土木)を勉強するために、大学の三年生から四年生にかけて学生控え室で夕方から夜まで勉強しました。そういう目標ができたことで、これに必要な専門分野と教養科目の弱点を自分に対して分析できて、得意分野を増やしていくことができました。今は公務員にはなっていませんが、そういう動機付けがあると良いかもしれません。
- ・ まず、自分の好きなこと、やりたいことを紙に書き上げる。そのなかで、いまの力でやれること、いまは無理でも力をつければいずれ実現できそうなことを選び分ける。後者については、どのような力をつければ実現できるのか、先輩や教師、親、クラスメートなどにたずねてみる。同じことがらの実現を目指して活動している人を発見できればさらによし。具体的な目標設定と、そこに至る具体的な道のり(のモデル)を模索し発見することは、表裏一体の行為だと思います。

学習の目標を立てる

- ・ 学習することを第1の目的とすること。
- ・ 学習に目標を置くこと。資格試験と関連づけるなど。
- ・ 今月は〇〇を全部マスターするぞ、とか目標をはっきりさせて取り組む。
- ・ 勉強が必要だと思うことである。高校の時より高度な知識を身に付けることが求められているので、高校の時よりもより多くの勉強が必要だということをきっちり認識することが重要だ。
- ・ 大学の勉強は高校までのように全部分かるものでないので、頑張らず長続きする勉強をする。
- ・ 小生の経験からは、大学の数学、物理と出会うことができたことは、一生の宝と考えています。量子力学や相対論はなかなか理解できず、これを理解するために、数学、物理の本をわかるまで読み、徹底的に考えました。そして、ある程度わかったときの喜びは忘れられない体験です。この体験から、まず、自分にあった学問に出会えるかどうかのポイントではないでしょうか。
- ・ 食欲に世界を知りたいと思うこと。科学の最先端がかなり先にあるために目標をよく見失いがちになる。しかし、知識欲があれば、少しずつでも勉強がステップアップするごとに世界が開けるのを感じるはずだ。そこに喜びを見出すこと。
- ・ 社会の諸現実にも勇気をもって向き合う。2年生後半から3年生になったら何でもいいから片っ端から手をつけて勉強してみる。どうせなにが得意か不得意なのかは客観的に評価できないので、たまたま当たったものにうちこんでみる。要は焦らないことである。
- ・ 定期試験の勉強のほかにも、自分のための勉強をしよう。
- ・ 大学に目的があって入学した(学びたいものが明確に決まっている)諸君へ； 高校と異なり、大学では知識のバランスは最後でよろしい。ある分野のスペシャリストを目指す勉強をすべきです。まず自分の興味のある科目に関して、とことん勉強すること。そうすれば、自分が必要な科目の理解には、他のどのような知識が必要かが判ります。その上で、必要な周辺分野にも力を入れると良いでしょう。人間、必要性が判ったときの勉強ほど身に付くものではありません。また、あることをとことん知ろうとすれば、自ずと、どの範囲まで自分を広げる必要があるかも判ります。
- ・ 自分が何をやりたいか判らない諸君へ；大学での勉強は、高校の時と異なり得点という「目的」は存在しません。知ること、判ることが目的です。未だに自分の進むべき目的が決まって

いない諸君(それ自身は悪いことではありません)は、まず何に自分の興味が向いても良いように、広い分野の科目を勉強する必要があります。そこでは各科目の細部にこだわる必要はありません。むしろ自分が知りたい、自分が将来取り組みたいものは何かを捜すための勉強となります。初めは苦痛かもしれませんが、本気で自分探しをするのであれば、超えられるはずです。

自己認識を深める

- ・ 人の意見に引きずられないようにする。即答は避け、自分で考え評価して(1呼吸おいて)答えるようにする。評価できるだけの資質を養うことが大学生活だと思う。
- ・ 自分をあまり偉い人間だと思わない、人間にできることなんて大してないのだと自覚すること。
- ・ 自分に正直に考え抜くしかない。
- ・ 結局は、自分一人で人生を切り開いていかなければならないということを自覚する。
- ・ これは、自分で真摯に考える以外、親、友人、先輩、さらには教員すら、全く役に立たないことを肝に銘じるべきです。他人に相談して「答え」が得られるという甘えを捨て去って、自分一人で考えてください。それは、自分に対する自分の責任です。他方、教員を含めた他人は様々な「知識」を与えてくれるのは事実です。そのような知識は自分での判断に、非常に役立ちます。他の人が何をおもしろいと思い、それがどうしておもしろいと思うのか、これらを問うときに返ってくる他人の答えは、決して自分の答えには成り得ません。しかし、そうした答えの中に自分が考えるための材料があるかどうか捜してみるのは良いことです。
- ・ 自分に固有の価値観を明確にする。普段から他人の物差しで判断しないよう心がける。
- ・ 自己管理の一言です。自分自身に厳しくする癖をつけましょう。
- ・ 全て自己責任であるという意識を持ちましょう。
- ・ いったん決心したらあまり後悔しない方がよいが、おそらくそうも行かないだろう。後悔しつつまたまきなおしたらよい。
- ・ 自分の適性を自分で知る。そのためにも、本を読むなり、いろいろ勉強しなければならない。

焦らないほうがよい

- ・ 大学は学習するところなんだろうか。しかも、学習を習慣づけなければならないところなんだろうか。こんなことを言っているのは古い大学論を振りかざすような堅物と思われるだろうか。でも、やっと本当の青年期を迎えることができる学生の君たちに、学習の習慣づけなんてしたくない、というのが教員としての思い。大学では、大学にいる必要もないくらい、いろんな出会いがあるはず。大学は、人との出会いだけではなくて、知的な出会いもあったり、恋に落ちたり、失恋したり、挫折したりを、それこそいくらやったって何ともない＝つまり、社会的な代償を払う必要のない場所と時代なのだから、その出会いから生まれる疑問や割り切れなさ、不思議な感じを、自分でとことん突き詰めていってみてほしい。そこから、自分が読むべき本や出会うべき人が、それこそ必然的に自分の前に現れるはず。回り道をしているようで、それが一番はやいということは、決して人生の達人ではない大学の先生たちが証明済みだ。
- ・ 振り返ってみて、名大に入学するために受験勉強がんばったな、と思えるのなら、1・2年の時は精一杯遊んで、高校での学習法はすべてリセットすべし。3年次以降は、配属された研究室にいつもいるようにし、研究室が生活の中心になるようにします。自宅で勉強せず、授業の

予習などもなるべく研究室で先輩に教えてもらったり議論したりして進めていくようにします。

- ・ 二十歳前後で人生の目標が設定されなくとも何の不思議もないので、焦らずにそのうち見つかるさとのんびり構えること。
- ・ 目標設定など簡単にできることではない。みんな苦労して必死に考えて目標に近づいている。必死に考える時期があつてよい。失敗もあつてよい。その中から自分らしさが分かってくる。
- ・ 自分の一生をそんなに簡単に決められる人はいません。偶然の出会いや、出来事、手にした本などが後になって重要だとわかるのです。好奇心を持ち続けて、何にでも首をつっこんでみましょう。
- ・ 自分の目標っていったい何だろうね。少なくとも教育学や心理学という人間をそのまま扱う学問を専攻しているものからみると、そんなものは結構いい加減なもので、それよりも、もっと自分の存在の根源に関わる経験をするの方が大事のように思う。人を好きになって、狂おしいほどの自分を自分の中に抱え込んでみる。その自分をもう一人の自分が冷静になって観察していることを感じ取ってみる。それでも、その観察者である自分には、狂おしい自分の本当の狂おしさがわからないこと。それこそが、言い換えれば、言語化できない、つまり他人と交換可能ではない部分の自分こそが本当の自分であることをしっかり感じ取ること、このことが、これから自分として生きていくために、もっとも必要なことのように思う。こうした自分がないあなたは、結局、自分の目標を見失ってしまう。
- ・ まずは高校までのお仕着せの勉強から解放されたことを大いに喜んでください。そして、よーし、好きなことを思いっきりやるぞ、という気持ちを持てるといいですね。

積極的に授業に出る

- ・ くだらないと思う勉強はそこそこにして、面白いと思う講義だけに集中する。
- ・ つまらない(と思う)講義もがまんして寝ずに聴きとおしましょう。収穫は必ずあるものです。(最悪でも、精神が鍛えられ、集中力が身につきます。)
- ・ 単位取得のためではなく、人生をより豊かにするために、真剣な教養科目をとろう。理系の人であれば文系の教養科目、文系の人であれば理系の教養科目を真面目に学んでみたらどうでしょうか。
- ・ 一般教養科目も、自分の将来にとってきっと重要になることを認識することが大切だと考える。専門知識のみが重要ではなく、それらの知識を別の観点から考察できるようにするためにあることを意識する。
- ・ 単位を必要とする授業(つまり目の前にゴールがある授業)で1週間すべてを埋めないこと。興味のある授業で単位を必要としない授業(ゴールはずっと先)を必ず幾つかのぞいてみる。
- ・ 聞いただけで分かる授業が良いとの風潮があります。しかし、そのような授業は、単に雑学を教えている授業か(たしかに、雑談は楽しい)、その人に考えることを求めている授業かも知れない。確かに、どのようなことでも、最低覚えなないといけないことはある(文字だって覚えなければこの文も読めない)が、「覚えるだけですむ」ことは、それ以上ではない。何を言っているか分からない授業は大きな問題ではあるが、分からないと感じても、すぐにあきらめないこと。そこで言っていることを理解しようとするれば、そして理解できれば(理解できたと思った時には)、皆さんの考える力は確実に伸びています。その難問を解決できるという保証がないものもたく

さんありますが、大学には教員がいて、考えることの助けになることもあるでしょう。知識を広げることとともに、考えることにも重きを置いてみましょう。

- ・ 目標は、最初からあるものではなく、自分でこれから見つけていくものです。何を学びたいのか、将来何をやりたいのかを、見つけるために、大学に入ってきたのですから、気にしないで毎日 positive に授業に出てください。

大学に入った意味を考える

- ・ 大学に入って何をしたいのか目的をもって入ってきてほしい。せっかくノーベル賞受賞者もでたすばらしい大学なんだから、一生懸命勉強したらどうなのかと思う。名大に行きたくても行けない学生も社会にはいっぱいいる。
- ・ 第1志望に入学できなかったら、このまま終わってたまるかと執念を燃やす(自分の経験談)。
- ・ せっかく名大にはいったのだから入れなかった人に申し訳ないから毎日 3-4 時間は勉強してもらいたい。私は以前ある地方大学に勤めていたが名大はとても恵まれている。ありがたいと学生は思っ勉強に励んでほしい。
- ・ 受験生として、名古屋大学の〇〇学部を目指して勉強していた頃の自分を思いだしてみる。その頃、自分は何を考えていたのだろうか？
- ・ 授業料の金額から講義の単価を割り出し、毎回の講義にこれだけのお金を払っているということ意識して講義に臨む。
- ・ 今日はいもう一生戻ってきません。20年後に振り返って大学生活を思い出し、「名古屋大学に行っていなかったら今の自分がない」と断言できるように大学では必死で勉強してください。

無理に目標設定しない

- ・ 最初から大上段に構えないで、少しずつ自分の進路を模索していけばいいと思います。人生は長いから。大切なのは、リラックスする心だと思います。
- ・ 正直言って、修士課程を出る頃でも、まだ文科系(文学や経済学)に未練がありました。
- ・ 自分の人生の目標が何かを決めるのは、ほんのちょっとしたきっかけであることが多い。そのためには、自分の可能性を信じて、あらゆることに関心を持つこと、チャンスがあれば何でも挑戦してみる、あきらめないこと、これらを心がけていれば、きっと、いつかは自分の目標が見えて来ると思う。ただし、人生はやり直しがいくらでも出来ると考えて、失敗を恐れてはいけません！
- ・ 最初から目標を設定しようと焦る必要はありません。自分がやりたいと思うことを掘り下げていけばよいのです。「広く浅く」という言い方がありますが、深く掘り下げることにより、広く物事を見ていく必要にかられることもあります。深く掘り下げながら、時に横穴を掘り、だんだん本当に自分のやりたいことに気づいていけばよいと思います。
- ・ 何が自分にとって一番適切な選択であるかは、けっきょく最後までわからないと思います。学習で大切なのは、謙虚になって、その時、その時に与えられたものをやりぬくことです。進路転換の必要がある時には、そのことは自ずから明らかになるはずです。
- ・ この大学へ入学した学生は、おおむね今まで一生懸命勉強をしてきたので、精神面で余裕がないように思われる。その余裕を持つためには、自分に課す課題をあまり高いところには置かず、少しずつ頑張ればよいと自分に言うことが大切だと思う。我々教員もあまり「頑張れ、頑

張れ！」と言わない方がよいと私は考える。

相談相手を作る

- ・ 他人の話を聞くこと。自分の目標を設定できないのは、自分の役割を発見できないからかもしれないので。
- ・ とにかく何をしたいかしつこく自分に問いかけ続ける。少し分かった気分になったら、そのために何を勉強したらいいか先輩や教員に質問してみる。その中から、あー、これなら自分に合ってるって感じるものがきっとある。コツは一人で閉じこもらないこと。

その他

- ・ 在所で主となれ。まずは現在の居場所できちんと存在しているかを目標にしてはいかがでしょうか。
- ・ 勉強の最終目的は、自分の幸せだけではなく、周囲の人や社会の幸せであることを意識すること。自分が自分以外の人や社会の役に立っているという意識ほど幸せをもたらすものはない。
- ・ 正直に言うと、学生時代に今の専門分野(経営学)に興味を持てませんでした。卒業前に、たまたま自分の指導教官が出された紀要論文を見て、これが経営学の一分野なら、自分もできるのではないかと思いました。ほとんどの学生は、そういうものをもたないのではないのでしょうか。だからこそ、就職して何年か経つと、もう一度大学で、勉強したくなるのではないのでしょうか。

7. 異なる考え方や背景を尊重する

異分野の人と語り合う

- ・ 異分野の人と自分のやりたいことを語り合う。自分と違った視点が見える。わかってもらえないこともあるが、それは自分がよくわかっていないことだということがわかる。


資料4 学生の学習参加度を高めるための学生・教員・大学の役割

日本高等教育学会第8回大会
2005年5月21日

学生の学習参加度を高めるための 学生・教員・大学の役割


「優れた授業実践のための7つの原則」の適用可能性に関する考察

名古屋大学高等教育研究センター
中井俊樹・中島英博・近田政博




発表の内容

- 研究の背景
- 研究の目的と方法
- 調査の結果
- 調査結果からの示唆

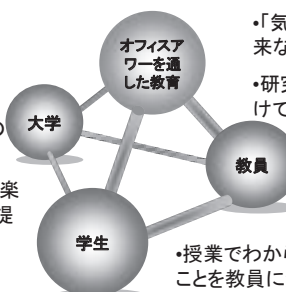


名古屋大学高等教育研究センターの 取り組み


- 大学の教育現場に役立つ研究開発
 - 教授法ハンドブック:『成長するティップス先生』など
 - シラバスシステム:『ゴーイングシラバス』
 - 学生の学習スキル:『スタディティップス試作版』
- 研究開発物の開発と普及の過程でわかったこと
 - 具体的で実践的な手法を現場は求めている
 - 教育改善を個々の教師の資質向上のみに依存するは限界がある
 - カリキュラム、制度、組織的サポート
 - 学生の主体的な取り組み



例えば: オフィスアワーに関わる実践手法


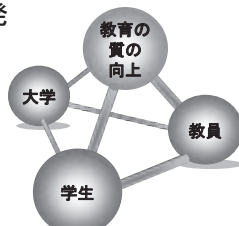


- オフィスアワーの制度化と促進
- 教員と学生が気楽に話せる場所の提供
- 「気楽に研究室に來なさい」と伝える
- 研究室のドアを開けておく
- 授業でわからないことを教員に質問しに行く




高等教育研究センターの次の構想

- 名古屋大学の現場に有効な学生・教員・大学のための指針とその実践手法の開発




学生・教員・大学のための指針とその 実践手法の開発に向けた第一歩

- アメリカで開発された『優れた授業実践のための7つの原則』(Chickering and Gamson, 1987)を参考にすることから始める



- 50万部以上の注文
- 全米の50%以上の大学のFDで活用された



7つの原則

1. 学生と教員が接する機会を増やす
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する



『7つの原則』の特徴

- それまでの教育学研究の成果をふまえている
- 学生の学習参加度を高めることに重点が置かれている
- 専門分野や授業形態を越えた原則を示している
- それぞれの原則に対応する具体的な実践手法をチェックリストで示している
- 学生・教員・大学の三者の役割を示している
- 教育学の専門用語の知識なしで利用できる



学生用の実践手法(表1)

- 学生と教員が接する機会を増やす
 - 一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会を作ろうとする
 - 自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする
 - 教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする
 - 教員と授業の内容に関する話を授業時間以外にする
 - 他の担当科目、専門領域など、教員のことを知る努力をする
 - 教員が関わっている研究会などの催しに参加する
 - 履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える



教員用の実践手法(表2)

- 学生と教員が接する機会を増やす
 - 将来の進路について学生にアドバイスをする
 - 学生が研究室に遊びにくる
 - 自分の考え方や過去の経験を学生に話す
 - 学生が主催する行事・勉強会などに参加する
 - 学生の課外活動・学外での活動に関する顧問を自発的に引き受ける
 - 授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える
 - 自分と異なる人種・文化背景の学生の支援に努力する



大学用の実践手法(表3)

- 学生支援サービス
 - 学生の様々な相談にカウンセリングサービスが対応する
 - 学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する
 - 学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う
 - 成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する
 - 学生課、学務課、学生自治会が協力・協同してオリエンテーションプログラムを実施する
 - 学生が他の学生のチューター、アドバイザー、リソース・パーソンとして活躍している



学生・教員・大学のための指針とその実践手法の開発に向けたプロセス

- アメリカ版『7つの原則』の実践手法の収集
- アメリカ版『7つの原則』のチェックリストによる名古屋大学の教育実践の現状分析調査
- アメリカ版『7つの原則』のチェックリストの名古屋大学への適応可能性の調査
- 名古屋大学で蓄積してきた授業実践事例、学習実践事例の収集と整理



- 名古屋大学の現場に有効な学生・教員・大学のための指針とその実践手法の抽出



発表の内容

- 研究の背景
- 研究の目的と方法
- 調査の結果
- 調査結果からの示唆

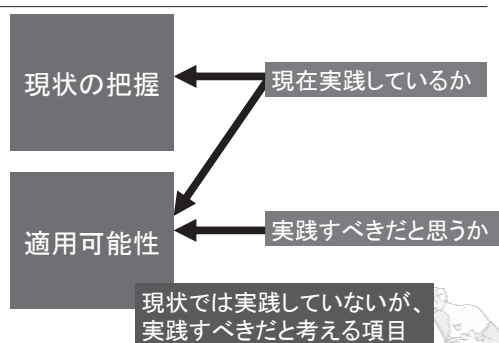


研究の目的と方法

- 目的: 学生の学習参加度を高めるための学生・教員・大学の役割を考察すること
 - アメリカ版『7つの原則』に沿って名古屋大学の教育実践の現状を明らかにする
 - アメリカ版『7つの原則』の名古屋大学への適用可能性を明らかにする



現状および適用可能性についての考え方



調査の方法

アメリカ版『7つの原則』の実践手法のリストにそった調査

調査	対象	方法	調査内容
学生の取り組みの現状	学生	調査票	49項目の実践手法を学生が実践しているか？
望ましい学生像	教員	調査票	49項目の実践手法を学生が実践すべきか？
教員の取り組みの現状	教員	調査票	70項目の実践手法を教員は実践しているか？
望ましい教員像	教員	調査票	70項目の実践手法を教員が実践すべきか？
大学の取り組みの現状	執行部	聞き取り	66項目の内容に大学が取り組んでいるか？
望ましい大学像	執行部	聞き取り	66項目の内容に大学が取り組むべきか？



調査の回答方法と集計

- 「あてはまる(2)」、「少しあてはまる(1)」、「あてはまらない(0)」、「答えられない(欠損値)」

小テスト・課題を課す	現在実践しているか 0	実践すべきだと思うか 2
------------	----------------	-----------------

- 各実践手法について回答者間の平均値を算出



調査対象者の属性

調査	対象	概要
学生の取り組みの現状	学生	主に学部2年生、162人 文系理系比約1:2、男女比約4:1 文、教、法、経、情報文化、理、医、工、農
望ましい学生像	教員	学部授業担当教員12人 若手教員とベテラン教員で約半数ずつ
教員の取り組みの現状	教員	学部生対象授業を持つ教員34人 約6割が文系、約4割が理系
望ましい教員像	教員	約6割が助教授、約9割が30-40歳代 担当科目の平均学生数は70人程度
大学の取り組みの現状	執行部	執行部代表4人・名古屋大学の教育の企画・実施・評価にあたって全学的に責任をもつ教員に聞き取り調査
望ましい大学像	執行部	



発表の内容

- 研究の背景
- 研究の目的と方法
- 調査の結果
- 調査結果からの示唆



調査結果からみた学生の現状 (表1)

- 約4割の実践手法は取り組まれている
 - 20/49項目で平均が1.0以上
- 多様性の尊重(原則7)の実践が比較的進んでいる
 - 上位5項目に原則7が3項目
 - ただし原則7は授業態度的なものが多い
- 教員と接する(原則1)の実践が弱い
 - 平均で0.5未満のものに原則1が5項目



調査結果からみた学生の現状

- 学生間の協力(原則2)と多様性の尊重(原則7)が相対的に実践されている
- 教員に接する機会(原則1)の少なさが顕著に現れている

7原則ごとの平均

1. 教員に接する機会を増やす	0.37
2. 学生間で協力する機会を増やす	1.21
3. 能動的に学習する	0.71
4. 学んだことをすぐにフィードバックする	0.62
5. 学習に要する時間の大切さを学ぶ	0.93
6. 自分自身に高い期待をする	0.85
7. 多様な才能と学習方法を尊重する	1.23



調査結果からみた教員の現状 (表2)

- 約4割の実践手法は取り組まれている
 - 29/70項目で平均が1.0以上
- 授業時間内の活動に関わることは、実践されている
 - 小テスト、授業内容の改訂、理解的できない際に言う(平均が1.5以上)
- 授業時間外の活動に関わることは、比較的实践されていない
 - 最終試験の成果について面談、学期の初めに事前テスト実施



調査結果からみた教員の現状

- どの原則も概ね実践されている
 - 高い期待を伝える(原則6)が相対的に実践されている
 - 素早いフィードバック(原則4)が実践されていない

7原則ごとの平均

1. 学生と教員が接する機会を増やす	0.87
2. 学生間で協力する機会を増やす	0.79
3. 能動的に学習させる手法を使う	0.99
4. 素早いフィードバックを与える	0.68
5. 学習に要する時間の大切さを強調する	0.85
6. 学生に高い期待を伝える	1.13
7. 多様な才能と学習方法を尊重する	1.09



調査結果からみた大学の現状 (表3)

- カリキュラム、施設・設備の領域で取り組みは充実しているが、授業実践、教員、学生支援の領域で取り組みが弱い

6つの領域ごとの取り組み状況

1. 学習環境	×	14	○	9
2. 授業実践	×	22	○	4
3. カリキュラム	×	9	○	11
4. 教員	×	20	○	7
5. 学生支援	×	20	○	5
6. 施設・設備	×	18	○	12



調査結果からみた教員が期待する望ましい学生像(表1)

- 全ての手法で「実践すべき」という意見(平均が1.0以上)
 - 平均が1.5を超えるものは7割以上
- 特に教員に積極的に接する学生像を期待
 - 説明に納得できないときは質問する
 - わからないことは早めに教員に聞きに行く
 - わからないことがあればその旨をはっきり言う



- 実践手法のリストが望ましい学生像を反映しているといえる(適用可能性が高い)



調査結果からみた望ましい教員像(表2)

- ほぼ全ての手法で「実践すべき」という意見
 - 平均1.0以上
 - 1.5を超えるものも半数近い
- 現在実践されていないが、「実践すべき」とされる手法も多い
 - 試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する
 - 予備知識が足りない学生用の補習教材・問題を用意する
- 授業開始後2週間で学生の顔と名前を覚える
- 学期の終了後に最終試験の成果について面談する



- 実践手法のリストが望ましい教員像を反映しているといえる(適用可能性が高い)



調査結果からみた望ましい大学像(表3)

- ほぼ全ての手法で「実践すべき」という意見
 - ×の付く項目がほとんどない
 - ×の付く項目はごく一部のアメリカの大学の制度や文化を背景に示されたもののみ
 - 学生・教員・職員が必要な数だけ備えた駐車場がある
 - 娯楽施設・運動施設が夜間・週末も開いている



- 実践手法のリストが望ましい大学像を反映しているといえる(適用可能性が高い)



発表の内容

- 研究の背景
- 研究の目的と方法
- 調査の結果
- 調査結果からの示唆



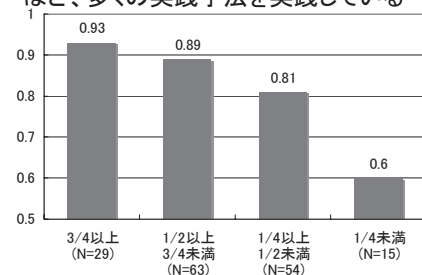
教員に接する機会をめぐる教員学生間ギャップ(調査結果からの示唆)

- 学生の現状:教員に接する機会が少ない
- 教員が望む学生像:教員に接するべき
 - 質問をする、わからないことは教員に聞きに行く、授業についていけないか不安なときは相談する
- 教員が思う以上に、学生にとって実践のハードルが高い
 - 教員の方から接する機会を増やす取り組みを進めることで、ギャップを解消
 - 授業終了後しばらく教室に残る



実践の促進は学習成果に結びつく(表4)(調査結果からの示唆)

- (学生)「成績に占める優の割合」の高い学生ほど、多くの実践手法を実践している



本研究が示す名古屋大学の教育の質向上への示唆

- 実践手法の多くは、学生の学習参加度を高めるための具体的ノウハウである
- 実践手法の多くは、現状の教育実践を改善する手法として名古屋大学に適用可能である



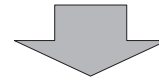
- 学習参加度を高めるために、学生・教員・大学ができることはたくさんある
- 学習参加度が高まることで、学生の学習成果は向上する可能性がある



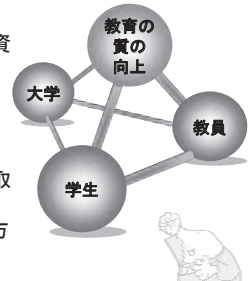
本研究が示す大学教育の質向上への示唆

- 三者の実践手法は、大学教育の質を向上のための新たな視点を提供しうる

- 教育の質の向上＝教員の資質向上



- 学生・教員・大学の三者が取り組む内容を明らかにする
- 統合的な教育の質向上の方法を提示



今後の課題：名古屋大学版開発へ向けて

- アメリカの大学の制度や文化を背景に示された実践手法の削除と修正
- 時間的理由などから実現可能性を疑問視された実践手法の削除と修正
- ハードルが高いと評価された項目（実践の割合の少ないもの）は、より実践の容易なものに修正
 - 授業以外の場面で教員に会いに行く
 - 教員にあったらあいさつをする
 - 学生にあったらあいさつをする



主な参考文献

- 中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.283-299.
- 中島英博・中井俊樹(2005)「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『徳島大学『大学教育研究ジャーナル』第2号, pp.71-80.
- Astin, A. (1984) Student Involvement: A Developmental Theory for Higher Education. *Journal of College Student Personnel*, 25, 297-308.
- Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, March 1987, a publication of the American Association of Higher Education.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barse, L. (1989) "Faculty Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barse, L. (1989) "Institutional Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Chickering, A., Gamson, Z. and Barse, L. (1992) "Student Inventory", the Seven Principle Resource Center, Winona State University.
- Feldman, K. (1997) "Identifying Exemplary Teachers and Teaching: Evidence from Student Ratings" in Perry, P. and Smart, J. (Eds.), *Effective Teaching in Higher Education: Research and Practice*, Agathon Press.
- Gamson, Z. "A Brief History of the Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *New Directions for Teaching and Learning*, No.47, 1991, pp.5-12.



表1 学生の実践手法の取り組みの現状と教員の認識する望ましい学生像

番号	学生用の実践手法	現在実践 している (学生)	実践すべ きと思う (教員)	差
7-1	他の学生を困らせるような行為をしない	1.80	1.92	0.12
5-5	授業には休まずに出席する	1.64	1.62	-0.02
2-5	クラスメイトが優れた成果を出したと思った時は賞賛する	1.51	1.62	0.11
7-4	学習歴や学力水準の異なる他の学生にも敬意を持って接している	1.47	1.92	0.45
7-7	自分と異なる意見について偏見なく考慮する	1.44	1.77	0.33
3-7	授業中は丁寧にノートをとる	1.37	1.62	0.25
2-2	授業中に他の学生と一緒に勉強する	1.33	1.58	0.26
2-1	クラスメイトと友達になるように努めている	1.31	1.69	0.38
6-5	本当に学びたいことと、単位のための勉強とのバランスに注意を払う	1.29	1.31	0.02
2-4	求めに応じて他の学生をサポートする	1.23	1.62	0.38
7-3	自分自身のことや得意な勉強方法について他の学生と情報交換する	1.18	1.69	0.51
7-2	教員の授業スタイルに合わせて学習のスタイルを変える	1.18	1.31	0.13
4-1	試験や課題のコメントから、自分の良い点・悪い点を確認する	1.16	1.62	0.45
2-3	友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する	1.14	1.38	0.24
5-2	課題を提出する前には見直し・推敲を行う	1.12	1.85	0.72
5-3	授業でプレゼンテーションをする前には練習をする	1.11	1.62	0.51
1-5	興味を持った教員の担当科目や専門領域について知りたいと思う	1.03	1.77	0.74
6-3	専攻や進路に直接関連しない授業にも興味を持ち続ける努力をする	1.03	1.46	0.44
4-5	クラスメイトからのコメントを尊重し、できるだけ取り入れる	1.03	1.38	0.36
2-7	自分が得意な分野では、すすんで他の学生をサポートする	1.02	1.62	0.59
3-4	授業で学んだことを活かせるような現実体験を求めている	0.93	1.50	0.57
5-7	自分の苦手な分野を意識して、その克服に努める	0.93	1.77	0.84
2-6	自分と立場や意見が異なる人と議論をする	0.91	1.85	0.94
7-6	人種・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時は、注意する	0.90	1.85	0.95
6-6	どの授業でも最善の努力を尽くしている	0.88	1.31	0.43
5-1	課題はすぐに取りかかり、正確に行う	0.83	1.85	1.02
6-7	勉強を進めるにあたって学内の施設・人材・資料を最大限活用する	0.81	1.69	0.89
4-4	授業や文献の内容でわからない点を自力で考えたり友達に相談する	0.78	1.85	1.06
6-4	自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる	0.74	1.85	1.10
5-4	履修している授業について計画通りに勉強する	0.72	1.38	0.67
6-1	授業を受ける際に自分の目標を設定する	0.69	1.67	0.97
3-3	授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている	0.66	1.46	0.81
1-3	教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする	0.62	2.00	1.38
7-5	教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する	0.62	1.54	0.92
3-1	授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う	0.58	1.85	1.26
4-6	勉強したことを振り返れるように記録をつけておく	0.58	1.38	0.80
6-2	教員が示した授業目標に関する情報を集めようと努める	0.55	1.54	0.99
3-5	授業に向けて入念な準備をする	0.55	1.54	0.99
4-2	わからないことは早めに教員に聞きに行く	0.51	1.92	1.41
3-2	授業についていく上で必要なことを教員に質問する	0.49	1.85	1.35
3-6	授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す	0.39	1.46	1.08
1-7	履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える	0.34	1.62	1.28
1-4	教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする	0.25	1.46	1.21
4-3	文章を書く時は、教員からコメントをもらいながら書き直す	0.16	1.31	1.14
1-1	一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくらうとする	0.16	1.62	1.45
5-6	授業についていけないかどうか不安な時は、教員に相談する	0.14	1.85	1.70
1-6	教員が関わっている研究会などの催しに参加する	0.11	1.08	0.97
1-2	自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする	0.09	1.42	1.32
4-7	授業で学んだことについて、教員と議論をする機会をつくる	0.08	1.69	1.61

注: 数値が 1.5 以上のものは網掛けにしている。

表2 教員の実践手法の取り組みの現状と望ましい教員像

番号	教員用の実践手法	現在実践している	実践すべきと思う	差
1-3	自分の考え方や過去の経験を学生に話す	1.71	1.74	0.03
4-1	小テスト・宿題を課す	1.68	1.82	0.14
6-9	授業内容を常に改訂する	1.59	1.88	0.29
7-1	授業が理解できないときはきちんと言うようにすすめる	1.59	1.88	0.29
7-9	学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを奨励する	1.59	1.85	0.26
3-4	学生による調査・自主研究を奨励する	1.50	1.88	0.38
3-8	授業をよりよくするための学生の提案・アイデアを歓迎する	1.47	1.79	0.32
1-10	学生が問題に直面した際は、解決へ向けた手助けをする	1.47	1.73	0.26
3-5	自分以外の意見、文献や授業の資料を批判的に検討することを奨励する	1.35	1.70	0.34
6-3	学期の開始時に学生に期待することを述べたりシラバスに書く	1.35	1.68	0.32
3-1	授業の中で学生の課題を発表させる	1.33	1.61	0.27
6-1	学生に一生懸命勉強してほしいと言う	1.32	1.65	0.32
7-2	虚偽の発言、嫌み、冗談、他の学生の妨害行為をやめさせる	1.30	1.67	0.36
5-6	日常的な学習や学習の計画性の重要性を強調する	1.29	1.74	0.44
5-1	課題にはすぐに取り組むように促す	1.29	1.44	0.15
6-6	意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する	1.24	1.74	0.50
6-5	期限までに課題を提出できなかった場合の処置を説明する	1.24	1.59	0.35
2-8	授業の受講者でグループを作る	1.18	1.48	0.30
6-7	学生にたくさん書くことをすすめる	1.15	1.68	0.53
3-6	具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する	1.15	1.56	0.41
7-8	自ら学習目標を立てる活動、コンピュータを活用した学習をとり入れる	1.13	1.47	0.33
5-9	学習習慣や学習計画の面でうまくいかない学生に会って相談にのる	1.12	1.67	0.55
1-7	自分と異なる人種・文化背景の学生の支援に努力する	1.12	1.71	0.59
2-3	学生が共同プロジェクトを行うように働きかける	1.06	1.45	0.39
6-8	優れた成果をあげた学生は授業でほめる	1.06	1.55	0.49
5-7	学生に欠席しないことの重要性を説明する	1.06	1.41	0.35
7-10	学期の初めに学生の学習スタイル、興味・関心、過去の経験を知る努力をする	1.03	1.59	0.56
7-7	自主的な学習をしたい学生向けの課題・テーマを用意しておく	1.00	1.56	0.56
5-10	授業を欠席した場合は、自習などで追いつくことを求める	1.00	1.50	0.50
2-7	大事な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける	0.97	1.71	0.74
6-4	学生が意欲的な目標の設定を支援できるよう支援する	0.97	1.62	0.65
1-1	将来の進路について学生にアドバイスをする	0.97	1.42	0.45
7-4	学生の過去の経験にあわせて適切な文献や学習活動を選ぶ	0.97	1.52	0.55
5-4	学生に高い到達目標を立てることをすすめる	0.94	1.41	0.47
4-3	テスト・レポートを1週間以内に返却する	0.91	1.63	0.71
2-5	難しい概念をお互いに説明し合う活動を取り入れる	0.91	1.47	0.56
2-1	学生に自分の興味や過去の経験をお互いに話そう求める	0.88	1.29	0.41
4-2	学生が自分で答えを合わせられる宿題・問題を用意する	0.88	1.25	0.37
4-6	試験やレポートは良い点・悪い点をコメントして返却する	0.85	1.63	0.77
4-4	学期の初めのうちは課題の評価・コメントを詳細かつ丁寧に言う	0.85	1.47	0.62
3-2	異なった理論、研究上の知見、芸術的作品の類似点・相違点を要約させる	0.82	1.53	0.71
7-5	予備知識などが足りない学生用に補習教材・問題を用意する	0.82	1.53	0.71
1-2	学生が研究室に遊びにくる	0.82	1.24	0.42
2-4	課題をお互いに評価し合う活動を取り入れる	0.79	1.42	0.64
7-6	女性やマイノリティに関する新しい動向を授業に取り入れる	0.76	1.37	0.61
5-5	プレゼンテーションの際に事前にリハーサルをさせる	0.74	1.45	0.72
7-3	多様な学生にあわせて多様な学習活動を用意する	0.74	1.38	0.64
1-8	学生とは先輩・非公式のアドバイザーとして接する	0.73	1.15	0.41
3-3	授業に関連する学外のイベントや活動に関わるよう求める	0.71	1.30	0.60
2-6	課題ができたときにお互いにほめる機会を設ける	0.71	1.27	0.57
6-10	学期中は授業改善について定期的に学生と議論をする	0.68	1.38	0.71
2-2	授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒に行うよう促す	0.68	1.21	0.54
6-2	授業で良い成績を取ることの重要性を強調する	0.68	1.03	0.35
4-5	学生に課題の進捗状況を報告させる	0.65	1.25	0.60
3-7	シミュレーション、ロールプレイ、実験を行う	0.64	1.21	0.58
3-9	授業に関連するフィールド調査、ボランティア活動、インターンシップを紹介する	0.62	1.12	0.50
1-9	学生を自分の専門領域における学会などに連れて行く	0.59	1.06	0.47
1-4	学生が主催する行事・勉強会などに参加する	0.53	1.06	0.53
2-10	他の学生への協力が自分の成績を下げるにつながらないと学生に伝える	0.52	1.27	0.76
5-2	授業の予習に必要な時間を示す	0.39	1.00	0.61
5-3	難しい内容には理解のために必要な学習時間を示す	0.39	0.84	0.45
1-6	授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える	0.38	1.33	0.95
4-10	欠席した学生に電話・掲示など連絡をする	0.38	0.79	0.41
1-5	顧問や相談員として学生の課外活動に積極的に関わる	0.36	1.09	0.73
3-10	学生を研究プロジェクトに参加させる	0.32	1.03	0.71
4-8	学生に課題の進捗状況を記録させる	0.26	1.03	0.77
5-8	フルタイムで勉強することは、フルタイムで働くことに等しいことを説明する	0.24	1.12	0.88
4-7	学期の初めに事前テストを行う	0.24	0.81	0.58
2-9	学生が参加できる大学の組織の一つ以上所属するよう働きかける	0.19	0.77	0.58
4-9	学期の終了後に最終試験の成果について面談をする	0.06	0.91	0.85

注:数値が1.5以上のものは網掛けにしている。

表3 大学の実践手法の取り組みの現状と望ましい大学像

番号	大学用の実践手法	取り組んでいる				取り組むべきである			
		A	B	C	D	A	B	C	D
学習環境									
1-1	学生と教員が授業時間外に面会の機会を持てる	×	△	○	×	○	○	○	○
1-2	学部や全学の委員会に学生の代表が出席する	×	×	△	△	○	○	○	○
1-3	学内の研究者の優れた研究成果について学生が知っている	○	○	△	△	○	○	○	○
1-4	社会的弱者の教員・職員・学生を受け入れる	△	△	×	△	○	○	○	○
1-5	執行部が組織運営に対する学生や教員の貢献度を知っている	○	△	△	×	△	○	○	○
1-6	大学の出版物は学生・教員・職員の多様な活動を反映している	×	×	△	×	○	○	○	○
1-7	教員が学生の高い成果を引き出せるよう事務組織が支援する	△	△	△	×	△	○	○	○
1-8	学長や執行部に教員や学生がコンタクトできる仕組みがある		×	×	×		○	△	○
1-9	教員と事務組織が快適なキャンパスづくりに努力する	○	△	△	×	○	○	○	○
1-10	事務長、学部長、学科長が協力関係を作る	○	○	○	○	○	○	○	○
1-11	教職員が一生懸命働いていることを学生が知っている		△	△	△		○	○	○
授業実践									
2-1	授業を受講するにあたり、学生の予備知識が十分であるかどうか確認している	△	△	×	×	△	○	○	○
2-2	大学が授業と家族サービスや課外活動とのバランスに関する見解を持っている		×	×	×		○	○	○
2-3	男性職員と女性職員の所得の差を公表する	×	×		×	○	○	○	○
2-4	大学が卒業生の進路・キャリアを把握している	△	△	×	△	△	○	○	○
2-5	学生が開講授業を評価し、改善を提案できる機会がある	△	△	×	△	△	○	△	○
2-6	不可の成績の上限数を大学が決めている	×	×	×	×		○	△	△
2-7	成績評価の明確な基準を教員が持っている	△	×	×	△	△	○	○	○
2-8	大学は必要に応じて会議で検討中の内容を学生に伝えている	○	×	×	×	△	○	△	○
2-9	非常勤講師が授業以外の活動に参加している		△	×	×		△	△	×
2-10	大学が学生の成長を評価している		△	△	×		○	○	○
2-11	スポーツ選手も他の学生と同等の学習を期待されている	○	○	○		△	○	○	○
カリキュラム									
3-1	実践的な実務経験、研修の機会を与える科目がある	×	△	△	△	○	△	○	○
3-2	教員が教養課程の内容を検討し改訂する	△	△	×	△	△	○	○	○
3-3	教員が専門課程の内容を検討し改訂する	○	△	△	○	△	○	○	○
3-4	コンピュータを活用した学習など主体的に学習できる機会がある	△	△	△	○	△	○	○	○
3-5	新入生が参加する特別プログラムがある		○	△	×		○	○	○
3-6	学生がインターンシップや就業体験できる機会がある	○	○	△	△	△	○	○	○
3-7	教員と学生が卒業までに身につける知識・スキル・態度を共有している	△	△	×	×	△	○	○	○
3-8	学生が自ら専攻を決められる	○	△	○	△	×	○	○	○
3-9	学生が学際的な専攻に進むことができる	○	×	○	×	×	○	○	○
3-10	多様な文化の価値を学ぶプログラムに学生が参加している		△	△	×		○	○	○
3-11	学生が科目間の関係を理解するのに役立つ学習コミュニティやセミナーがある	○	△	×	△	△	○	△	○
教員									
4-1	学生が会えるよう平日は教員がキャンパスにいる	○	△	△	×		○	○	△
4-2	成績評価は各教員が明確な基準に基づいて行っている	○	△	△	△	△	○	○	○
4-3	教員が新たな教授法を試したり支援を受ける時間的余裕がある	×	×	×	×	○	○	○	○
4-4	教員が授業の成果についてフィードバックを受けたり与えたりする	△	△	△	×	△	○	○	○
4-5	学外でのコンサルタント活動等に関する制限が議論されている	○	△	△	×	△	○	○	○
4-6	教員は学問的な指導を真剣に行っている	○	○	△	△	△	○	○	○
4-7	定期昇給が教育成果と関連している	×	×	×	×	○	○	△	○
4-8	教員が学生課の職員と協力して働いている		×	×	△	△		○	○
4-9	大学が、教員の労働時間が合法的な範囲におさまるよう指導をする		×	×	×		○	△	○
4-10	教員が長期計画、予算、人事など重要な意思決定に参加する	○	○	○	×	△	○	○	○
4-11	執行部の教育への貢献を教員が評価している		×	×	×		○	○	○
学生支援サービス									
5-1	学生の様々な相談にカウンセリングサービスが対応する	○	○	○	△	○	○	○	○
5-2	学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する	○	△	×	△	△	○	○	○
5-3	学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う	○	×	×	×		○	△	○
5-4	成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する	△	×	×	△	△	○	△	○
5-5	学生課、学務課、学生自治会が協力してオリエンテーションプログラムを実施する	×	△	△	×	△	○	○	○
5-6	学生が他の学生のチューターやアドバイザー等として活躍している	○	△	△	△	△	○	○	○
5-7	学生が財政的援助に関して専門家から支援を受けられる	△	×	△	×	△	○	○	○
5-8	教育目標が学生の行動目標で表現されている		△	×	×		○	○	○
5-9	学生が在学中は同一のアドバイザーから指導を受けられる		△	×	×		△	○	○
5-10	大学が学生の多様性に対応できるよう教員・職員・学生に研修を行う	△	×	×	×	○	○	○	○
5-11	奨学金は期限までに申し込んだ学生には授業開始時に支給されている	×	△	×	×	×	△	○	○
施設・設備									
6-1	教室の机・椅子が可動式である	△	×	△	△	×	○	○	○
6-2	学生と教員が面会できるラウンジなどが整備されている	○	×	×	△	×	○	○	○
6-3	静かで集中できる学習スペースがある	○	△	△	△		○	○	○
6-4	娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている	×	△	×	×	×	○	○	×
6-5	食堂が日中・夜間通じて開いている	×	△	×	×	×	△	○	○
6-6	学生が自由に使えるビデオ視聴室、実験室、芸術活動用の施設がある	△	△	△	×	△	○	○	○
6-7	大学のコンピュータを利用できる	○	○	○	○	△	○	○	○
6-8	学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある	×	×	×	×	×	×	△	×
6-9	日中・夜間に使用できる公共交通機関がある	○	○	○	○	○	○	○	○
6-10	学期中は図書館が週末・夜間も利用可能である	○	○	×		○	○	○	○
6-11	夜間コースの学生のために事務室が夜間も開いている	△	×	×	×	×	○	○	○

注：○は「あてはまる」、△は「少しあてはまる」、×は「あてはまらない」、空白は「答えられない」を表している。

表4 学生の成績別の実践手法の取り組みの現状

番号	優の数が3/4以上 (N=29)	番号	優の数が1/2以上 3/4未満 (N=63)	番号	優の数が1/4以上 1/2未満 (N=54)	番号	優の数が1/4未満 (N=15)
5-5	1.90	7-1	1.85	7-1	1.83	7-1	1.60
7-1	1.71	2-5	1.71	5-5	1.59	3-7	1.33
2-2	1.62	5-5	1.68	7-7	1.47	7-4	1.27
2-1	1.48	3-7	1.57	7-4	1.44	7-7	1.27
2-5	1.48	7-4	1.52	2-5	1.40	5-5	1.13
7-4	1.48	2-1	1.49	6-5	1.28	2-5	1.07
2-3	1.45	7-7	1.48	7-3	1.23	1-5	1.00
3-7	1.45	2-2	1.44	4-1	1.22	2-4	1.00
2-4	1.41	2-4	1.35	2-1	1.20	2-2	0.93
5-2	1.41	6-5	1.32	7-2	1.17	3-4	0.93
6-5	1.41	2-3	1.24	5-3	1.17	6-3	0.93
7-7	1.41	4-1	1.22	2-2	1.15	6-5	0.93
7-2	1.31	7-2	1.18	3-7	1.11	7-2	0.93
7-3	1.31	4-5	1.15	5-2	1.09	3-3	0.87
5-1	1.17	7-3	1.15	2-4	1.07	4-1	0.87
6-3	1.17	5-3	1.14	6-3	1.02	4-5	0.87
6-6	1.17	1-5	1.13	2-7	1.00	5-3	0.87
4-5	1.14	5-2	1.11	2-3	0.98	7-3	0.87
6-4	1.14	2-7	1.10	7-6	0.98	2-3	0.73
5-7	1.10	3-4	1.02	1-5	0.96	2-7	0.73
5-3	1.07	6-3	0.98	2-6	0.96	5-2	0.73
2-7	1.07	5-7	0.94	3-4	0.91	7-6	0.73
4-1	1.07	4-4	0.92	5-7	0.91	2-1	0.67
5-4	1.00	2-6	0.90	4-5	0.89	6-6	0.67
1-5	0.97	7-6	0.90	6-7	0.83	2-6	0.60
4-4	0.97	5-1	0.89	6-1	0.77	5-7	0.60
2-6	0.96	6-6	0.89	3-3	0.75	4-4	0.53
6-7	0.93	6-7	0.85	6-4	0.75	3-5	0.47
3-4	0.83	5-4	0.76	6-6	0.75	1-3	0.40
6-1	0.83	1-3	0.73	5-1	0.70	4-2	0.40
7-6	0.83	4-6	0.71	7-5	0.66	3-1	0.33
6-2	0.76	3-1	0.69	5-4	0.65	5-1	0.33
1-3	0.66	6-4	0.69	4-4	0.61	7-5	0.33
3-2	0.66	7-5	0.67	6-2	0.61	3-2	0.27
3-5	0.66	6-1	0.66	1-3	0.54	3-6	0.27
3-1	0.62	3-3	0.63	4-6	0.53	4-6	0.27
4-6	0.59	3-5	0.60	3-1	0.52	6-1	0.27
7-5	0.57	3-2	0.57	1-7	0.50	6-7	0.27
4-2	0.52	4-2	0.55	4-2	0.50	1-2	0.20
3-3	0.45	6-2	0.52	3-5	0.46	4-7	0.20
3-6	0.43	3-6	0.35	3-6	0.44	5-4	0.20
4-3	0.25	1-4	0.32	3-2	0.39	1-1	0.13
1-4	0.24	1-7	0.32	1-4	0.20	1-4	0.13
1-7	0.24	1-1	0.21	5-6	0.19	6-4	0.13
1-1	0.21	4-3	0.18	1-6	0.17	1-7	0.07
5-6	0.14	5-6	0.15	4-3	0.13	4-3	0.07
1-2	0.10	1-6	0.13	1-1	0.09	6-2	0.07
4-7	0.03	1-2	0.10	1-2	0.06	1-6	0.00
1-6	0.00	4-7	0.10	4-7	0.06	5-6	0.00

注: 数値が1.0以上のものは網掛けにしている。

『優れた授業実践のための7つの原則』 に関するアンケート

学生のみなさんへ

名古屋大学の教育をよくするためのアンケートにご協力をお願いします！
アメリカの大学では、学生が授業に積極的に関わることを支援するために、『優れた授業実践のための7つの原則』というものが作られています。
名古屋大学高等教育研究センターでは、この原則が日本の大学とくに名古屋大学でどのくらい適用可能かを検討しています。どうかアンケートにご協力をお願いします。調査結果はみなさん自身の成績等とは一切関係なく、すべて統計的に処理されますので、ご安心下さい。

学部 1. 文 2. 教育 3. 法 4. 経済 5. 情報文化
 6. 理 7. 医 8. 工 9. 農

学年 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. その他

性別 1. 男 2. 女

通学形態 1. 自宅から通学 2. 下宿・寮から通学 3. それ以外

これまでの大学での成績における「優」の割合

1. ～4分の1程度 2. 4分の1～半分 3. 半分～4分の3 4. 4分の3以上

アンケートの回答方法

次のページから7つの原則に沿って、それぞれ7個程度の実践例が示されています。それぞれの例をあなた自身が実践しているかどうかについて、次の記号でお答え下さい。

○ 実践している △ 少し実践している × 実践していない ? 答えられない

1. 教員に接する機会を増やす

一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくろうとする

☐

自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする

☐

教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする

☐

教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする

☐

興味を持った教員の担当科目や専門領域について知りたいと思う

☐

教員が関わっている研究会などの催しに参加する

☐

履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える

☐

○ 実践している △ 少し実践している × 実践していない ? 答えられない

2. 学生間で協力する機会を増やす

クラスメイトと友達になるように努めている

☐

授業中に他の学生と一緒に勉強する

☐

友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する

☐

求めに応じて他の学生をサポートする

☐

クラスメイトが優れた成果を出したと思った時は賞賛する

☐

自分と立場や意見が異なる人と議論をする

☐

自分が得意な分野では、すすんで他の学生をサポートし、彼らと知識や技能を共有する

☐

3. 能動的に学習する

授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う

☐

授業についていく上で必要なことを教員に質問する

☐

授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている

☐

授業で学んだことを活かせるような現実体験を求めている

☐

授業に向けて入念な準備をする

☐

授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す

☐

授業中は丁寧にノートをとる

☐

4. 学んだことをすぐにフィードバックする

教員からもらった試験、レポート、課題のコメントから、自分の良かった点・悪かった点をチェックする

☐

わからないことがあれば、できるだけ早く教員にコメントをもらいにいく

☐

文章を書く時は、教員からコメントをもらいながら書き直す

☐

授業や文献の内容でわからないことをリストアップし、友達や教員に相談したり、自分自身でそれらを検討してみる

☐

クラスメイトからのコメントを尊重し、取り入れ方を慎重に検討する

☐

勉強したことを振り返れるように記録をつけておく

☐

授業で学んだことについて、教員と議論をする機会をつくる

☐

5. 学習に要する時間の大切さを学ぶ

課題はすぐに取りかかり、正確に行う

☐

課題を提出する前には見直し・推敲を行う

☐

授業でプレゼンテーションをする前には練習をする

☐

履修している授業について計画通りに勉強する

☐

授業には休まずに出席する

☐

授業についていけるかどうか不安な時は、教員に相談する

☐

自分の苦手な分野を意識して、その克服に努める

☐

○ 実践している △ 少し実践している × 実践していない ? 答えられない

6. 自分自身に高い期待をする

授業を受ける際に自分の目標を設定する

☐

教員が示した授業目標に関する情報を集めようと努める

☐

自分の専攻や希望する職業に直接関連しなくても、授業内容に興味を持ち続ける努力をする

☐

自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる

☐

本当に学びたいことと、単位のための勉強とのバランスに注意を払っている

☐

どの授業でも最善の努力を尽くしている

☐

勉強を進めるにあたって学内にある施設・人材・資料などあらゆる資源を活用する

☐

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

他の学生を困らせるような行為をしない

☐

教員の授業スタイルに合わせて学習のスタイルを変える

☐

自分自身のことや得意な勉強方法について、他の学生と情報交換する

☐

学習歴や学力水準の異なる他の学生にも敬意を持って接している

☐

教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する

☐

人種差別・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時は、注意するようにしている

☐

自分と異なる意見について偏見なく考慮する

☐

『優れた授業実践のための7つの原則』（学生版） に関するアンケート

全学教育で授業を担当された先生方へ

米国で開発された教授法のノウハウ集の一つに、「優れた授業実践のための7つの原則」¹⁾があります。この度、この7つの原則の日本における適用可能性を検討したく、アンケート調査をお願いしたいと存じます。

このアンケートは学生を対象に作成されたものですが、名古屋大学の文脈において、学生が本当にこれらの項目を実施した方がよいかどうかを、先生方の目でチェックして頂きたいのです。

誠に勝手ながら、平成17年4月28日（木）までにご回答いただけると幸いに存じます。ご協力よろしくお願い申し上げます。

職位 1. 教授 2. 助教授 3. 講師 4. 助手 5. 非常勤
年齢 1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳以上

アンケートの回答方法

以下には7つの原則に沿って、それぞれ7個程度の実践手法が示されています。各実践手法の内容に対してご自身に当てはまるものを以下の記号でご記入下さい。

- 実施すべきである
- △ どちらかといえば、実施した方がよい
- × 実施しなくてもよい
- ？ 答えられない

1) 1989年に発表された直後、全米で20万部以上配布・活用されてきた実績がある大学教授法の小冊子です。学生を授業に巻き込み参加させるための実践手法を提供すると同時に、自己評価ができるような工夫がされています。しかし実践手法については、限られたものしか蓄積されていないのが現状であり、また、米国で開発された実践手法には日本の文脈に馴染まないものもあり、今回調査を通じて日本版小冊子の制作を検討したいと思います。

○ 実践すべきである △ どちらかといえば、実践した方がよい × 実践しなくてもよい ? 答えられない

1. 教員に接する機会を増やす

一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会をつくろうとする

☐

自分の課題・答案・作品について教員にコメントをお願いする

☐

教員の説明・意見に納得ができない時は質問をする

☐

教員と授業の内容に関する話を授業時間外にする

☐

興味を持った教員の担当科目や専門領域について知りたいと思う

☐

教員が関わっている研究会などの催しに参加する

☐

履修した授業についての感想・コメントを教員に伝える

☐

2. 学生間で協力する機会を増やす

クラスメイトと友達になるように努めている

☐

授業中に他の学生と一緒に勉強する

☐

友達とグループを作って課題に取り組んだり勉強する

☐

求めに応じて他の学生をサポートする

☐

クラスメイトが優れた成果を出したと思った時は賞賛する

☐

自分と立場や意見が異なる人と議論をする

☐

自分が得意な分野では、すすんで他の学生をサポートし、彼らと知識や技能を共有する

☐

○ 実践すべきである △ どちらかといえば、実践した方がよい × 実践しなくてもよい ? 答えられない

3. 能動的に学習する

授業に関してわからないことがある時ははっきりとその旨を言う

☐

授業についていく上で必要なことを教員に質問する

☐

授業の内容と課外での活動を結びつけて考えるようにしている

☐

授業で学んだことを活かせるような現実体験を求めている

☐

授業に向けて入念な準備をする

☐

授業に関連する文献や研究プロジェクトを探す

☐

授業中は丁寧にノートをとる

☐

4. 学んだことをすぐにフィードバックする

教員からもらった試験、レポート、課題のコメントから、自分の良かった点・悪かった点をチェックする

☐

わからないことがあれば、できるだけ早く教員にコメントをもらいにいく

☐

文章を書く時は、教員からコメントをもらいながら書き直す

☐

授業や文献の内容でわからないことをリストアップし、友達や教員に相談したり、自分自身でそれらを検討してみる

☐

クラスメイトからのコメントを尊重し、取り入れ方を慎重に検討する

☐

勉強したことを振り返れるように記録をつけておく

☐

授業で学んだことについて、教員と議論をする機会をつくる

☐

5. 学習に要する時間の大切さを学ぶ

課題はすぐに取りかかり、正確に行う

☐

課題を提出する前には見直し・推敲を行う

☐

授業でプレゼンテーションをする前には練習をする

☐

履修している授業について計画通りに勉強する

☐

授業には休まずに出席する

☐

授業についていけるかどうか不安な時は、教員に相談する

☐

自分の苦手な分野を意識して、その克服に努める

☐

6. 自分自身に高い期待をする

授業を受ける際に自分の目標を設定する

☐

教員が示した授業目標に関する情報を集めようと努める

☐

自分の専攻や希望する職業に直接関連しなくても、授業内容に興味を持ち続ける努力をする

☐

自分の目標達成に向けて発展的な学習課題を進んでやる

☐

本当に学びたいことと、単位のための勉強とのバランスに注意を払っている

☐

どの授業でも最善の努力を尽くしている

☐

勉強を進めるにあたって学内にある施設・人材・資料などあらゆる資源を活用する

☐

○ 実践すべきである △ どちらかといえば、実践した方がよい × 実践しなくてもよい ? 答えられない

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

他の学生を困らせるような行為をしない

☐

教員の授業スタイルに合わせて学習のスタイルを変える

☐

自分自身のことや得意な勉強方法について、他の学生と情報交換する

☐

学習歴や学力水準の異なる他の学生にも敬意を持って接している

☐

教員から少数意見を授業で出してほしいと頼まれた際は協力する

☐

人種差別・性差別や、攻撃的な言動・態度に気づいた時は、注意するようにしている

☐

自分と異なる意見について偏見なく考慮する

☐

・「? 答えられない」とした項目があれば、そう思われた理由を教えてください。
・上記以外に、学生が工夫すべきと思われる実践例がありましたら、ぜひ教えてください。

『優れた授業実践のための7つの原則』 に関するアンケート

米国で開発された教授法のノウハウ集の一つに、「優れた授業実践のための7つの原則」¹⁾があります。この度、この7つの原則の日本における適用可能性を検討したく、内容の妥当性について伺いしたいと存じます。

誠に勝手ながら平成17年4月4日（月）までにご回答いただけると幸いに存じます。
ご協力よろしくお願い申し上げます。

職位 1. 教授 2. 助教授 3. 講師 4. 助手 5. 非常勤
 年齢 1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳以上
 学部生対象にこれまでに担当した授業名と受講者数（3つまで）

(, 人)

(,)

(, 人)

アンケートの回答方法

以下には7つの原則に沿って、それぞれ10個程度の実践手法が示されています。各実践手法の内容に対してご自身に当てはまるものを以下の記号でご記入下さい。

各項目について、2種類の質問をお尋ねします。左側の回答欄には現在ご担当の授業でどの程度実践されているか、右側の回答欄にはその実践手法を取り入れてみたいと思うかどうかをお答え下さい。

- あてはまる
△ 少しあてはまる
× あてはまらない
？ 答えられない

1) 1989年に発表された直後、全米で20万部以上配布・活用されてきた実績がある大学教授法の小冊子です。学生を授業に巻き込み参加させるための実践手法を提供すると同時に、自己評価ができるような工夫がされています。しかし実践手法については、限られたものしか蓄積されていないのが現状であり、また、米国で開発された実践手法には日本の文脈に馴染まないものもあり、今回調査を通じて日本版小冊子の制作を検討したいと思えます。

1. 教員と学生のコンタクトを促す

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
将来の進路について学生にアドバイスをする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生を研究室に遊びにくるよう招く	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自分の考え方や過去の経験を学生に話す	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が主催する行事・勉強会などに参加する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
顧問や相談員として学生の課外活動に積極的に関わる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業開始後2週間までに担当授業の学生の顔と名前を覚える	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自分と異なる国籍・文化背景の学生の支援に努力する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
どの学生にも非公式の指導教員のように接する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に対して自分の専門領域の学会に行けるよう紹介する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が問題に直面した際は、解決へ向けた手助けをする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

2. 学生間で協力する機会を増やす

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
学生に自分の興味や過去の経験をお互いに話すよう求める	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業の予習や試験勉強をクラスメイトと一緒にやるよう促す	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生同士が協力してプロジェクトを行うように働きかける	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
課題をお互いに評価し合う活動を取り入れる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
難しい学習内容は学生同士で説明し合うことで学ぶ活動を取り入れる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
課題ができたときにお互いにほめる機会を設ける	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
重要な概念について意見・経験の異なる学生がお互いに話し合う機会を設ける	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業の受講者でグループを作る	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が参加できる大学の組織に一つ以上所属するよう働きかける	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
他の学生の成績向上に協力することが、相対的に自分の成績を下げるにつながらないことを伝える	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

3. 能動的に学習させる手法を使う

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
授業の中で学生の課題を発表させる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に異なった理論、研究上の知見、あるいは芸術的作品の類似点・相違点を要約させる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業に関連する学外のイベントや活動に関わるよう求める	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生による調査・自主研究を奨励する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に教師・クラスメイトの意見、文献や授業の資料を批判的に検討することを奨励する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
具体的で実社会・実生活に結びつく調査・議論・課題を設定する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
シミュレーション、ロールプレイ、実験を行う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が自発的に提案する文献紹介・課題・調査を歓迎する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業に関連するフィールド調査、ボランティア活動、インターンシップを紹介する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生を研究プロジェクトに参加させる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

4. 素早いフィードバックを与える

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
小テスト・宿題を課す	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が自分で答えを合わせられる宿題・問題を用意する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
テスト・レポートを1週間以内に返却する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期の初めのうちは課題の評価・コメントを詳細かつ丁寧に行う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に定期的に課題の進捗状況を教員に報告するよう求める	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
最終試験・レポート課題に良い点・悪い点をコメントして返却する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期の初めに事前テストを行う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に自己管理のために課題の進捗状況を記録させる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期の終了後に最終試験の成果について面談をする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
欠席した学生に電話・掲示など連絡をする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

5. 学習に要する時間の大切さを強調する

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
課題にはすぐに取り組むように促す	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業の予習にあたって最低限かけてほしい学習時間を学生に伝える	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
難しい内容には理解のために必要な学習時間を示す	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に高い到達目標を立てることをすすめる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
プレゼンテーションの際に事前にリハーサルをさせる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日常的な学習、たゆまぬ努力、自分のペースで行うこと、学習の計画性の重要性を強調する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に欠席しないことの重要性を説明する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
フルタイム学生として勉強することは、フルタイム労働（週40時間以上の学習）に相当することを説明する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学習習慣や学習計画の面でうまくいかない学生に会って相談にのる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業を欠席した場合は、自習などで追いつくことを求める	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

6. 学生に高い期待を伝える

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
学生に一生懸命勉強してほしいと言う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業で良い成績を取ることの重要性を強調する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期の開始時に学生に期待することを述べたりシラバスに書く	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が意欲的な目標を設定できるよう支援する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
期限までに課題を提出できなかった場合の処置を説明する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
意欲的な学生向けに発展的内容の文献・課題を用意する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生に文章を書く経験をたくさん持つようすすめる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
優れた成果をあげた学生を授業でほめる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
授業内容を常に改訂する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期中は授業改善について定期的に学生と議論をする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

7. 多様な才能と学習方法を尊重する

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在実践しているか	実践すべきだと思うか
授業が理解できないときはきちんと言うようにすすめる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
悪意のある発言、嫌み、冗談などクラスの雰囲気を損なう発言をする行為をやめさせる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
あらゆるタイプの学生が活躍できるよう多様な学習活動や課題を用意する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生の過去の経験にあわせて適切な文献や学習活動を選ぶ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
予備知識などが足りない学生用に補習教材・問題を用意する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
社会的弱者に関する新しい動向を授業に取り入れる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自主的な学習をしたい学生向けの課題・テーマを用意しておく	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自ら学習目標を立てる活動、コンピュータを活用した学習を取り入れる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が自分の興味・関心に基づいて専攻を決めることを奨励する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期の初めに学生の学習スタイル、興味・関心、過去の経験を知る努力をする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連してご自身が実践されているアイデアについてお教え下さい。

『優れた授業実践のための7つの原則』 に関するアンケート

米国で開発された教授法のノウハウ集の一つに、「優れた授業実践のための7つの原則」¹⁾があります。この度、この7つの原則の日本における適用可能性を検討したく、内容の妥当性についてお伺いしたいと存じます。

誠に勝手ながら平成17年4月4日(月)までにご回答いただけると幸いに存じます。ご協力よろしくお願い申し上げます。

アンケートの回答方法

以下には7つの原則に沿って、それぞれ10個程度の実践手法が示されています。各実践手法の内容に対して大学に当てはまるものを以下の記号でご記入下さい。

各項目について、2種類の質問をお尋ねします。左側の回答欄には現在大学でどの程度実践されているか、右側の回答欄には大学がその実践手法を取り入れるべきであると思うかどうかをお答え下さい。

- あてはまる
- △ 少しあてはまる
- × あてはまらない
- ？ 答えられない

1) 1989年に発表された直後、全米で20万部以上配布・活用されてきた実績がある大学教授法の小冊子です。学生を授業に巻き込み参加させるための実践手法を提供すると同時に、自己評価ができるような工夫がされています。しかし実践手法については、限られたものしか蓄積されていないのが現状であり、また、米国で開発された実践手法には日本の文脈に馴染まないものもあり、今回調査を通じて日本版小冊子の制作を検討したいと思えます。

1. 学習環境

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
学生と教員が授業時間外に面会の機会を持てる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学部や全学の委員会に学生の代表が出席する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学内の研究者の優れた研究成果について学生が知っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
社会的弱者の教員・職員・学生を受け入れる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
執行部が組織運営に対する学生や教員の貢献度を知っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学の出版物は学生・教員・職員の多様な活動を反映している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が学生の高い成果を引き出せるよう事務組織が支援する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学長や執行部に教員や学生がコンタクトできる仕組みがある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員と事務組織が快適なキャンパスづくりに努力する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
事務長、学部長、学科長が協力関係を作る	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教職員が一生懸命働いていることを学生が知っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

2. 授業実践

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
授業を受講するにあたり、学生の予備的知識が十分であるかどうか確認している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学が授業と家族サービスや課外活動とのバランスに関する見解を持っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
男性職員と女性職員の所得の差を公表する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学が卒業生の進路・キャリアを把握している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が開講授業を評価し、改善を提案できる機会がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
不可の成績の上限数を大学が決めている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
成績評価の明確な基準を教員が持っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学は必要に応じて会議で検討中の内容を学生に伝えている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
非常勤講師が授業以外の活動に参加している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学が学生の成長を評価している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
スポーツ選手も他の学生と同等の学習を期待されている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

3. カリキュラム

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
実践的な実務経験、研修の機会を与える科目がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が教養課程の内容を検討し改訂する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が専門課程の内容を検討し改訂する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
コンピュータを活用した学習など主体的に学習できる機会がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
新入生が参加する特別プログラムがある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生がインターンシップや就業体験できる機会がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員と学生が卒業までに身につける知識・スキル・態度を共有している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が自ら専攻を決められる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が学際的な専攻に進むことができる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
多様な文化の価値を学ぶプログラムに学生が参加している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が科目間の関係を理解するのに役立つ学習コミュニティやセミナーがある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

4. 教員

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
学生が会えるよう平日は教員がキャンパスにいる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
成績評価は各教員が明確な基準に基づいて行っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が新たな教授法を試したり支援を受ける時間的余裕がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が授業の成果についてフィードバックを受けたり与えたりする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学外でのコンサルタント活動やベンチャー企業経営等に関する制限が議論されている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員は学問的な指導を真剣に行っている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
定期昇給が教育成果と関連している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が学生課の職員と協力して働いている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学が、教員の労働時間が合法的な範囲におさまるよう指導をする	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教員が長期計画、予算、人事など重要な意思決定に参加する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
執行部の教育への貢献を教員が評価している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

5. 学生支援サービス

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
学生の様々な相談にカウンセリングサービスが対応する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が論文・レポートの執筆指導を受けられるサービスを提供する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生向けのタイムマネジメントセミナーを行う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
成績不振の学生に学習支援を行うプログラムを提供する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生課、学務課、学生自治会が協力・協同してオリエンテーションプログラムを実施する	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が他の学生のチューター、アドバイザー、リソース・パーソンとして活躍している	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が財政的援助に関して専門家から支援を受けられる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
教育目標が学生の行動目標で表現されている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生が在学中は同一のアドバイザーから指導を受けられる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学が学生の多様性に対応できるよう教員・職員・学生に研修を行う	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
奨学金は期限までに申し込んだ学生には授業開始時に支給されている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

6. 施設

○ あてはまる △ 少しあてはまる × あてはまらない ? 答えられない

	現在取り組んでいるか	取り組むべきだと思うか
教室の机・椅子が可動式である	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生と教員が面会できるラウンジなどが整備されている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
静かで集中できる学習スペースがある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
娯楽施設や運動施設が夜間、週末も開いている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
食堂が日中・夜間通じて開いている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
キャンパスに学生が自由に使えるビデオ視聴室、実験室、芸術活動用の施設がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
大学のコンピュータを利用できる	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学生、教員、職員が必要な数だけ備えた駐車場がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
日中・夜間に利用できる公共交通機関がある	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学期中は図書館が週末・夜間も利用可能である	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
夜間コースの学生のために事務室が夜間も開いている	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述欄

- ・「? 答えられない」とした項目について、なぜそのようにお答えしたかについてお教え下さい。
- ・上記以外に、各原則に関連して大学が実践されているアイデアについてお教え下さい。

特色 GP シリーズ3

『ティップス先生からの7つの提案』の開発

2005 年 10 月 20 日発行

発 行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 1
TEL 052-789-5696
FAX 052-789-5695
E-mail staff@cshe.nagoya-u.ac.jp
印 刷 アインズ株式会社
